法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

日本人の心を見にゆこう ： 神祇・釈教・恋・無常 ヨウとマイケルの対話

Nakanishi, Yo / 中西, 洋

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
社会志林 / 社会志林
(巻 / Volume)
61
(号 / Number)
1
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
73
(発行年 / Year)
2014-07
(URL)
https://doi.org/10.15002/00021173

日本人の心を見にゆこう

――神祇・釈教・恋・無常――

［ヨウとマイケルの対話］

中　西　　洋

目次

はじめに　――〈マイケルの独白〉

第Ⅰ章　《神祇》

1．スサノヲか？　アマテラスか？――「高天原」から「葦原の中国」へ

2．戦争なしの奪権；出雲の「国譲り」

3．神武 ≒ 崇神の神祇祭祀

4．「神山（おやま）」としての三輪山

5．応神と儒教

6．欽明と仏教

7．ウマヤド皇太子の憲法：〈和（やわらぎ）＝鰯（あまなひ）〉

8．天武による「神祇」国家の創出

9．〈神祇〉の国から〈釈教〉の国へ

10．民衆のなかの〈神々〉

11．《霊》――日本人の〈カミ＝神〉

第Ⅱ章　《釈教》

1．〈仏像＝寺院仏教〉としての出発

2．ウマヤドの学んだ仏法

3．インド仏教学の学習

4．最澄の法華経・実践‥‥「天台」

5．空海の‘呪術風仏教’‥‥「真言」

6．〈禅〉――シャカ・ムニの再興

7．日本禅宗諸派

8．ゴータマ教からアミダ教へ

第Ⅲ章　《恋》

1．日本人の歌＝「和歌」

2．紫式部の『〈ヒカル〉源氏』

3．西行の〈和歌〉

4．世阿弥の〈能〉
5．利休の〈茶〉
6．武蔵の〈兵法〉
7．芭蕉の〈俳諧〉
8．漱石の〈文芸〉
第Ⅳ章　≪無常≫
1．なぜ〈無常〉で終わるのか？
2．「諸行無常・是生滅法」［シャカ］
3．「生死即涅槃」［リュウジュ］
4．「厭離穢土・欣求浄土」［源信］
5．〈生霊〉と〈大和魂〉［紫式部］
6．「万物と我の一体」［道隆］
7．「無常迅速・生死事大」［道元］
8．「〈人極〉を立ざるべけんや――敬天・愛人」［南洲］

はじめに――〈マイケルの独白〉

（1）〈猫〉の復活

僕はクローン猫，名前はマイケル，どうやってこの世に生を受けたのか，全く知らない。生れたとき何も知らないのは誰だって同じだろうが，僕がいうのは母親を知らないってことだ。そういうと，隣りの家の三毛子（みけこ）婆さんがこう教えてくれた。「あれは確か夏の終りごろ。むっとする日差しでげんなりとしていたところへ突然黒い雲が空を覆って，ザーと夕立がきたかとおもうと，ゴロゴロ，ピカッーと一面の水しぶきで何も見えなくなった。そしてものの10分もしないで雨があがって明るくなったとき，お隣の中西さんの植え込みの下からニャーという弱々しい声がして，よろけ出てきた‥‥それがお前さ。不思議なことに母猫の姿がみえない。人間だって生みおとした赤児の面倒をみないものはない。まして猫ならと思ったのだが‥‥。お前は可哀そうだ。でも捨てる神あれば拾う神ありで，お隣のご主人がミルクで育ててくれたのさ。」

三毛さんがそういうのだから，そうなんだろうとは思ったが，まだ納得はいかない。僕の自分探しがこうして始まった。いろいろなことがわかってきた。この家は代替りする前は夏目さんという人の家で，主人の金之助さんは偶々小さな迷い猫を飼うことになったのだが，ロンドンに留学して帰ってきてまもなく，徒々までに身のまわりのことどもをエッセイにして世に問うた。東大の先生になったばかりの明治38年のことだった。冒頭の書き出しに「吾輩は猫である。名前はまだない」とあり，「‥‥名前はまだつけてくれないが，欲をいっても際限がないから，生涯この教師の家（うち）で無名の猫で終るつもりだ」と言っている。この小文がどうしてか人気を博し，10回も連載される

ことになり，夏目さんは大文学者になる計画をやめて小説書きになったというのだ。『吾輩は猫である』と題をつけられたこの書物は，僕が猫であるから贔屓するわけではないが，すごく面白い。漱石全集をすべて読んでみても断突だと思う。でも長い。未完に終った最終作『明暗』に次いで長いのだ。これを真面目に読み通した奴がどれだけいるのか？折にふれてたずねてみると，この本を知らない人はまずないが，知っているのは，生れたときから夏目家に何とか住み込んだ初めの部分と，客の残したビールで酔っぱらって甕の中に落ちておぼれ死ぬおしまいの部分だけである。「吾輩は死ぬ。死んでこの太平を得る。‥‥南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。ありがたいありがたい。」で終っている。

これは小説だからリアリティを云々する気はもとよりない。しかしこの「南無阿弥陀仏‥‥」はひどすぎる。もう書くのはくたびれたからやめたい，頭の中も空っぽになってしまったというので，〈猫〉は殺されてしまったのだ。不人情極まる。話がウソくさいというのではない。全くのウソなのだ。〈猫〉はこのあと明治41年９月まで生きた。「‥‥長い尻尾の毛が段々抜けて来た。‥‥彼れは万事に疲れ果てた‥‥」，「やっぱり年を取った所為でしょう」とあるから老衰だったと思える。「辱知猫儀久く病気の処療養不相叶昨夜いつの間にか，うらの物置のヘッツイの上にて逝去致候‥‥」と漱石さんは知人たちに書き送っている［明治41年９月14日］。「妻はわざわざその死態を見に行った。‥‥出入の車夫を頼んで四角な墓標を買って来て，何か書いて遣って下さいという。自分は表に猫の墓と書いて，裏にこの下に稲妻起る宵あらんと認めた。小供も急に猫を可愛がり出した。墓標の左右に硝子の罎を二つ活けて，萩の花を沢山插した。茶碗に水を汲んで，墓の前に置いた。花も水も毎日取り替えられた。三日目の夕方に四つになる女の子が‥‥たった一人墓の前へ来て，しばらく白木の棒を見ていたが，やがて手に持ったおもちゃの杓子を卸して，猫に供えた茶碗の水をしゃくって飲んだ。‥‥萩の花の落ちこぼれた水の瀝りは，静かな夕暮の中を，幾度か愛子のちいさい咽喉を潤おした。／猫の命日には，妻がきっと一切れの鮭と，鰹節を掛けた一杯の飯を墓の前に供える。今でも忘れた事がない。‥‥」『永日小品』のなかの「猫の墓」という文章の一節である。

ここまで来て僕は僕の出生の秘密を理解した。どこからか湧きあがった黒雲に乗ってあらわれた竜が口から稲妻のような火を吹き出し，地中に眠っていた〈猫〉を甦えらせた光景が眼にみえる。三毛子の証言は真実だったのだ。いま風にいえば，これはクローン猫の誕生だ。僕は「吾輩」猫の生まれ変りなのだと知ったのである。

〈猫〉が死ぬまで「無名の猫」だったことも漱石さんと「吾輩」とが疎遠だったことを物語っているのではなかった。彼は愛犬にヘクトーと名をつけて可愛がっているが，これはつまり主・従関係だ。「吾輩」は漱石も一目を置く見識の持ち主。この一人と一匹はイコール・フッティングの関係だったのだ。夏目一家の〈猫〉の祀りをみるとさっき不人情と毒づいたのは取り消さねばならない。僕の名マイケルは中西家の息子・純がつけた。色は茶トラだ。みんながマイクと呼ぶようになった。言い遅れたが，この家には古参の三匹がいる。銀ネズ色の美しい体毛をもつチャコ，彼女は若かりし頃通りがかりの人から50万円で譲ってくれないかと頼み込まれたほどの美猫であるが，そ

の息子がモルダー［モル］，娘がスカリー［スカ］である。モルは鳥を獲っては家にもって帰り，バリバリと音をたてて食べるが，家中に羽根をとび散らかすので評判が悪い。スカは身軽でどんな高いところにもスルスル昇るのを見ると，木登りの下手な僕は恥かしい。ネズミなんぞを獲るのも下手だ。ただ物覚えはイイ。一度イヤなことをされたりした人には絶対に寄りつかない。臆病だけど頭はイイねで通っているのだ。

（２）〈吾輩猫〉のＤＮＡ

僕を取りまく世界はまあざっとこんなもので少しはわかったつもりだが，でも一体どうして「吾輩」の死から百年もたったいまになって，僕の誕生，つまり‘猫の復活’が起きたのだろう。神のなせるわざと言われてもやっぱりわからない。

そんなことを考えていたとき，僕を拾ってくれた中西家のご主人からお声がかかった。この人をみんなが先生先生と呼ぶから，僕もそう呼ぼう。「私は君を教えたことはないんだから，先生‥‥はやめてくれ」とずっと言い続けて来たようだが，長年大学で先生をやって来たのだからしょうがないだろう。隠退して先生稼業をやめてからは平気で先生と呼ばれるようになった。先に生れたのだからと観念したのである。先生は言った；――

君はやっと自分の出自を理解したらしいから言うのだが，君はただの猫ではない。「吾輩」猫のＤＮＡを受け継いだ特別な猫なのだ。「吾輩」は魚や肉やを食べさせてもらっている点ではちょっと頭が上らないが，脳の出来方では大学教授の苦沙弥先生やもの知り顔の迷亭らよりずっと上だった。だが頭がいいというだけのことではない。「吾輩」は日本が西の方の国々の圧力を受けてどう対応したらよいかを手探りしていた時にたまたま生れたのだ。ほとんどの日本人は新しいもの好きだから，自分が育ってきた世界を弊履のように投げ捨てて西風になびいたが，ごくわずかな人はそれではいけないと悩んだ。「吾輩」の生みの親，漱石さんはそんな気持ちを「眼には識る東西の字／心には抱く古今の憂い／廿年昏濁を愧じ／而立［30歳］纔かに頭を回らす／‥‥」と詠っている。君の血にはこの近代日本のエリートの魂が遺伝しているんだ。それを自覚してほしい。

ところで私はといえば，いま‘自分を知ろう’というテーマに取りついている。「心抱古今憂」と言う漱石が行きついたといわれる「則天去私」といった結論は正しかったのだろうかという疑問も私の頭の隅に宿題として残ったままだ。私は語学の才能に乏しいので，彼のように「眼識東西字」などと胸を張れないが‘足で知る東西の国’位のことは言える。といっても，実際に歩いたのはユーラシア大陸とその周辺の30数ヵ国だけだから，とても世界を見たなどとは言えない。肝心と思った場所はかなり詳しく調べはしたのだが。いまでもまだ知らない土地への好奇心はある。だけど残っている時間との兼ね合いで考えれば，ここらでケリをつけることが賢明なのだろう。で，これから君を前にしてそのまとめをやってみたいのだ。何によらず，どこででも口を挟んでもらいたい。（洋）と（マイケル）のプラトン的対話に応じてくれないか？

先生はこう言って口を閉んだ。そんなこと僕に出来るもんか‥‥そう思ったが，おれも「吾輩」猫の後裔だ，尻尾を巻いて背をむけるわけにはいかない。「ようがす」と二つ返事でうけあった。

（３）神祇・釈教・恋・無常とは？

（ヨウ）　そうと決まれば，すぐにも取りかかろう。でも‘自分’を知ろうって言ったって雲をつかむようなものだ。この本の表題を「日本人の心を見にゆこう」とつけたのだが，〈心〉と言ったってどこからとりついたものか，そう考えているうちにブチ当ったのが「神祇・釈教・恋・無常」というおまじないのようなセリフだ。これは〈心〉という対象をとりあえず区切ってみるという効用がありそうだとまず思ったのだが，それだけじゃない。この４つの箱だけで日本人の〈心〉全部を仕分けられることがわかってきたのだ。

（マイケル）　僕にはその「神祇‥‥」云々は神主（かんぬし）の祝詞（のりと）のようにしか聞こえませんが‥‥

（ヨウ）　じゃァ君は俳句というものをつくったことはないか？といっても〈俳句〉というのは明治以降で，江戸時代までは〈発句（ほっく）〉と言った。これは好き同志が集まって‘５・７・５’と‘７・７’の句を交互に詠み続けてゆく〈俳諧（はいかい）〉の初めの句のこと――「発句」・「脇」（附句）・「第三」‥‥と進んで，「挙句」（揚句）でまとめる。芭蕉のころには36句を連ねて仕上げる「三十六歌仙」というものが流行（はや）った。明治になってこれは一時下火になって，子規などが‘俳句’ということを言い出したのだが，それも偶然ではない。集団で歌うのでなく，個人で歌うべきだという。これも欧化の流れのなかにあったのだ。しかし近頃は〈連句〉という形でまた俳諧が息を吹き返した。インターネットで顔見知でない人も参加できる連句会がいっぱいある。――この〈俳諧〉＝〈連句〉をつくるためのルール，これを「式目（しきもく）」というのだが，その式目のなかにまず必ず「神祇‥‥」が出てくる。

（マイケル）　僕はつくったことはないけど，『吾輩は猫である』のなかで苦沙弥先生に送られてきた年賀状に「書を読むや躍るや猫の春一日（ひとひ）」とあったのあの句は大好きだ。あれが俳句でしょう。

（ヨウ）　その通り。けれど，これを発句だと考えれば，それでは終らない。例えばこれに「霞（かすみ）に酔える鶯（うぐいす）の声」と附ければ「脇」だし，「第三（句）」で一転して，さっき引いた漢詩から――季語はないけど――「眼には識る東西の字」としてよいかも知れぬ。俳諧の36句は懐紙を２つに折り，和綴じにして，「初折（しょおり）」（１枚目）［表６句，裏12句］，「名残（なごり）の折」（２枚目）［表12句，裏６句］というように書きとるのだが，そのうちの初折表句６句（つまり最初のページ）には「神祇・釈教・恋・無常」を内容とする句は詠まないようにしようという約束事がある。なぜって，はじめからあまり真面目で深刻な話しにしてしまうとそのあとどうも調子がのってゆかないというのだろう。

　こうした「式目」は仲間うちの取り極めなのだから，それぞれの句会で勝手に決めてさしつかえない。なのに，みんな似ている。「神祇・釈教・恋・無常」はまず必ず出てくる。つまり，人の〈心〉の動きは千差万別だけれども，圧し縮めてゆけばその働きは４つの言葉に集約できそうだ。これはうまい分類だと思ったのだろう。

（マイケル）　なるほど。『猫』のなかで「吾輩の尻尾には神祇釈教恋無常は無論の事，満天下の人間を馬鹿にする一家相伝の妙薬が詰め込んである」と見栄を張ったのはそういうことなんだ。先生，やっぱり学がありますね。

（ヨウ）　学のあるところを聞きたいというのであればちょっと附け足そう。漱石が俳諧の実際に通じていたことはここで「一家相伝の‥‥」と言っていることからもわかるが，だからそこから直かに上の文句を引いて来たのだと理解してはおそらく正しくない。俳諧のあれこれの式目のなかではこれよりほかに数多くの句材が数え上げられていて――例えば花，月，雪，述懐，名所，人名，旅，夢，鳥，虫，魚，衣装，飲食，遊戯など――神祇・釈教・恋・無常もばらばらにそのなかに置かれていたのだ。これがひとまとめにいわば熟語化したのは，式亭三馬が『諢話浮世風呂』［文化６年（1809）］のなかで「‥‥神祇釈教恋無常みないりごみの浮世風呂‥‥」と書いて以来のことだと思われる。そしてもうひとこと言えば，三馬は私淑する山東京伝の『賢愚湊銭湯新話』［享和２年（1802）］からこの表現を――まったく断りなしに――丸ごと借りて来ていたのだ。

「――さっきから聞いてゐれば，謡もあればめりやす［江戸長唄の短いもの］もあり。触り文句に責念仏，神祇釈教恋無常これはとんだ乗合船だ一家も一門もない。きなかもの［田舎者］でござい。ごめんなさいまし。‥‥」

まずこんな風だ。日本近世の庶民文化は「銭湯」に凝縮されていたのだが，「吾輩」も少しあとで横町の「洗湯」に忍び込み，「裸体」文化を観察・批判して，「自然は真空を忌む如く，人間は平等を嫌う」という一大哲理を発見することになる。

そうしたわけで「神祇‥‥」をまとめたのは京伝＝三馬だと思えるんだが，その根は江戸初期にめちゃ流行った俳諧だ。それまではバラバラだったと言ったが，実は芭蕉の最も忠実な弟子だった故郷・伊賀の門人・土芳の著『三冊子』［元禄15年（1702）以降］の中の１冊「白雙紙」にもうこの表現が見える。「俳諧の式［目］」を論じて，「旅」の句は「つゞき二句にてするよし。多くゆるすは神祇・釈教・恋・無常の句，旅にてはなるる所多し」と書いてある。しかし，これは全くの例外だろう。そもそも芭蕉本人は俳諧の「式」にそうこだわっていなかった。「先づは大かたにして宜し」と言っている。

では一体，バラバラにではあれ，いつからこの「神祇」・「釈教」・「恋」・「無常」が言われるようになったのか？その源流を遡ってゆくと，俳諧の式目→和歌の歌合せ→和歌そのもの――というところまでゆく。このプロセスで式目の統一を計ったものとして二条良基の「応安［連歌］新式」［応安５年（1372）］が名高いが，そうした話しはいまはとばして，原点はと調べてみると，どうも西行の『山家集』［元永１年（1118）-建久１年（1190）］らしい。その末尾［下，雑］の「百首」はこんな部立［各10首］になっている。；――花。郭公。月。雪。恋。述懐。無常。神祇。釈教。雑。［花は春，郭公は夏，月は秋，雪は冬，である］そのなかから１首ずつを引いてみよう。

〈神祇〉（神楽二首）のうち

①　　めずらしな　朝倉山の 雲ゐより　したひ出でたる　明星のかげ

〈釈教〉（無量寿経三種）のうち

②　　悟りひろき　この法をまづ 説きおきて　二つなしとは　言ひきわめける

〈恋〉

③　　君をいかで　細かに結える　しげめ結ひ　たちも離れず　並びつつ見ん

〈無常〉

④　　言ひ捨てて　後のゆくへを　思ひ出でば　さてさはいかに　浦島の筥(はこ)

後藤重郎の校注によるそれぞれの大意はこうだ。

①珍らしいことだ，朝倉山の雲の辺から神楽歌にひかれ慕い出たかと思われる明星が光っている。

②悟りの広いこの法華経をほかにおいては，他に経はないと釈尊は断言されている。

③貴女とどうにかして，細かに結った鹿子絞りの目のように，離れることなく並び逢っていたいものだ。

④どうともなれと言い捨てたものの，来世のことを思い立ってみると，思慮もなく開いてしまった浦島の筥のように当惑してしまうことだ。

（マイケル）　大分(だいぶ)高尚になりましたね。僕には解り兼ねるが，つまりどういうことなんですか。

（ヨウ）　ウン，ひとつには，「神祇・釈教・恋・無常」という観念は日本古来の自己意識の総括なのだということ。２つには，それが時代を降って現代にまで生きつづけて来たということだ。そしてそれだから，日本人の〈心〉を調べてみようと思えば，古代の貴公子たちから近世の下々(しもじも)の洒落本・滑稽本などの作者たちまで目を通す必要があるということになる。近代以前にすでに江戸の町人文化のレヴェルは「四書五経」などばかり読まされていた武士たちを超えていたと言ってよいだろう。芭蕉が長年の句作の試みの末に，「高く心を語りて俗に帰るべし」［「赤雙紙」］という結論に達したのもこんな伝統をふまえてのことなのだ。

（マイケル）　わかったとは言わないけど，少し感心しました。

第Ⅰ章　《神祇》

１．スサノヲか？　アマテラスか？――「高天原(たかまがはら)」から「葦原(あしはら)の中国(なかつくに)」へ

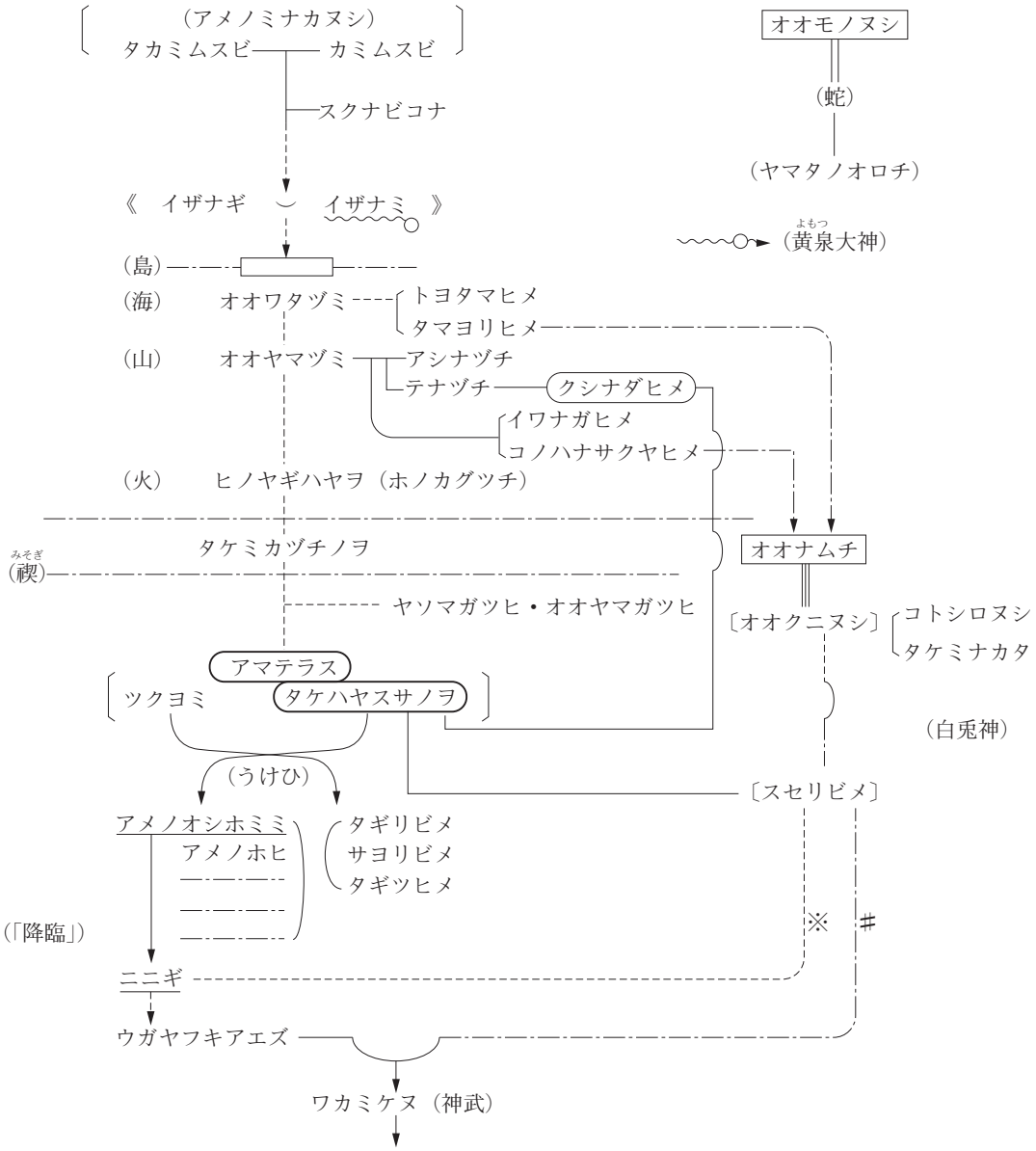
１）「高天原」の出現

（ヨウ）「天地(あめつち)の初めて発(ひら)けし時，高天(たかま)の原に成れる神の名は，アメノミナカンシの神［天の御中主神］。次にタカミムスヒの神［高御産巣日神］。次にカミムスヒの神［神産巣日神］。この三柱(みはしら)の神は，みな独神(ひとりがみ)と成りまして，身を隠したまひき。」［神・命の名はすべてカナ書きに改めた。以下同じ。なお図Ⅰ-1を掲げる。］

以上が『古事記』［太朝臣安万呂選述，712年］による日本にはじめて現れた〈神〉々の名だが，そもそも「高天原」とはどこにあらわれたのか？天空すべてを覆うといったものではなかったろうことは，うえに続けて，

「次に国稚(わか)く浮きし脂(あぶら)の如くして海月(くらげ)なす漂へる時，葦牙(あしかび)の如く萌(も)え騰(あが)る物によりて成れる神の

図Ⅰ-1 〈神代〉に活躍した神々



名は，ウマシアシカビヒコジノ神。次にアメノトコタチノ神。この二柱の神もまた独神と成りまして，身を隠したまひき。」

とあることから，明らかである。高天原から下を見下せば，下界は粘性の液体からなる海のようで，すでに堅まった大地の沿岸にひろがる浅瀬とみえる形状であったようだ。ユーラシア大陸の北東端，つまり日本の島々となるべき地である。

イ） ここからまず確かなことは，日本神話は極地的な，限定的な土地を舞台とする物語であり，そこにあらわれた〈神々〉は地球――ないし宇宙――総体の創造神ではないということで

あろう。そうした神はすでにどこかに在り，地球それ自体もすでに生れている筈であるが，ここでは暗黙の前提としてすでに語られなくなっている。つまりここでの〈神〉は‘はじめの神’ではなく，‘あとからやって来た神’なのである。

ロ） いま〈神〉を‘不生・不死’のもの――として‘超人’――であるとするなら，そうした‘在る’ものは，一体何をするのか，となろうが，説明がない。アメノミナカヌシは，どこから来たのでもなく，「成る」のであり，どこへ行くのかわからないが，「身を隠す」のであり，この世にある間，何もしたようにみえない。唯そうした行いは「独神」となったからだというのである。もとはといえば，‘対神’だったというのか？‘1人では何もできない神’，これが日本にあらわれた神なのである。事実，うえの文は更に続いて，

「次に成れる神の名は，クニノトコタチの神。次にトヨクモノ神。この二柱の神もまた，独神と成りまして，身を隠したまひき。」

とある。

2） 造り出す神

（ヨウ） 以上から押せば，日本の神々は，‘何かを造り出す神々’であるがそれは1人の仕事ではなく，対　神――おそらくは男・女1対の2神――によって行われるというのであろう。そうであるなら，〈神〉のしわざは〈人〉のそれから連想されたものと考えられてよさそうである。‘造り出す神’という推定は，以上7独神――『古事記』は，これを5柱の‘別天の神’とワニノトヨタチ，トヨクモの2神に別けているが，適切ではない。7柱として一括すべきであろう――のあとを，ウヒジコ・妹（いも）スヒジコ‥‥以下の8神およびイザナギ・妹イザナミの2神［計10神］に続けているが，それらの名からイメージされるのは，浮動してまだ固まっていない辺縁の土地に杙を打って，造り固める土地造成作業である。海中に「葦原の中国」＝日本の島々が姿をあらわしたのである。

3） イザナギ・イザナミの未完の国造り

（ヨウ） そして最後に神々は，イザナギ［伊邪那岐命］とイザナミ［伊邪那美命］の2神に「この漂へる国を修め理り固め成せ。」と要請し，2神は「天の浮橋」に立って，沼矛をかきならして淤能碁呂島（おのごろしま）をつくり，そこに降り立って国土（くに）生みにとりかかった。

はじめには失敗もあったが，「あなにやし，えをとめを」，「あなにやし，えおとこを」と呼びあって結ばれ，淡路島をはじめとする「大八島国（おほやしまくに）」をはじめとして，四国・九州およびその周辺の島々を生み，更にオホコトオシヲの神以下の35神を生んだ［島の数は14，紙の数は35神（家屋・海・風・木・山・野・霧・船・食物・火・吐瀉物・鉱物・屎・尿‥‥）］。しかし，その途次，イザナミはヒノカグツチ［火の神］を生んだとき陰部を焼かれて「遂に神避（かむさ）りましき」となる。ここで注意すべき点は，イザナミが死んだということ，つまり‘天上の神’の‘不死’という属性を失い，〈人〉となったことである。

イザナギはこの愛妻の亡骸を出雲の比婆の山に葬り，カグツチを切り，イザナミに会おうとして「黄泉国（よみのくに）」に尋ねてゆき，「吾（あれ）と汝（いまし）と作れる国，未だ作り竟（お）えず。故（かれ），還るべし」と呼び

かけるが，時すでに遅い。私を見ないでくれという頼みを待ち切れずに，「蛆たかれころろきて‥‥」という有さまを見てしまい「吾に辱見せつ」と怒ったイザナミとその軍勢に追われるが，かろうじて黄泉比良坂で３個の「桃子」に救われた。これによってみれば，イザナギもまたもはや天空の神ではなく，地上の人となっている。モモノミにむかって「汝，吾を助けしが如く葦原中国にあらゆる現しき青人草の苦しき瀬に落ちて患ひ悩む時，助くべし」と頼んでいる。‘国造り’ではその名が出なかった本州がはっきりと表現されて，実はこの時――無名ではあるが――すでに陸地として存在していたことを確かめうる。

４）　イザナギの「禊・祓」

（ヨウ）　地上に帰りついたイザナギは「吾は御身の禊為む」と言って，「身に着ける物を脱ぐ」ことでツキタツフナド以下の12神を生み，それに続けて，「御身を滌ぐ」ことによって，ヤソマガツヒ以下の14神を生んだ。生んだといっても，そうしようとしてのことではなく，もう「成った」のであって，肝心なのは，その最後に，禊・祓を経て，再び本来の〈神〉に戻ったイザナギが左の眼を洗った時，アマテラス［天照大御神］，右の眼を洗った時，ツクヨミ［月読命］，鼻を洗ったとき（タケハヤ）スサノヲ［健速須佐之男命］が「成った」ことである。イザナギはこれを「生みの終に三はしらの貴き子を得つ」と大いに喜び，アマテラスは「高天原」を，ツクヨミは「夜の食国」を，スサノヲは「海原」を，それぞれ治めよと指示した。

（マイケル）　余談ですが，ここで左と右の眼，そして鼻を連想しているのはいささか特異ですね。太陽と月とが左右のというのはしっくりしないし――鼻は活動を象徴するといってもよいでしょうが――‘五感’のうちで視覚に次いで働きの大きな聴覚，つまり‘耳’が連想されていない。日本人はどうも‘耳人間’ではないんですね。

　だが，そのためか否かはともかく，当時の生活で重要視されていた‘月’の姿には全く言及がなされない。そしてスサノヲの言動に注目が集まる。

５）　アマテラスとスサノヲの確執――「誓ひ」

（ヨウ）　スサノヲはなぜかはじめから悪人扱いだ。「僕は妣の国根の堅州国に覆らむと欲ふ」と泣くのをイザナギは大いに怒り，ではアマテラスに聞いてもらおうと出かけたが，「我が国を奪はむと欲ふにこそあれ」と疑われ，「僕は邪き心無し」と弁明して，その証しのため「天の安の河」で〈うけひ〉を行うこととなった。アマテラスはスサノヲのもつ十拳劔を「さ噛みに噛みて」タギリビメ以下３柱の女神を，スサノヲはアマテラスの髪につけた八尺勾璁を「さ噛みに噛みて」，マサカツアカツ・カチハヤヒ・アメノオシホミミ以下の５柱の男命を生んだ。いずれも自身の勝を主張したが，アマテラスはうけひに用いた「物実」が肝心なので，５柱の男子は自分の子，３柱の女子はスサノヲの子だと主張したので，抜き差しならぬ対立となった。スサノヲも勝ほこって，「営田の畔を離」つなどの所業に及び，アマテラスが「忌服屋に坐して，神御衣織らしてたまひし時‥‥天の斑馬を逆剥ぎに剥ぎて堕し入るる」ということまでしたので，怒って「天の石屋所」に籠って，世界は暗となって，大驚きとなった。一件落着のあと，スサノヲは高天原から追放された。

6） スサノヲの「中ツ国」への降臨

（ヨウ）（1） うえの神話の筋立には，どうも作意の跡がある。スサノヲの乱暴だけが語られているが，彼は姉神に救いを求めて高天原に上っていっただけであったのに，アマテラスは始めからこれを「必ず善き心ならじ」，反乱に違いないと武装もものものしく，「稜威の男建踏み建びて待ち」構えていたのである。『古事記』の編者のつけた呼び名もアマテラスだけを「‥‥大御神」とし，ツクヨミ，スサノヲはただ「命」と呼んでいる。「三柱の貴き子」ははじめから差別されていたのである。しかしもっと重大なのは，〈誓ひ〉の結果というだけのことでもあるかのように，５男子と３女子を入れ変えて，血統の祖をスサノヲからアマテラスに置き変えてしまっている。そして高天原の唯一の〈神〉として，彼女の専制的地位を確立させている。この地位が‘敬神’によるものではなかったことは印象的である。せいぜい‘太陽’に擬してのことなのか，と思うしかない。とはいえ，『古事記』編纂の実質上の指示者，天武天皇への配慮はあったろうことは疑いない。［すでに天武10年（681）に稗田阿礼に，帝皇日継および先代旧辞の誦習を勅してもいる］そしてこれはただの阿りとはいえない。壬申の乱［672年］の開始に当って「‥‥朝明郡の迹太川の辺にして，天照大神を望拝みたまふ。‥‥」との記録がすでにあり，のちの柿本人麻呂の歌にも「大君は神にしませば天雲の雷の上にいほらせるかも」とある。それなりに事実をふまえてはいたのである。

（2） だがそれにしても，『古事記』の叙述で，アマテラスは「三はしらの貴き子」の１人でしかなかったのと，『日本書紀』のそれとではまるで違う。イザナギ・イザナミが「吾已に大八州国及び山川草木を生めり，何ぞ天下の主者を生まざらむ」とのたまい，「是に共に日の神を生みまつります。大日要貴と号す」と，はじめから「天下の主者」である「日神」として生みだすと予告されている。しかしここでの作為は空虚でしかない。俗世の支配者・天武天皇の活躍の邪魔にはならない有益無害な「主者」にすぎない。弟のスサノヲが自由に世界をかけめぐりうる冒険好きな英雄だったのとは対照的に，アマテラスはただ「天の石屋戸」に身を隠して，自らが太陽光照を司どる神であることを示しただけだった。

にもかかわらず，『日本書紀』は，この「日の神」の表現にのせて，「日神の子孫」とか「天業」とかいう言葉を用いるようになり，しまいには以後の歴代天皇を「日嗣の御子」と呼ぶようになる。天皇は唯一絶対の存在でもあるかのようなイメージがつくられるのだった。

（マイケル）（3） 他方，スサノヲが悪人ではないことは，彼が‘中ツ国’に降り立ってからの事跡からも明らかです。出雲の肥の河上で，アシナヅチ・テナヅチ［「国つ神」・オホヤマツミ神の子］と名乗る老夫婦とその娘・クシナダヒメとまず出会い，年毎に来て娘を食ってきた「高志の八俣の大蛇」を退治している。十拳劔でその尾を切ったとき出てきたのが草薙の大刀で，これをアマテラスに献上した［のちの三種の神器の１つ］。そして老夫妻との約束でクシナダヒメを娶って幸せに暮したのです。

そのときの歌；――

八雲立つ　出雲八重垣　妻籠みに　八重垣作る　その八重垣を

は日本の和歌の発祥と伝わります。

7）〈神〉が〈人〉になる

（ヨウ）〈神〉がいつの間にか〈人〉になるというのは，どこの国でもみられることではない。〈神〉がひとをつくるとか，〈人〉が〈神〉を考え出したのだとか，いろいろな説があるが，それはどうでもよい。肝心なのはスサノヲは「中ツ国」に降り立ったとき神から人に変身したという事実である。『古事記伝』を書いた本居宣長は「神代の神たちも，多くは其代の人にして，其代の人は皆神なりし故に，神代とは云なり」と言い，「凡て迦微（かみ）とは古（いにしえ）御典（みふみども）等に見えたる天地の諸（もろもろ）の神たちを始めて，其を祀れる社（やしろ）に坐（いま）ス御霊（みたま）をも申し，又人はさらに云（いは）ず，鳥獣木草のたぐい海山なと，其余何にまれ，尋常（よのつね）ならずすぐれたる徳（こと）のありて可畏（かしこ）き物を迦微とは云うなり」と言っているが，これでは変化がわからない。これだけではアーカイックでナイーヴなアニミズムだ。

面白いのは，高天原に住んでいた〈神〉が中ツ国に降りてくればみな〈人〉になる，そういう変化が生ずるところだ。だからスサノヲは〈神〉だったが〈人〉になり，また〈神〉に戻れた。それで，‘君はどっちの住人になりたいか’と聞かれて，アメノホヒもアメノワカヒコも中ツ国をと選んだ。あそこは‘いたく騒ぎてありなり’と思ったのは，自分で行ったことのない‘高天原人’の偏見だったのだ。こうして‘神話’は終わって，古代人の時代がはじまった。

（マイケル）　とはいえ，万物に〈カミ〉を見る日本人の心性をただナイーヴなアニミズムと言ってやり過ごすのはどうでしょうか。近頃はアニミズムこそ世界に誇るべき日本の文化だと主張する人たちも出てきましたね。

（ヨウ）　ウン，「森の国，日本」って話だろう。森が〈神〉ガミの住むところだという観念が森の濫伐をくいとめ，人と自然との幸せな共生を可能にした。これは事実だと私も思う。どこの国へ行ってみても結局日本が一番住みいいと感ずるのは，ただ住めば都というだけのことではない。日照も雨も風も気温もほどほどで四季の変化もくっきりしている。そんなラッキーな自然環境のもとに出来た森なのだ。‘花鳥風月’とか‘雪月花’とかを賞でるなんてことを砂漠しかないアラブの国々で言ってみたって通じようもない。そんな森だから湧き水があり，小川があり，大小の樹があり，いろいろな草やコケ，シダの類も生える。アリ，クモ，ミミズなどの土壌動物も豊富だ。昆虫，鳥，川魚，イノシシ，蛇なども住む。一口に言えばみんな生きていて，それ自体が人間の生活の源（みなもと）なのだ。だから言葉の正確な意味で「有り難い」。漱石の〈吾輩猫〉がかめの中で溺れ死ぬとき，思わず「南無阿弥陀仏」とか「ありがたいありがたい」と口走ったのも不思議ではなかったわけだ。

（マイケル）　日本の〈カミ〉は何よりもまず「ありがたい」ものなのですね。

（ヨウ）　そうだ。でも問題なのはこの〈カミ〉＝〈神・霊〉が口をきいてくれないことだ。〈人〉の方でそれをこうだろうと忖度するしかない。

（マイケル）　じゃあ，くちをきいてくれる〈神〉たち，つまり‘人格神’といわれる神たちの方が有難くないものなのか。黙っている万霊の方が珍重すべきものなのか。

（ヨウ） 実際，自然環境に恵まれていないと，〈神〉も〈霊〉も愚痴や文句を言いたくなる。そして人がその文句をきかないと，恐ろしい顔つきになって命令するようにもなる。ユダヤの神・ヤハウェは「私は妬（ねた）む神である」と言い，キリストは「わたしが来たのは平和をもたらすため‥‥ではなく，剣（つるぎ）をもたらすためである。わたしは敵対させるために来た‥‥」と人々にせまり，アッラーは「何事もアッラーの御心のままに‥‥」と宣えよと指示する。これらのいわゆる「啓典」の神々は唯一人の神だというだけのものではない。人の世界とはかかわりのない天から降りて来て，上から人々に命ずるのだ。私たちの〈カミ〉ガミがもともと人であり，人のなかで傑出した存在として世に知られるようになったのとは全く違う。ヤハウェ，ゴッド＝キリスト，アッラー，これらの神々はみんな砂漠の生れだということも日本の〈カミ〉ガミが住みよい森の生れなのと対照的だといえよう。

（マイケル）「啓示」の神々がそれぞれに世界の征服を志して地球上に紛争をもたらすのに，日本のカミガミは沈黙を守って平和に暮してゆこうとしているわけですか？

8） 原日本人⇒縄文人の〈カミ〉vs 最後の弥生人の〈神〉

（ヨウ） おおまかにはそう言ってよいだろう。しかし，日本でも建国に当っては争いがあった。物言わぬ万霊のなかから自身を別格な存在であると意識するようになってきた〈人〉は――１人１人独立して生きてきたのではなく――全員がひとつの集まりをつくるのでもなく，親しい者同志の生活共同体を単位として生きている。いくつもの群がお互いに接触することなく存在していればそれで何事も起らないが，だんだん混み合ってくるとそうもいかない。チンパンジーの群（むれ）同士のような棲み別けの知恵が必要になってくる。そのうえ，あとから来たムレが力も強くて攻撃的な性格だとなれば戦いは必至だ。

（マイケル） 最初に日本に住みついた‘縄文人’にとって他者とは〈自然〉だったから，あれこれの自然現象に霊をみて〈カミ〉と言っていれば済んだけれど，あとから来た‘弥生人’との接触が大きな問題になると他者は何よりもまず〈人〉であり，〈カミ〉は人の形をした〈神〉になったわけですね。

（ヨウ） その通りだが，私にはどうも縄文人と弥生人という区別の立て方は気にくわない。それに重ねて狩獲採集と水田耕作という例の図式だろう。日本人の出自というか素性というか，これがイメージできない。遺跡の発掘が進んでゆけばこれからもどんどん変わってゆくだろうが，私の推理は日本人のルーツは何といっても，古中国人――古くから中国大陸に住んでいた人たち――だ。北アジアから今の本州北部に降りてきた者たちもあった。いずれにせよ，縄文土器を使う以前――旧石器時代――の人たちがBC２万数千年には住んでいたことが確認されるようになっているから，大陸と陸伝いに交通できるようになった更新世（洪積世）末の氷期にはもうナウマン象やマンモスと一緒に〈原日本人〉も日本に住みついていたと思われる。BC1万年前後から始まるいわゆる縄文期にはこの原住日本人が土器をつくるようになり，気温上昇によるいわゆる‘縄文海進’によって大陸から分立したこの地にあらたに渡来人が加わった。その主流は南から北へ，暖流に乗って中国南部・東南アジア・台湾・沖縄というルートを上って

くる。この流れは九州に止まらず，関東近辺にまで達した。こうして縄文期の文化がゆっくりと６～７千年もかけて熟していったが，１万４～５千年前から日本の国土はひろくブナ・ナラなどの樹木に覆われるようになって，海辺の小高い丘で，近くに森のある土地が彼らが竪穴住居を営むかっこうの場となった。‘森の人’が〈カミ〉ガミを祭る牧歌的世界だ。しかしBC５世紀ごろ北から朝鮮半島を経てよく組織された一大部族の集団的移住が発生した。‘縄文人’世界への最後の‘弥生人’の侵入である。人々の記憶が口承されて，ずっと後の『古事記』『日本書紀』に記録されることになる‘国譲り’というのはそれなのだ。

２．戦争なしの奪権；出雲の「国譲り」

（マイケル）　そこから日本の歴史時代が始まるのでしょうが，一体なぜこの時‘朝鮮族’の日本への渡来が起ったのでしょう。

（ヨウ）　中国本土で春秋・戦国の動乱［BC６世紀初～BC221年］がいつ果てるともなく続いたそのインパクトが朝鮮にも及んだのだと思う。この最後の渡来部族は，だからすき好んで日本へ来たのではない。海外亡命に近かった。「高天原」の支配者に任命されたアマテラス［天照大御神］がその長男アメノオシホミミ［天忍穂耳命］に天降りの準備を命じたとき，彼は「天の浮橋」から地上を観察して「豊葦原の千秋の長五百秋の水穂の国は，いたく騒ぎてありなり」との報告をアマテラスに上呈している。しかしだからといってやめるわけにはいかない。「天の安の河の河原」に「八百万の神」を集めて大評議が行われることになったのだった。

　アマテラスの名のもとに，タカミムスビが主宰したこの集会で，まずアマテラスの次男アメノホヒ［天菩比神］をこの「道速振る荒振る国つ神等の多なる」「葦原の中つ国」に派遣することになったのだが，３年たっても復命せず，やむなく次いでアマツクニタマ［天津国魂神］の子，アメノワカヒコ［天若日子］を送ったが，これも８年たっても帰ってこなかった。「中つ国」は実際には住みいい国だったのだ。ともあれ，いずれも出雲の国を支配するオオクニヌシ［大国主神］に懐柔されてしまったのだ。そこで第３陣として武人として知られるタケミカヅチノヲ［建御雷之男神］とアメノトリフネ［天鳥船神］の両名が強談判に及ぶことになった。オオクニヌシは彼の長子ヤエコトシロヌシ［八重言代主神］と次子タケミナカタ［建御名方神］の意向を問うてくれと答え，彼らの「恐し。この国は，天つ神の御子に立奉らむ」との応答をうけて，「僕は違はじ」と最終的に国譲りに合意した。自分の住所を立派に創ってくだされば引退する，子どもたち「百八十神」はコトシロヌシの統率に従って仕えるだろうというのであった。これをうけてタケミカヅチは「葦原の中つ国を言向け和平しつる」と復奏している。

（マイケル）‘平和的に説得した’という報告なのですが，全く抵抗はなかったんでしょうか。オオクニヌシの子どもは181人［『紀』］もいたというのに。

（ヨウ）　いや，全くというわけではない。コトシロヌシは二つ返事で承諾しているが，タケミナカタは「力競べせむ」と自ら挑んで敵ねず，逃げて追いつめられて殺されかかって，やっと降伏

したのだった。タケミカヅチ［＝雷神］が強かったというだけではない。中国大陸では春秋時代から鉄器の使用が始まっており，「天つ神」たちは鉄の剣・矛・戈で武装していたのに，「国つ神」たちの武具は青銅器であって，軍器自体ですでに太刀打ちできなかった。しかしそればかりではない。中つ国では個別的な小競り合いはあっただろうが，外国から進攻してくる強力な部族集団を迎えうって戦争をするといった体験はない。原日本人⇒縄文人は平和を当然のこととして暮してきたのである。他方の天つ国＝朝鮮渡来人も好きで戦いを挑んだわけではない。アマテラスの指令も「その国の荒振る神等を，言趣(ことむ)け和(やは)せ」と平和的外交交渉をもって臨めというものであった。

1） 出雲の神・オオナムチ

（マイケル） それにしてもこの国譲りの話しは拍子抜けですね。オオクニヌシと掛け合ったといいますが，もしそうなら「中つ国」はすでに統一‘国家’のような体裁のものになっていたことになる。オオクニヌシ［大国主命］つまり‘大いなる国土の主宰者’という名もあとからとってつけたように思える。オオナムチ，アシハラノシコオ，ヤチホコなど5つの別名をもつとされていることも異例だ。バラバラに各地の有力者たちがいて，――しかし，それぞれの力は大きくはなく――交渉はそう簡単ではなかったと考えるのが自然ではないですか？

（ヨウ） その通りだ。譲られたのは中つ国全体ではなく，‘出雲の国’に限られていたことは，その代償として建ててもらった社(やしろ)が出雲大社になるということからもわかる。‘白兎神［稲羽素兎］’のエピソードもそうだが，自身が兄弟たち［「八十神」］の迫害に耐えてスセリヒメを妻とする話など，オオクニの名で書きはじめながら，すぐオオナムチの活躍に切り換っている。どうもオオナムチ［大己貴神・大穴牟遅神］が出雲を支配していた神あるいは人だったのではないか？『出雲風土記』はオオナムチを「天下(あめのした)造らしし大神」と称えている。

2） スクナビコナの協同

（ヨウ） 中つ国の経営はしかし，オオナムチ1人で成ったわけではない。スクナビコナの協力があったことは，『紀』のなかに，「夫(か)の大己貴命と少産名(スクナビコナ)命と，力を戮(あわ)せ心を一(ひとつ)にして天下(あめのした)を経(つく)営る」と記されている。このスクナビコナは小男だが頭はよく，白蘞(かがみ)と言う薬草の皮でつくった舟にのり，みそさざいの羽根を衣にして海から出雲の小汀(をはま)にやってきたのだった。は‘造化三神’の1人，カミムスビ［神産巣日神］の子であって，国造りの仕事が一段落すると「常世(とこよの)郷(くに)」に去っていったという。『万葉集』にも「大穴道少御神の作らしし妹背の山は見らくしよしも」［柿本朝臣人麻呂］とあって，この説話はひろく知られていた。やはり出雲の主神はオオナムチだったのだ。

（マイケル） なるほど。‘国つ神’と‘天つ神’との間にも建設的な協力関係が生れるようになってきたのですね。

3） オオモノヌシこそが日本最古の神である

（ヨウ） この話しにはまだ先がある。オオナムチは，スクナビコナが去ったあと，「吾独(あれひとり)して何(いか)にかよくこの国を得(え)作らむ。」と「愁ひて」告(の)りたまうた。ところが「この時に海を光して依り

来る神ありき。その神の言りたまひしく，『よく我が前を治めば，吾能く共与に相作り成さむ。若し然らずは国成り難けむ，』とのりたまひき。」そこで「大国主神」つまりオオナムチが「『然らば治め奉る状は奈何にぞ』とまをしたまへば，『吾をば倭の青垣の東の山の上に拝き奉れ』」と答えた。「こは御諸山の上に坐す神なり。」

ここではまだその名を明らかにしていないが，この神がオオモノヌシなのであった。以上は『記』の記すところだが，『紀』は違う。話の大筋は同じだが，ここに現われた「神」は別人でなく「吾は是汝が幸魂奇魂なり」と名のるのだ。

（マイケル）　日本の神話で人の魂を荒魂と和魂に分け，後者を更に幸魂・奇魂に分けるということが出てきますが，どうも納得がいきませんね。国造りは荒魂だけでやって来たとでも言うんでしょうか？中国でいう〈魂・魄〉を独自に布衍しようとしたのでしょうが，どうも如何わしい。

（ヨウ）　ここの話しでいえば，出雲のオオナムチと倭のオオモノヌシとが前からいるということを認めたくない。つまり，天つ神たちの「降臨」以前に原日本ないし初期縄文期以来の国つ神がいることを認めたくない。だから『紀』の一書［第６］がオオクニヌシの「亦の名」として，オオモノヌシ，クニツクリノオオナムチ，アシハラノシコヲ，ヤチホコ，オオクニタマ，ウツシクニタマと自身を含めて７つの名をごちゃまぜにしてすることにもなったのだ。それで古代の神について一番肝心なことがわからなくなってしまった。それに比べると『記』の方は５神の名を挙げるだけで，オオモノヌシとオオクニタマ［恐らくは「大国魂神」のことであろう］には言及していない。それが事実に近いのだろう。この２神は天つ神としてのスサノヲが中つ国にやってくる前からの‘国つ神’だったのだ。

このオオモノヌシとオオナムチとは当然ながら天つ神への対応が違う。天つ神は，オオナムチに対しては融和的だ。ホノニニギの天降りに先陣をつとめるタケミカヅチとフツヌシがオオナムチに「汝，将に此の国を以て，天神に奉らむや否や」と問うたのに対して直ちには応じない旨を答えると，その報告をうけたタカミムスビは，「今，汝が所言を聞くに，深く其の理有り」と理解を示し，「夫れ汝が治す顕露の事は，是吾孫治すべし。汝は以て神事を治すべし。又汝が住むべき天日隅宮は，今供造まつらむ‥‥，‥‥宮を造る制は，柱は高く大し。板は広く厚くせむ。又田供佃らむ。又汝が往来ひて海に遊ぶ具の為には，高橋・浮橋及天鳥船，亦供造りまつらむ。又天安川に，亦打橋造らむ。‥‥」と彼の譲歩へのせい一杯の代償を提案した。オオナムチは「天神の勅教，如此懇懃なり。敢へて命に従はざらむや。吾が治す顕露の事は皇孫当に治めたまふべし。吾は退りて幽事を治めむ。」と答えて，このさきは岐神・サルタヒコ［猿田彦神］にゆだねて，「吾，将に此より避去なむ」と引退を表明している。

他方オオモノヌシには厳しい。タケミカヅチとフツヌシはサルタヒコを先導として「周流きつつ削平ぐ。逆命者有るをば，即ち加斬戮す。帰順ふ者をば，仍りて加褒美む。」としているが，「是の時に帰順ふ首渠は大物主神及び事代主神なり。乃ち八十万の神を天高市に合めて師ゐて天に昇りて，其の誠款の至を陣す」と，被征服者として扱っている。そのうえタカミムスビはなお，「汝若し国神を以て妻とせば，吾猶汝を疎き心有りと謂はむ。故，今吾が女三穂

津姫を以て，汝に配せて妻とせむ。八十万神を領ゐて，永に皇孫の為に護り奉れ」とのたまひて，乃ち還り降らしむと命じている。一口に‘国つ神’とは言っても，オオナムチは天つ神の血統を引く神であるのに，オオモノヌシは天つ神とは全くかかわりをもたない先住の中つ国の神だという違いである。

（マイケル）『紀』をみると，オオナムチをスサノヲとクシナダヒメの最初の「児」だと言ったり［本文］，「六世の孫」だとしたりして［一書・第２］，わけがわからない。またオオクニヌシを両神の息子の「五世の孫」だとも言い［一書・第１］，『記』がオオクニヌシを両神の６世の孫と数えていることに調子を合わせようともしている。そしてそんな末梢のことにこだわりながら，もっとも肝心な縄文以前の〈カミ〉と弥生以後の〈神〉を意図的に混ぜ合わせている。この点では宣長も全然ダメで，オオモノヌシとはタカミムスビがオオナムチに賜わった名だろうと見当違いな推定を下している。それでも彼はまだいい。一般の歴史家は考えさえもしない。オオモノヌシやオオクニタマがどのようにして生れたかは『記』『紀』に書かれていないから知らないという態度です。困ったものですね。

（ヨウ）　君もずい分立派なことを言うようになったなあ。

３．神武≒崇神の神祇祭祀

１）　崇神王朝先史

（ヨウ）　さて，『記』『紀』のいう「神代」が終って「天皇」の代に入ると，古への〈神〉々は‘祀り＝祭り’の対象とされるようになる。だが，初代神武は筑紫の「日向」の地で「此の［国の］偏を治す」というだけの地位から出発し，よき地を求めて「なお東に行かむ」と希み，ようやく倭の地にたどりついたのであって，ゆっくりと神祇を祀るいとまはなかった。東方の諸々の国つ神との戦いは神武ひとりでは手に負えず，アマテラス，タカミムスビ［タカギ］の天つ国からの助成をたのみタケミカヅチの「横刀」の降下，道案内の「八咫烏」の派遣などを得てようやく倭の地・橿原宮を造営し，「即帝位す」ことができたのだった。「神代」はまだ完全に過去のものとはなっていなかった。『紀』には「神祇［あまつやしろくにのやしろ］を礼び祭ひて」といった言葉は出てくるが，そうすべきだというまでであって，「今当に天香山の埴を取りて，天平瓮を造りて，天社国社の神を祭れ」との夢のお告げをうけて，「天皇‥‥躬自ら斎戒して諸神を祭りたまふ」というほどを出なかったのだ。どうみても『紀』の編者の装飾でしかない。だから話しがまことしやかになるのは第10代の崇神の代になってからである。

因みに，イ）「天皇」という言葉は７世紀初めの対隋の外交文書ではじめて使われた［「東天皇敬白西皇帝」（608年）］。これは中国の「天子」と「皇帝」という表現を重ねたものと思われる。ロ）また，以下で用いる「神武」‥‥「崇神」‥‥といった‘漢風諡号’も，８世紀になって，淡海御船が（大学頭并文章博士，722～785年）が撰んだものである。イ）・ロ）いず

れも『記』『紀』の原本にはないが「国風諡号」は長々しいので，以下では便宜にこれらを用いよう。原本では神武はカムヤマトイハレビコ，崇神はミマキイリビコイニエだ。

（マイケル）　この節のはじめに，神武と崇神は同一人物なのではないかという見方があると聞きましたが，先生もそれに賛成するんですか？

（ヨウ）　いや私は違う。倭王朝の成立は崇神にはじまるとみるのだ。神武の‘東征’は北からの最後の渡来人である「天つ神」族が倭の地にたどりつくまでの歴史的経過の崇神による回想とみるのだ。私がいま仮に‘倭王国成立史’を書くとすると，それは序説－崇神王朝先史；第１章－崇神王朝の成立；‥‥となる。第２代綏靖から第９代開化までは実在しないというのが大方の説であるが，この通説に立てば，では何故『記』『紀』がその無いものを記しているのか？という疑問に答えられない。確かにこの部分は中味に乏しい。出来そこなった‘戸籍謄本’を読むといった塩梅で，誰を娶って何という子をもうけたか，当人は何歳で死んだか御陵はどこにあるか‥‥それしか書いていない。しかし，崇神にとってはやはりこの部分も書く意味はあったと私は思う。彼の先祖は神武だけでない。倭にたどりついてから，数多くの国の神々ないしその臣下と姻戚関係を結び，その勢力を築いていった経過をスケッチしているのだ。何々の県主・稲置・臣・君・直・連・国造。‥‥の祖’といった風に子供らの名のあとに分注してあるのはこれを含意している。

（マイケル）　‘神話’というものは文字づらのまま呑み込んでもいけないが，勝手な解釈で編者の捏造と片付けてしまってもいけないんですね。

（ヨウ）　そうだ。念のためにいうと，崇神は「初国知らしし御真木の天皇」と『記』のなかに言われており，『紀』でも同様に「御肇国天皇」と崇められているのだが，『紀』はそればかりでなく，神武も「始馭天下之天皇」と「古語」に言われているとしている。この『紀』の叙述から‘神武＝崇神’と推理する者もあるが，これはおかしい。神武に対して始めてこの国を統治した君主と言ったのなら，第10代崇神にそれを繰り返すわけはない。『記』が崇神についてだけそう言って，神武には何も言っていないことが真相をあらわしているというほかはあるまい。そしてもしそうだとすれば，初代神武の影もおのずと薄くなる。私が初代～９代までを‘崇神王朝先史’とまとめる理由もそこにある。

２）　崇神王朝

（マイケル）　で，その実質初代の崇神の政治はどんなものなのでしたか？

（ヨウ）　何よりもまず「神祇」の祭祀だ。政治は祭事だからね。たまたま「この天皇の御世に，疫病多に起こりて，人民死にて尽きむとしき」という大凶事が生じた。崇神が困りきっていると，ある晩の夢にオオモノヌシがあらわれて「こは我が御心ぞ。故，オオタタネコ［意富多多泥古］をもちて，我が御前を祭らしたまはば，神の気起らず，国安らかに平らぎなむ」とのお告げがあった。オオタタネコを探し出して問うと，自分はオオモノヌシがイクタマヨリビメ［活玉依毘売］を娶って生まれた子だとの答え。そこで直ちに彼を「神主」として「御諸山」［＝三輪山］に意富美和の大神の前を拝き祭りたまひき」これによって「役の気悉に息みて，

国家安らかに平らぎき」となったというのである。

三輪山は神武東征の終着地であり，いま崇神が王朝を確立しようとしている倭の地，奈良盆地の東南隅のすぐ東側に位置する。その山の「大神」，これがオオモノヌシなのである。そのオオモノヌシが「こは我が御心ぞ」と告げて，この神自らが意図してこの大疫病を惹き起したと言うのである。つまり倭の地に昔から鎮まる国つ神をあとからここへやって来た「天皇」一族がないがしろにしていると怒ったのだった。繰り返していうが，この「神」はまさに万霊神としての〈カミ〉であるから‘原日本人’ないし縄文人の神であり，さきに論じた天つ神の血を継ぐオオナムチやオオクニヌシとは出自を異にする〈カミ＝神〉なのだ。

同じような例をいまひとつ挙げよう。崇神の次の第11代垂仁の后，サホヒメ［沙本毘売］の子の１人，ホムチワケ［本牟智和気］は成長してからも言葉を話せなかった。それはサホヒメの実兄サホヒコ［沙本比古］がスイニンの暗殺を計り誅されたとき，板ばさみになったサホヒメが生れたばかりのホムチワケを残して死んでしまったという悲劇にかかわっていたのだと思われる。スイニンが心を痛めているとき夢枕に立つ者があり，「我が宮を天皇の御舎の如修理りたまはば，御子必ず真事とはむ［口をきくようになろう］」と言う。一体これは誰かと「太占」で占なうと，「その祟りは出雲の大神の御心なりき」で，これはオオナムチのしわざなのであった。そこでホムチワケに２人の王をつき従わせて出雲に行き「大神を拝みたまひしによりて大御子物詔りたまひき」となる。天皇はこれを喜んで新たに「神の宮を造らしめたまひき」という次第になった。

（マイケル）〈カミ〉は縄文期には‘有難い’存在だったのに，弥生期になって，特に倭王朝期以降，‘タタリ神’に変ってしまったわけですね。僕はタタリ神といえば大宰府に左遷されたまま死んだ菅原道真の霊を祭った北野天満宮あたりが一番古いかと思っていたのだけれど‥‥。

（ヨウ）　そうじゃない。日本の〈カミ⇒神〉のベースには苛めにあった弱い人の怨みが古くからあるのだ。立派な人の霊を慕うという以前にね。だから日本で〈神〉というと，何か暗い感じがつきまとう。

しかし崇神は主観的にはどの神も差別する気はなかった。はやくから「天照大神・倭大国魂，二の神を，天皇の大殿の内に並祭」ってきていたのである。しかし「其の神の勢いを畏りて，共に住みたまふに安からず」と思うようになって，両神を宮殿の外に祭ることとし，「天照大神」はトヨスキイリビメに託して「倭の笠縫邑」に，「日本大国魂神」はヌナキノイリビメに託して，それぞれ祭ることとした。後者は三輪山の神だから，外へ移すというのではなく山に戻したのだろう。オオモノヌシ自身，「我は是倭国の域の内に所居る神」と名乗っている。他方，前者の笠縫村の場所については諸説があって明らかでないが，その点はともあれ，アマテラスはこの村に落ち着いたのではなかった。次の垂仁の治世になってから奉仕の皇女［斎王］をヤマトヒメに変え，大神鎮坐の場所を求めて，［大和国］菟田→近江→伊勢とめぐり，そこでアマテラスが「是の神風の伊勢国は常世の浪の重浪帰する国なり，‥‥是の国に居らむと欲ふ」と言うので「其の祠を伊勢国に立て‥‥斎宮を五十鈴の川上に興つ」ことにし

たのだった。『紀』は，これが「天照大神の始めて天より降ります処なり」といっている。いまの伊勢神宮の起源の説話だが，研究者の大方はこの地には古く‘日の神’を祭る神社があり，それが皇室と結びついたのは‘壬申の乱’以後のことだろうと見ている。それが妥当だと私も思う。だがその点はともあれ，アマテラスがこの国に永住の場所を見出すまでに85年［崇神６年～垂仁25年］もの時日を要したことは見逃せまい。天皇の主たる関心事は‘皇祖’アマテラスにではなく，オオモノヌシにあったのである。

４．「神山」としての三輪山

１）「大神神社」

（ヨウ）〈原日本人→縄文人〉が崇めた〈原日本神〉の１人，オオモノヌシがいまも三輪山に生きている筈だ。‥‥私はそう確信して三輪［美和］の地を訪れた。奈良県桜井市，大和盆地の東南隅に位置する三輪山は標高467m，周囲16㎞，面積350ha，遠望すればすげ笠を伏せたような優美な山である［図Ⅰ-2］。道標に「三輪明神」「大神神社」と両様に書いてあるのでどっちが古来の名称なのか戸惑うが，――前者はおそらく‘神仏習合説’後のもので――おそらく後者なのだろう。しかし「神社」という呼び方も後年の命名であって，もともとは「社」というものがないのがこの古来の神の宮の姿である筈だ。

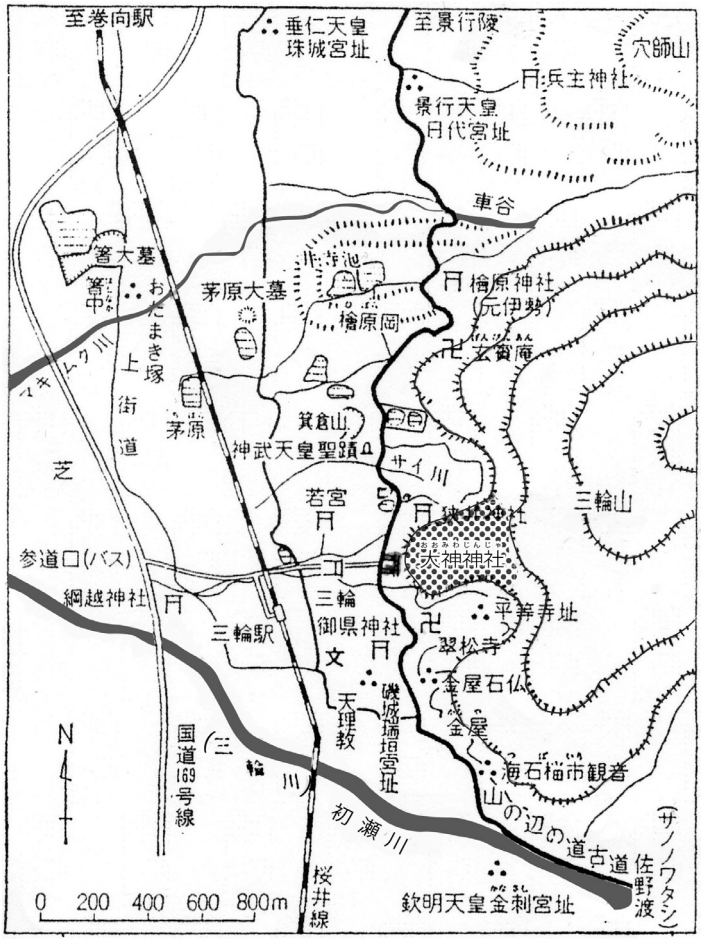
森といった方がよい小山の麓に「三ツ鳥居」だけが立っている‥‥読んだものからそう想像していた私は，立派な，しかしどこにでもみるような社殿が立っていて鳥居などどこにあるのかわからないのをみてがっかりした。まだ若い青年といった感じの禰宜の案内で社殿の中に入ってみると，たしかに鳥居がないではない。「これは本殿ではありません。拝殿なのです。」という説明である。「でもどうしてこんなに鳥居がみえないようにぴったりくっつけて拝殿を建てたのですか？」［図Ⅰ-2-3　図上には鳥居がみえるかのように画かれている！］「そうですね‥‥」はかばかしい答えがない。「いつ頃建てられたのでしょうか？」これもわからない。神社に遺る旧記には花園天皇［第95代］の文保元年（1317）に拝殿造営の記録があるという。しかしこれが初めのものともいえまい。ここを訪れた宣長の日記に「かの御社の鳥居の前にゆきつきぬ。‥‥神のみあらかはなくて，おくなる木しげき山を拝み奉る」とあるのは神社の説明をそのままにのみ込んで疑わなかったのだろうが，彼ほどナィーヴでない私は納得できなかった。

（マイケル）　崇神紀に記事はないんですか？

（ヨウ）　いや，崇神８年12月20日条にオオタタネコをもって「大神を祭らしむ」とあって，活日という大神の「掌酒」に任命された男が神酒を挙げて天皇に献り，「此の神酒は我が神酒ならず倭成す大物主の醸みし神酒幾久幾久」と歌って，「神官に宴す」となった。この宴が終って「諸大夫等歌して曰はく

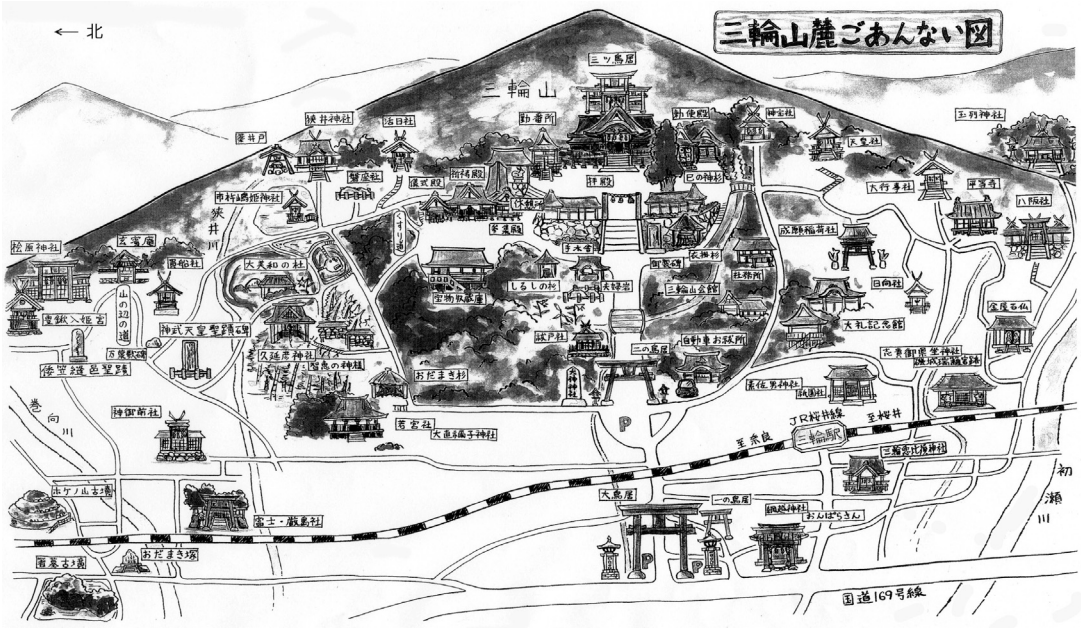
味酒　三輪の殿の　朝門にも　出でて行かな　三輪の殿戸を

図Ⅰ-2-1　三輪山と大神神社



図Ⅰ-2-2　大神神社の「拝殿」[正面]

図Ⅰ-2-3　三輪神社全景



大神神社配布パンフレットより

茲(ここ)に，天皇歌(すめらみこと)して曰(のたまわ)く

味酒　三輪の殿の　朝門にも　押し開(ひら)かね　三輪の殿戸を

即ち神官の門(みかど)を開きて幸行(いでま)す」とある。

三輪山の麓を「神の宮」とみたてて，そこで天皇はじめ上級官人たちが「神酒」を汲み交して大宴会を催し，それは朝までも続いてやっとお開きになった。みんなで大声で合唱して会場を出てゆく。宴のために仮設された「殿(との)」ないし社(やしろ)の出入口＝「戸(と)」を開いて退場してゆくという情景である。「神宮の門」とあるのが鳥居なのだろうか。普段は閉じられたままになっている‘三つ鳥居’を「開きて，幸行す」と終っている。もちろんそれがどんな形状のものだったかは知るよしもないが，この神社の「社記」に「古来一社の神秘なり」と記されているユニークな現在の姿を図Ⅰ-2-4として示そう。「三つ」と言っても扉は中央だけで内開きの厚板の門である。

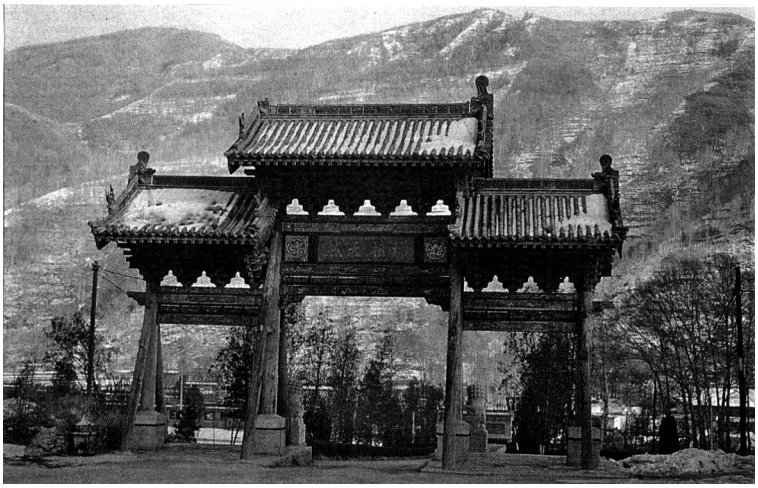
（マイケル）　この宴会というのは，ものの本に言う「直会(なおらい)」でしょう。少しあとに神社ができるようになる頃からそう言われるようになった。山の大きな杉の木を「神籬(ひもろぎ)」と呼んで，それを伝って〈カミ＝神〉が降臨するとイメージした。また山のあちこちの「磐座(いわくら)」と呼ぶ石を神の鎮座するところだというけど，果してそこにおとなしく座っていたのかどうか。ともかくそうした神々を麓の平場に招いて人々と神々のパーティを開いた。これがお祭のはじめだと考えてよいのでしょう。

（ヨウ）　大体そんなものだが，この祭り事が政(まつり)り事でもあった。大君(オオキミ)［＝天皇］の主宰する中央豪

図Ⅰ-2-4　三輪山の「三ツ鳥居」

構造模型　大神神社HPより

（参考）中国‘五台山’殊像寺の牌楼



族集団の定例会議だ。

（マイケル）　議論でなく酒盛りで倭（やまと）王国の一体感を醸成する。これは今でも会社や学校で‘ノミ会’とか‘コンパ’とか言ってやっているやつですね。

（ヨウ）　で，私は案内の禰宜に確かめた。「この‘三つ鳥居’の奥はすぐ林になって後ろの山と区別がつかないが，しばらくは平地になっているのではないですか？」「いや，全くおっしゃる通りです。」「それは昔の‘直会’の場なんでしょうネ。」［前掲図Ⅰ-2-1参照］「そうだと思います。この場所から，たまたま5世紀前後の子持勾玉，土師器，土製祭祀用具，須恵器などがみつかっています。」「ちゃんと掘ったらもっと古い物も出るんじゃないですか？」「そうかと思いますが，もうずっと前からここは禁足地とされているので入れません。発掘なんてとても

‥‥。」何かが見つかれば，日本の〈カミ〉も倭政権の形成年代もはっきりするだろうになぁ‥‥と私は思うが，神社がただただ「神秘」にしておきたいというのだから仕様もない。

（マイケル）　一説にこれは中国の道教に由来するのではないかともありますが‥‥。

（ヨウ）　私も境内であったあの近所に住むおばさんからそう聞いた。でも道教って何なのか，日本人で知る人はほとんどいない［星野・中西洋『インドと中国の真実』2007年を参照］。４柱で中央部が左右より一段高くなっている牌楼は中国では珍しいものではない。仏教のメッカともいうべき五台山でもいくらでも見られる。例えば殊像寺のそれである。それが‘三尊’を祀る形状だというなら，道教の三尊［もっとも古くは，太上老居（中央）・太上道君・元始天尊］は大乗仏教の三尊［典型的には，釈迦（中央）・文殊・普賢］の単なるものまねだ。日本のいわゆる３‘造化三神’［アメノミナカヌシ（中央）・タカミムスビ・カミムスビ］に至っては唯の数合せにすぎない。第１番に名を挙げられるアメノミナカヌシは何の働きもしないのだ。立派な研究をしている学者も含めて，何だかわからないと道教ではないか‥‥などというのはよくない。

（マイケル）　でもどうですか，道教にもそれなりのものがありはしませんか？

（ヨウ）〈道教〉というものは，外来の仏教＝「夷の宗教」の衝撃に対抗するために，中国独自の宗教＝「夏の宗教」として５世紀になって人工的に創作されたものなので，一口にいってオリジナリティはゼロなのだ。中味があるのは権威づけに借りてきた老子の『道徳経』だけ。これは孔・孟の学を批判するために書かれたものだから思想がある。それと中国民衆の間に古くから行われていた土俗信仰＝‘おふだ・おまじない・お告げ’のたぐいだ。これは２世紀になって「天師道」・「五斗米道」となって漢帝国を滅亡させるほどの大勢力に成長した。道教はこれを土台として自分を作ったのだ。

（マイケル）　すみません。ちょっと話題を脇にそらしてしまったかも‥‥。

（ヨウ）　ウン，三輪山の‘三つ鳥居’だったネ。あれはこの山に祀られた主神オオモノヌシ（中央）＝〈カミ〉と，そこへあとから勧請されてやってきたオオナムチとスクナビコナ＝〈神〉の３神のための門なのだ。「神秘」でも何でもない。倭という一地方のオオモノヌシが主神で，出雲という当時中央の都の出のオオナムチが副神だというところがイイ。

２）　日本の〈カミ〉の正体＝〈蛇〉

（ヨウ）　で，ここで日本古代神話の真打の登場！オオモノヌシの正体は？‥‥となる。

（マイケル）　祖先探しですネ。

（ヨウ）　さきにオオモノヌシがわが子のオオタタネコを見出して自分を祭れと指示したことを話したが，この人物の出生をたしかめてゆくと，イクタマヨリヒメという美女にゆきつく。そこに姿も装いもたぐいない１人の男があらわれて「共婚ひして共住る間に」まもなくその美人は妊ごもった。父母が追究すると，「麗美しき壮主ありて，その姓名も知らぬが，夕毎に到来て共住める間に，自然懐妊みぬ」との答え。そこで父母が糸巻きに巻いた麻糸を針につけてその男の衣のすそに刺せと教え，翌日になってみると，麻糸は戸の鉤穴を通って出ていっている。

それを追ってゆくと「美和山に至りて神の社に」行きついた。だからオオタタネコはオオモノヌシの子だとわかったと『記』はいうのだ。

（マイケル）　なるほど。でもまだオオモノヌシの姿は見えて来ませんネ。

（ヨウ）　そうだ。それにまだ別の話しがある。神武が大后としたヒメタタライスケヨリヒメの出自だ。彼女の母はセヤダタラヒメ，ミシマノミゾクヒ［三島溝咋］の娘である。その「容姿麗し」いのを「美和の大物主神，見感でて，その美人の大便まれる時，丹塗矢に化りて，その大便まれる溝より流れ下りて，その美人の陰を突きき。ここにその美人驚きて，立ち走りいすすきき。すなはちその矢を将ち来て，床の辺に置けば忽ちに麗しき壮夫になりて，すなわちその美人を娶して生める子」，これをホトタタライススキヒメと名付けたが，あまりにあからさまな名だと考え直して，ヒメタタライスケヨリヒメと改めたというのだ。

（マイケル）　どうもあまりに露骨な描写で読む方が「いすすき」［どぎまぎ］しますね。

（ヨウ）　まあそのことをおもんばかってか，『記』はのちに彼女との出会いを神武が回想した歌を収録している。

　　葦原のしけしき［荒れさびた］小屋に　菅畳いや清敷きて　我が二人寝し

まあこっちの方も相当に率直だけれどもネ。

（マイケル）　オオモノヌシが「丹塗矢」に変身したというのは面白いけど‥‥。

（ヨウ）　‘正体’はというんだろう。そこで『紀』の話になるが，オオモノヌシとその妻となったヤマトトトビモモソヒメの物語りになる。これはさっき話したイクタマヨリヒメの話しとよく似ているが，通ってくるオオモノヌシは「夜のみ来す」ので，モモソヒメは「君常に昼は見えたまはねば，分明に其の尊顔を視ること得ず。願はくは暫留りたまへ。明旦に仰ぎて美麗しき威儀を観たてまつらむと欲ふ」と訴えた。大神は「言理灼然なり。吾明旦に汝が櫛笥に入りて居らむ。願はくは吾が形にな驚きましそ」と答えた。どういうことなのかとあやしみつつ，翌朝を待って櫛の箱を開けて見ると「遂に美麗しき小蛇有り。其の長さ太さ衣紐の如し。」驚いてさけび声をあげると大神は恥じて人の形に戻って言う。「汝，忍びずして吾に羞せつ。吾還りて汝に羞せむ。」「仍りて大虚を践みて，御諸山に登ります。爰に倭迹迹姫命仰ぎ見て，悔いて急居。則ち箸に陰を撞きて薨りましぬ。乃ち大市に葬りまつる。故，時人，其の墓を号けて，箸墓と謂ふ。」とある。

（マイケル）　モモソヒメは可哀そうですね。悪意はなかったのに。でもともかくこれでオオモノヌシが〈蛇〉だとわかった。それでこれまでの話がつながりますね。

（ヨウ）　私がはじめに原日本人＝初期縄文人の信ずるのは万霊神，つまり〈カミ〉だと言ったろう。森の人である彼らの〈カミ〉のシンボルが〈蛇〉なのだ。

（マイケル）　でもあの人たちにとっては〈蛇〉はイヤではなかったんでしょう。インドのシヴァ神なんて冠の正面にコブラをつけ，首のまわりにも蛇をぐるぐる巻きにしているし，ゴータマ・ブッダも立派な修行者の行ないのすべてを「蛇が脱皮して旧い皮を捨て去るようなものである」と言っていますね。モモソヒメの悲劇は，彼女が森の縄文人ではなく平地の弥生人だったことから起ったんですネ。

（ヨウ）　ともかくモモソヒメの死は多くの人々の心を打ったらしい。「是の墓は，日は人作り，夜は神作る。‥‥山より墓に至るまでに，人民相踵ぎて手逓伝にして［手から手へ渡して］運ぶ」とある。いま桜井市箸中――倭の北辺を囲むマキムク川北岸――にみる「箸大墓」［箸墓古墳］がこれである［前掲図Ⅰ-1参照］。巨大な前方後円墳［全長275m，後円部150m；3世紀末の建造］で大王自身のものではない異例の大墳墓である。倭の地でのオオモノヌシの権威を反映するのだろう。

ところでオオナムチだけが〈蛇〉なのではない。さきに垂仁天皇の子のホムチワケは生来口をきけなく育ったのが「出雲の大神の御心」＝「祟り」だと知り，出雲の大神を拝みに行ったという話しをしたが，そこで「一夜，肥長比売と婚ひし‥‥その美人を竊伺たまへば，蛇なりき。」とわかって「すなわち見畏みて逃げた」のだが「‥‥海原を光して船より追い来たりき」という目にあっている。

そしてもっと大事なことなのだが，もし〈蛇〉がこうしたものだと知ると，時代は「神代」のはじめに戻って，スサノヲが葦原の中つ国の出雲に降り立ってまずやった「八俣大蛇」の退治とは，実は原日本人＝古縄文人の大王を天つ神の大将軍が打ち敗ったことだったと解ってくる。このときまでに力づくでアシナヅチとテナヅチの7人の娘を勾引かす悪事を働いてきたが，単なる暴徒ではない。スサノヲが自らの「十拳剣」で切り殺したとき刃が毀けて，尾の部分からのちに「草薙の大刀」として三種の神器の1つに数えられるようになる大刀が出てきたのが証拠だ。古来の大暴君だったのである。のちに「国譲り」が平和的に行われることになるが，そうした結着は国つ神側がこのときすでに主たる戦力を失ってしまっていたことと無関係ではあるまい。

（マイケル）　いよいよもって皇祖神はスサノヲということになるわけですネ。

3）　三輪山に登る

（ヨウ）　こんなふうに考えてくると，三輪山は私がここを訪ねてきたときよりもっと大きなものにみえてきた。ヨシ，そうなら自分の目でその〈カミ＝神〉とやらを確かめてみよう，とわたしは決めた。教え子たちに‘見ないでものを書いてはいけない’と折にふれて説教してきた一昔前の気力が戻ってきたのだった。

山の正面からは禁足地だというので登れない。向って左側［北側］にある狭井神社まで行って，そこで入山の届を出して東方へ向かって山頂を目指す［前掲図Ⅰ-1・2参照］。狭井神社はオオモノヌシの「荒魂」を祀り，やまはその「和魂」を祀るのだという。神の〈身体〉から区別されたその〈心〉を考え，それに気嫌のよし悪しがあるということならわかるし，〈神〉＝〈人〉という日本人らしい観念もわかる。しかしどうしてその2つを別けて祀らねばならないかは全くわからない。『記』『紀』にも説明がないし，この神社にも手がかりはない。つまり日本の〈カミ＝神〉は気分屋なのだ。

まあ2時間あまりの行程だが，そこにある杖をもって行きなさいという。自然林のままで手を加えていないから，道もとくにはつけていないというのである。水の涸れていない沢伝いのごろごろ道は手でつかまれる枝もないので確かに歩きにくい。杉の森と聞いていたが案外に少

ないのは何年か前の嵐で倒されてしまったためらしい。松・桧・榊の類も多いが，めずらしく思ったのは椿の木がたいして太くはないが高くのびている様子であった。

問題は目指す「磐座」である。道がまだきつい登りに入らない右側に「磐座神社」なる祠をみたが，みたところただの石ころが１つあるだけ；「イワクラ」の意味がわからない後世の者がつくったのだろう。久しく「大神神社宮司」を勤めた人物は「三輪神社には奥津磐座，中津磐座，辺津磐座とよばれる三カ所の神座である巨石群が存在する。‥‥それぞれに大物主神・大己貴神・少彦名神が鎮まる」と書いているが，私がこれだとはっきり確認できたのは奥津磐座だけだった。頂上にあるのだから間違いようもない。倭のこの春日山系と呼ばれる地域の山々は花崗岩だが三輪山は独特な斑糲岩だとのこと，ちょっと暗い灰色の岩とみえたが，素人目にはどうということのない石ころでしかない。自然に出来たのであろう亀裂が入っていて，かなり大きな石群であるが，人の目を驚かす巨石といったものではない。こんなところに座れと言われたオオモノヌシは尻が痛くなりはしなかったろうか。それにちょっと変だなと思ったのは，この山頂の磐座のすぐそばに小さな祠風のものがあったことである。あとで絵図を見ると「高宮神社」とある。この山の祭祀をゆだねられたオオタタネコの子孫――大神［大三輪］族――の高宮氏の氏神だという。大神神社とは言わず，単に「神山」という――山中の立札にもそうあった――のはもっともらしいなァと思ったのに何か白けた。中津磐座については途中小高い丘になった場所に石群があり，周りの木々にシメ縄が張ってあるのでこれなのかと想ったがそれまでで，山裾にあるという辺津磐座は全く識別できない。さきに引用した宮司の書物を開いてみると「中津磐座，辺津磐座は‥‥共に一個所にとどまらず，数も多くこれだと断定はできない」とある。探したってあるわけはない。私の観察は正しかったのだ。

残る問題はこのように中腹と麓に止められたオオナムチとスクナヒコナがいつ三輪山にやって来たのかである。彼らが出雲から倭に出てきたのは７世紀頃だろうとみる向きがあるが，私の臆測ではもう少し古い。それならもっと正確な記憶の言い伝えが『記』『紀』にも拾いあげられたに違いないと思う。私流の独断をあえていえば，それは欽明朝期の仏教の「公伝」（538年）に刺激を受けた国つ神々の結集・強化だったのだろう。倭の地の神に出雲の神の加勢を得ようとしたのだろうと思うのだ。

実はこの私の三輪山探訪にはまだ尾鰭がある。登るのは何とかなったが，下りる段になって私は何度も転んだ。10遍近かっただろう。前の日に京都で人と会った帰路だったから普段のスーツと靴で山登りすることなど全く考えていなかったのが悪かった。たかか467mの山だと馬鹿にしてかかったのもなお悪い。登り降りする者も皆無ではないが，平日の午後でみんな信者なのだろう。転ぶところを他人に見られなかったのは救いだが，杖など何の役にも立たなかった。仰向けにひっくり返ると立ち上ることさえ大変だ。やっと中腹のあたりまで降りて来て道端の岩［磐座か？］に腰を下していると，上からすたすた下りてきた50がらみの女性が「ご一緒に下山しましょうか？」と声をかけてくれた。あまり恥かしかったので断ったが，心配そうに何度も振りかえっている。１人で登山口まで戻ってくるともう3時間を過ぎていたのだっ

た。

（マイケル）　先生の‘加齢’も勘定に入っていなかったようですネ。

（ヨウ）　まあ何を言われても反論しないよ。でもまだ‘オチ’がある。しばらく後になって，私はこの話しをある霊感の鋭い女性に話した。「先生ご無事で結構でしたネ」「そりゃ?むろん無事さ」「いやそういうことではなく‥‥，一緒に下りようと言ってくれた女性ってどんな人でしたか？先生はもしかして‘生け贄’にされるところだったかも‥‥。だからついて行かないでよかったのです」そう言って彼女はほほえんだ。

（マイケル）〈蛇〉のえさにされてはネ。でもオオナムチ蛇は美女しか眼中になかったんだから心配ないですよ。

5．応神と儒教

（ヨウ）　さきに崇神・垂仁期に倭王朝の神祇祭祀が確定したことを見たのだが，その後の〈カミ＝神〉まつりはこの天つ神と国つ神を基礎に展開をみるということにはならなかった。

1）『論語』と王仁の来朝

（ヨウ）　まず儒教だが，応神朝の15年，百済の照古王が阿知吉（阿直岐）を使いとして良馬２匹と横刀また大鏡を貢った際，「もし賢き人あらば貢上れ」と要請したのに応えて，「名は和邇吉師［王仁］。すなわち論語十巻，千字文一巻‥‥をこの人に付けて‥‥貢進りき」と『記』はしるしている。孔子の教えはもちろん〈神〉を論ずるものではない。「鬼神を敬してこれを遠ざく，知と謂うべし」とはっきり言っている。しかし‘六経’をはじめとした春秋時代のすべての史伝に通じていたのであるから直切な解説者を得れば『論語』から得るものは限りない。「則ち太子菟道稚郎子［→のち兄の大鷦鷯［→仁徳］に位を譲る］，師としたまふ。諸の典籍を王仁に習ひたまふ。通り達らずといふこと莫し。‥‥王仁は書首等の始祖なり」とある。

（マイケル）　それで日本は儒教国になる‥‥というようなこともありえたのでしょうか？

（ヨウ）　いやそうしたことは全くありえない。一口に言って，日本はまだ『論語』のいうところを実践にうつすまでに熟していなかった。大王が権力を手中にして社会を然るべく秩序づけてゆくという課題に直面してはじめて孔子のいう〈礼・楽〉の統治システムの可否が問題になるのだが，当時の日本はとうていそんなところまで行っていない。各地に大小の豪族が割拠して興亡を繰り返して治まるところがない。倭の地の‘降臨王朝’も有力ではあるが大豪族の１つ以上ではなかった。５世紀のはじめ応神が出て第15代の大王として倭王朝を継いではじめて一頭地を抜く，日本を代表する王国と認められるまでに成長したのだった。

　しかもその応神［ホムタワケ］の出自が判然としない。神武≒崇神にはじまる倭王国の正統の嗣子ではなさそうだという点で大方の見方は一致しているが，どう理解するかはさまざまである。『記』『紀』に記された表向きの系譜では，第14代仲哀の皇后オキナガタラシヒメ［神功皇后］の子であるが仲哀が熊襲を討とうとしたとき「神有して，皇后に託りて誨へまつりて

曰はく」とあって，熊襲の国などは荒れてやせた不毛の地だ；海の外にはこの国よりずっと「宝有る国，‥‥眼炎く金・銀・彩色，多に其の国に在り。若し能く吾を祭りたまはば，嘗て刃に血らずして，其の国必ず自づから服ひなむ。復，熊襲も為服ひなむ‥‥」と教えられ，皇后は応神を胎中したまま南朝鮮に出兵し，新羅・高麗・百済の「所謂三韓」を従え，筑紫に帰還して応神を生んだという。

ここで私が奇妙に思うのは，まだ日本の中での勢力の拡大に意を注いでいた倭王朝がどうして突然朝鮮侵攻に転じたのかという点である。崇神・垂仁のあとをおそった第13代景行朝のエピソードとしてよく知られたヤマトタケル［倭建命：日本武尊］の熊襲，蝦夷及び東国の征服があって，ひとまず中央に覇をとなえたとはいうものの，まだ各地の支配は流動的だ。だから仲哀の関心も依然熊襲にあったのだった。

2） 神功皇后に憑りついた〈神〉

（マイケル） とすれば，問題なのはオキナガタラシヒメを巫女に使って託宣を下した〈神〉ですね。それも訊かれてもいない海外事情をしゃべったのですから。日本では3世紀に魏に使節を送った卑弥呼の経験がありますが，それからもう1世紀以上もたって事態は大きく変わっている。南朝鮮の諸族はまだ細かく分かれていて［馬韓・辰韓・弁韓］海外のことは何も知らなかったでしょう。

（ヨウ） 唯一，東アジアとくに朝鮮半島の事態に関心と利害をもっていたのは中国の晋王朝（265-316年）だったと思う。漢の時代に朝鮮北半部に築いた楽浪郡・帯方郡が4世紀初めに北から南下した高句麗に亡ぼされるのだが（313年，315年），それは中国北半部が匈奴・鮮卑などのいわゆる五胡十六国に支配され，晋は南下を余儀なくされて東晋（317-420年）に押し縮められることでもあった。つまり中国の正統王朝は朝鮮半島支配の足がかりを失ってしまったのだ。これを朝鮮半島南部の人々からみれば，中国に代って高句麗が攻め込んできたのであって，それに対抗する体制の構築が必要になる。馬韓53国の百済としての結集（346年），辰韓12国の新羅への統合（356年）が起ったが，半島最南端の弁韓12国は高句麗と直接国境を接することにならなかったからか，依然として分立状態にあった。中国の側に戻っていえば，もはや北からの道がないのなら，新たに南から朝鮮に侵入して橋頭保を築けないかと考えて自然である。「宝有る国」が海のすぐむこうにあるというオキナガタラシヒメへの託宣は極めて正確な国際情勢の分析に立ってのものといえるだろう。つまりこの〈神〉は‘中国人の神＝人’だったと理解するしかない。実際にもまたこの〈神〉のアドヴァイスはドン・ピシャリのタイミングだった。行ってみると新羅の抵抗はわずかで朝貢の約束をとりつけ，弁韓12国のうち7国――安羅・多羅・加羅など――を平定してこれを任那と名付け（369年），百済には残りの4国を譲って親交を結ぶという予期以上の大成功をおさめた。新羅も百済もまだ建国まもなくで，北に高句麗，南に日本と挟み撃ちになってはたまらない。ともかく友好をということになったのだ。

3） 狗奴王から倭の大王へ

（マイケル）　なるほど。で〈神〉が‘東晋王朝の神’だったとすれば，それから託宣をえたオキナガタラシヒメと応神（ホムタワケ）も中国人ということになるわけですか？

（ヨウ）　中国人というわけではないだろうが，中国系の人たちだったとみるのが自然だろうね。私は九州南西部にあった狗奴（くぬ）国の首長と王子だったのだろうと推定している。北部にはあの卑弥呼で知られる邪馬台国があった。239年に卑弥呼が帯方郡と魏に使節を送っていることをみれば，朝鮮・中国に関心をもつ国であったことは明らかである。この狗奴と邪馬台は，いずれも古来中国大陸，特に江南の地から直接渡来した人々が主力の地であるから，中国本土との交流は変らずに続いていたに違いない。水稲耕作の伝来もこのルートが主だったと思われる。彼らは朝鮮半島からわたってきた‘天つ神’たち――いわば朝鮮族――とは異質のものをもっていた。‘天つ神’のニニギ集団が日本に定着した「日向（ひむか）」の地も筑紫の近傍であったと思われるが，何分にも後来の集団であるから，ここに勢力を張ることは難しく，いわゆる‘神武の東征’を決行して，奈良盆地の東南隅・倭（やまと）に王国を開いたのである。その結果，北九州の一角に空白ができて，３世紀なかばには邪馬台国と狗奴国との間に戦いが起った。その決着についての記録はないが，恐らく南から攻め上った狗奴が九州一帯の支配者になったのだろう。邪馬台国は28国を支配していたというが，卑弥呼の死後，男の王が後を継いでまとまりがつかず，娘の壱与（いよ）を立ててかろうじて連合を維持するという有様だった。

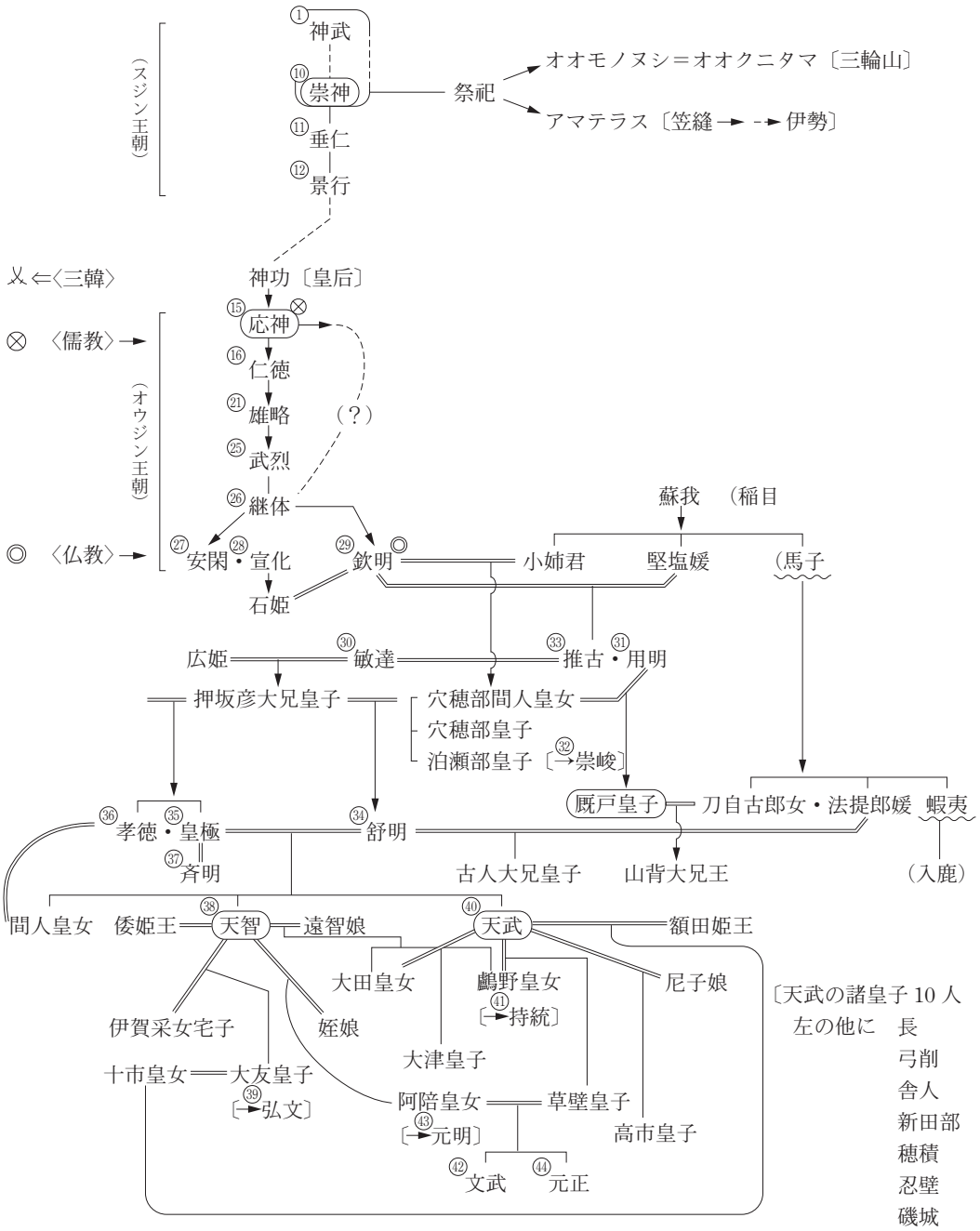
こうして南朝鮮に地歩を築いた狗奴は日本を代表する国として一躍脚光を浴び，崇神→垂仁→景行と展開してきた倭王国と肩を並べるほどになり，この並立は争うのではなく，両者の協調・融合となって，応神が倭王朝第15代の大王（おおきみ）に迎えられるという決着となった。これが私の画く応神（ホムタ）大王の形成の大筋だ。ことがだんだん込み入ってきたので，ここらで先ほどからの話も含めて，倭王朝総体の系譜を図にしておこう［図Ⅰ-3］。

４）　朝鮮系王朝から中国系王朝へ

（マイケル）　とすれば，神武・崇神という朝鮮系の第1王朝に応神以降の中国系の第２王朝が接ぎ木されたということになりますね。これは新らしい応神王朝の始りだと考える人もあるようですが。

（ヨウ）　この‘接ぎ木’のありさまを示す3つのエピソードがある。その１つは帰国したオキナガタラシがホムタを携えて倭に向かうとき，第12代景行王の曽孫，カゴサカ，オシクマの両名が「吾等何ぞ兄を以て弟（おとと）に従はむ」とホムタの王位継承に反対し，上にいう第１王朝派の者たちが第２王朝派に戦いを挑んで殺されるという一幕である。その２はホムタが越前・高志（こし）の国に「禊せむとして」滞在したとき，夢にあらわれたイザサワケ大神が「吾が名を御子の御名に易（か）へまく欲し」と言ったのに「恐（かしこ）し，命（みこと）の随（まにま）に易へ奉らむ」と応えて名前を交換したという逸話である。何のためにか全く説明がない。あえて忖度すれば〈禊〉のため；つまりそれまでの狗奴王の衣を脱いで，倭王に装いを改める準備をしたということであろうか。そして第３に，私にも最も明確な証拠と思えるのだが，『記』のホムタ王の記述がその初めに，「三柱の女王を娶し‥‥」と書きはじめて，都合10人の女性からあわせて26王［男11，女15］を産んだと詳

図Ⅰ-3　倭大王（ヤマトノオオキミ）の系譜〔①神武→㊹元正〕と蘇我氏４代



注）㊴弘文‥‥は明治３年（1870）の追諡

細に記しながら――この記述法は他の「天皇」の場合と同様であるが――最終節で突如「またこの品陀（ほむたの）天皇の御子」と書き出して別の２人の女性によって産んだ計９王を挙げ，それに続け

て「また堅石王の子は久奴王なり」と結んでいるということがある。ホムタが倭の血統につながる王であるなら，こんな記述になるわけはない。後の９王は彼が狗奴王ないし王子のときの子たちに違いない。

（マイケル）　そのことがかかわると思いますが，古代の「天皇」の‘国風諡号’が第15代ホムタ［応神］から第26代ヲホド［継体］までの間，その前後の「天皇」たちと全く異質な本名そのままであることも注目されていますね。

（ヨウ）　そればかりじゃない。「漢風諡号」の方も神武・崇神・応神の３王だけが「神」という語にちなんでつけられている。これはすでに８世紀の時点でこれら３王［神武≒崇神とみれば２王］がエポックメーキングな王だという認識が確定していたことを物語っているのだ。後代の天皇たちが歴史を振り返るとき，崇神に戻る場合と応神から説く場合の２様にわかれることは，『記』『紀』を注意してみればわかる。

５）〈学〉の新らしさ――〈礼楽〉と〈仁〉

（マイケル）　ホムタ大王のことはわかりましたが，彼の朝鮮進出はここでとくに注目している儒教の渡来以外にもさまざまな文物をもたらしたのでしょう。

（ヨウ）　まさに百聞一見にしかずで，視界は一挙にひろがった。軍事技術や武器はもとより鍛冶，織物，酒造などの技術者も渡来している。しかし日本人にとって全く新らしかったものといえば技術よりは思想だ。彼らが技術的に遅れていたのは確かだが，それは必要がなかったからで決して不器用なのではない。ところがものごとを原理的に考え，それを論理的に組み立てるという思考は全くといってよいほど欠けていた。判断に迷えば〈神霊〉の託宣を仰ぎ，自から‘うけひ’をして先へ進む‥‥『記』『紀』の叙述は一貫してそうしたものだった。

　といっても，この節のはじめに言ったように，日本の実情は『論語』を理解できるまでに成熟してはいなかった。人も知るように孔子の立脚点は〈学〉にある。「学んで時にこれを習う，亦た説ばしからずや。‥‥」という姿勢を，果して何人のエリートないしその卵が自分のものにしえたか？さしあたりはほんのひと握りであったに違いない。孔子の立論は２段構えであって，その主たる眼目の第１は国家体制＝‘統治の仕組み’を〈礼・楽〉を基本に構築することにあるが，これはとても応神の手には負えなかった。力で権力を手中にするのがせい一杯で，それをどう行使して国の安定を画るかというところまではいけなかった。しかし孔子の第２の主張としての統治者の身につけるべき‘徳’である〈仁〉はそれが各人の心懸け次第であるから，社会体制がどうであれ学び取れる。

　王仁に師事した応神が皇太子に立てたウジノワキイラツコの行動はその１例であった。彼は兄のオオサザキに向って「‥‥我は弟なり。且文献足らず‥‥大王は‥‥仁考遠く聆えて，齒且た長りたまへり。‥‥亦宗廟社稷に奉へまつることは重事なり。‥‥夫れ昆は上にして季は下に，聖は君にして愚は臣なるは，古今の常典なり。‥‥」と論じて帝位を譲ると主張したが，オオサザキは「‥‥豈先帝の命を棄てて輙く弟王の願いに従はむや」と固辞し，ために帝位は３年も空位に過ぎて，最後にウジノワキイラツコが自ら命を絶つことになって，オオサザキがやむなく第16代仁徳と

なったという。この仁徳の治世についてはなお「人民」の暮らしへのおもいやりの美談が加わる。

あるとき彼は高山に登って四方の国を実見し，「国のなかに烟発たず。国皆貧窮し。故，今より三年に至るまで，悉に人民の課，役を除せ」と指令し，そのため宮殿は雨漏りするまでになったが修理せずに「後に国の中を見たまえば，国に烟満てり」となった。「ここをもちて百姓栄えて‥‥その御世を称へて，聖帝の世と謂ふなり」とある。

（マイケル）　それは昔の‘修身’の教科書に載っていましたね。

6）　大王たちの反〈仁〉的行為　――応神王朝の断絶

（ヨウ）　まあそこまではいい。しかし以後の‘応神王朝’の歴史はむしろひどく〈仁〉の理想に背く事件に満ちている。第19代允恭の皇太子キナシノカル皇子は実の妹のカルノオオイラツメを淫して人心を失い，弟のアナホ皇子［→第20代安康］と争って殺されるが，その結果皇位にのぼった安康は実弟オオハツセ皇子［→第21代雄略］のためにオオクサカ皇子［仁徳の皇子］の妹ハタビノ皇女を得ようとしてオオクサカを殺し，自身はその妻ナカシヒメを皇后とするが，さきにオオクサカとナカシヒメの間に生れていたマヨワ王によって殺されるという成り行きになる。しかもこれはまだ物語の序章である。オオハツセは２人の兄シロヒコ・クロヒコを殺し，マヨワを焼殺したばかりでなく，安康が次を託そうとしたイチノベノオハシ皇子［第17代履中の長子；安康とオオハツセの従兄弟］を猟にさそい出して射殺して，雄略として皇位を手に入れた。この雄略については『紀』自身が「天皇，心を以て師としたまふ」と言って独断専制の性を批判し，「誤りて人を殺したまふこと衆し。天下，誹謗りて言さく，大だ悪しくまします天皇なり」ときめつけている。彼が日本古来の〈カミ〉に対してさえ敬虔さを欠いていたことは，ある日，膂力人に過ぎたる者として知られる少子部連スガルに「朕，三諸岳［＝三輪山］の神の形を見むと欲ふ。‥‥行きて捉て来」と命じ，スガルが岳に登って「大蛇」をとらえてきたのに，「天皇，斎戒したまはず。其の雷虺虺きて，目精赫赫く。天皇，畏みたまひて，目を蔽ひて見たまはずして，殿中に却入れたまひぬ。岳に放たしめたまふ。‥‥」というエピソードに示されている。とはいえ，対外政略ではようやく力をつけて，日本に対立するようになった南朝鮮の国々――とくに高麗と新羅――に対して軍事力を誇示して影響力の維持に努め，倭王「武」として中国・梁にも遣使している。つまり雄略は向う見ずの暴君だったが，自らを賢しとするだけの知力はそなえていた。彼の「遺詔」は「‥‥朝野の衣冠のみ，未だ鮮麗にすること得ず。教化政刑，猶未だ善きことを尽さず。‥‥」と反省している。実際に出来はしなかったが，何をしなければならないかはわかっていたようだ。

（マイケル）　雄略の功罪はそんなものかとわかりますが，そのあと第25代武烈になるともうどうにもなりませんね。「長りて刑理を好みたまふ。法令分明し」というのは『紀』の精一杯の誉め言葉なのでしょうが，それに続けて「又頻に諸悪を造たまふ。一も善を修めたまはず」と断じるほかはなかった。「孕める婦の腹を刳きて，その胎を観す‥‥人の指甲を解きて，暑預を掘らしむ‥‥人をして塘の槭に伏せ入らしむ。外に流れ出づるを，三刃の矛を持して，

刺し殺すことを快(たのしび)とす‥‥人をして樹に昇らしめて，弓を以て射堕して咲(わら)ふ‥‥」これはもう完全な狂人としか言いようがない。こんな王に〈仁〉などということを説くべくもないでしょうが，そうかといって廃位に追い込むこともできない。そんな頽廃におち込んでいったのでした。その上，「朕(われ)，継嗣(ひつぎ)無し」とすましているのだから，‘応神王朝’は事実上ここで滅んだということなのでしょう。彼の死後，あとを継ぐものを求めてようやく――ホムタ王［応神］の５世の孫といわれる――オホド王［第26代継体］を見出し，無理矢理皇位につけはしたが，もう後の祭りです。唯この時期，注目すべきことの１つに百済から「五経博士」段楊爾(だんように)の派遣があり［継体７年］，その３年後にはこれを漢高安茂(あやのこうあんも)に交代させると言ってきたことがあり，その後の記事によってみれば以後交代制による儒教教授の仕組みがつくられていったことがわかります。継体22年（527年）筑紫の国造(くにのみやつこ)・磐井の反乱が起って政権に動揺が生じ，物部大連のアラカヒを遣ってこれを平定しますが，その直後（531年），継体は病没して‘ホムタ→オホド王朝’は完全に幕を閉じたのでした。

６．欽明と仏教

１） 蘇我イナメ→ウマコの権勢

（ヨウ） 私がいう中国系の‘応神王朝’が滅びて，統治権力は従来の朝鮮系‘神武≒崇神王朝’の手中に戻ることになるが，この交代は新たな宮廷内の内紛を惹き起すことになった［前掲図Ｉ-3参照］。地元の高市郡（橿原市）の豪族，蘇我氏を新たな権力のバックアップとして登用したためである。継体王のあとはメコノヒメとの間に生れた兄弟，安閑（第27代），宣化(せんげ)（第28代）に引きつがれたが，いずれも４年の政治で終り，そのあとタシラカ皇后の産んだ欽明（第29代）が立ってひとまず落ちついた。この２兄弟とその異母弟との間には確執があったと推理する者があるが，肝心なのはその如何ではなく，宣化が蘇我のイナメ（稲目）を大臣(おほおみ)に登用したことである。継体朝の大臣はコセノオヒトであったが，継体に２年先立って死去したので，そのあとを埋めたのだといえなくもないが，大伴のカナムラ（金村）と物部のアラカヒ（麁鹿火）は従前通り大連(おほむらじ)であったから，彼らの上にイナメを置いたことは異例だった。

（マイケル） 物部の祖・ニギハヤヒは神代の昔，天孫ニニギの降臨に先立って「天磐船(あまのいはふね)」に乗って天つ国から下り，神武の時代から「天皇」に直属する伴造(とものみやつこ)となっていたと聞いていますし，大伴の祖・アマノオシヒはニニギの一行を導びいて日向(ひむか)に降った大将軍だったといいます。どちらも倭朝廷の軍事部門の最高官として，このとき大連なわけです。これに対して蘇我は武内宿禰(たけのうちのすくね)の子の蘇我石川宿禰を祖とするというのですが，そもそも武内という人物は景行（第12代）から仁徳（第16代）までの諸朝に仕えて244年というのだからほとんど伝説上の人物で，彼を祖と仰ぐ葛城・巨勢などの大氏族もある。だから蘇我は中央政界での栄誉も功績もないにひとしかった。この新「大臣」と２にんの旧来の「大臣」との間に軋轢が生じなかったとすればむしろ不思議でしょうね。

（ヨウ） 対立は単なる新vs旧ではない。物部・大伴は一貫して天皇の股肱として仕えようというメンタリティをもっていたのに，蘇我はそれほど深くコミットせず，形の上ではむろん天皇を崇めるが，内心では実力如何だと考えていた。とはいえ，イナメは大臣に登用されただけのことはあって，視野のひろい大政治家で，長きにわたって欽明朝（539－571年）を支え続けた。彼なしには欽明期の安定はなかっただろう。そしてこの間２人の娘――キタシヒメ（姉），オアネノキミ（妹）――を欽明の妃に差出し，計18人［男７＋女６；男４＋女１］の皇子・皇女をえている。欽明とイナメの死後，皇位はイシヒメ皇后の息子，敏達（第30代）に伝わるが，それ以後は用明（第31代），崇峻（第32代），推古（第33代）――そして，用明が早く病死し［治世２年］，推古が長寿［治世36年］でなかったら当然に天皇となるはずのウマヤド（厩戸）皇子［→皇太子］――とすべて蘇我から出ることになった。しかしイナメの子，ウマコは自己の掌中に権力を独占しようとして，用明の死去直後，そのあとに立とうとしたアナホベ皇子［オアネノキミの子：ウマコの甥］を殺し，続けて彼を擁立しようとした物部モリヤ大連を殺して物部氏を滅した（587年）。これがウマコにとっての最大の作戦であり，動員した諸皇子のなかには若きウマヤドも加わっていた。他方，大伴はすでに政界の中央から脱落していた。さきに物部のアラカヒが死んだとき，大伴のカナムラが任那・百済を救う仕事を委ねられたのだったが，結局失敗して任那は新羅に滅され［欽明23年（560）］，その責任を糾弾されることになったためである。ウマコにもはや敵はなく，自ら皇位につけた――アナホベの弟――ハツセベ皇子［→第32代崇峻］をも殺し，彼の姪［キタシヒメの娘；用明の妹］ヌカタベ皇女［敏達の妃→皇后］を第33代推古として皇位につけた。亡父イナメの深慮遠謀によって得た天皇外戚の地位を利用して国政を思うままに操ったのだが，唯一の失策はウマヤド皇子（572-622年）を皇位につけないで終ったことだった。他方，ウマヤドはさきに物部の打倒では蘇我の一族として働いたが，2人の叔父を殺されてみればウマコに批判的となるのも当然であった。もしウマコとウマヤドの政治的協調が実現して‘ウマヤド天皇［聖徳天皇？］’が実現していれば，以後しばらくは‘蘇我時代’となっていただろう。

２） エミシ→イルカの「専行暴悪」

（マイケル） ‘応神王朝’のあとが‘蘇我時代’になっていたとすれば，のちの‘藤原時代’はなかったことになるのでしょうね。

（ヨウ） 確かに。しかし，ウマヤドが死去し（622年），ウマコが死去して（626年），推古までも死去（628年）となると，それまでの付けが回ってきた。推古の治世のほとんどすべては皇太子に立てたウマヤドのもので，彼の死後６年間は皇太子が空席になったままとなり，スイコは後継者を明らかにできないで崩御することになった。夫・敏達の異母孫タムラノ皇子か，兄・用明と姪のアナホベノマヒト皇女の子であるウマヤドとウマコの娘トジノコイラツメの子，ヤマシロノオオエ王のどちらにするか「遺詔」なるものははっきりしていなかった。

ウマコの子・エミシは決断力に乏しく，時間をかけて群臣（まへのきみ）たちの意見を徴しつつ，結局タムラを第34代舒明としたが，ヤマシロノオオエを排するのがその本心であった。父ウマコと同

じくウマヤドの人望と影響力を恐れていたのである。そうでなければ，蘇我一族の皇子を捨てて，非ないし反蘇我の敏達の流れに皇位を譲る気になるわけがない。しかし，話しはそこに止まらなかった。舒明が死去し皇后タカラノ皇女(ひめみこ)が第35代皇極として即位すると，またヤマシロノオオエの存在が大きくなり，エミシの子・イルカは，舒明とホホテノイラツメ［ウマコの娘；エミシの妹］との子・フルヒトノ皇子を次に立てようとして，何の罪もないヤマシロノオオエとその一族を襲って殺した。わが子をひどく甘やかしてきたエミシさえこれを聞き，怒り罵って「噫(あ)，入鹿(いるか)，極甚(はなは)だ愚痴(おろか)にして，専制暴悪(たくめあしきわざ)す。爾(い)が身命(いのち)，亦殆(あやふ)からずや」となげいたという。

果してこの予感は的中した。イルカの蕃行をみてもはや我慢の緒が切れた中臣の連(むらじ)カマコ［→藤原鎌足］が組織した宮廷内クーデタによってイルカは斬殺され，栄光の頂点にあった蘇我氏の本流は一瞬にして途絶したのだった。中臣氏は‘天の石屋戸’の前で詔戸言(のりとごと)を読んだアメノコヤネを初祖とすると称した。神武東征を先導した侍臣(おともまえつきみ)アメノタネノ命もこの氏の出であったという。

（マイケル）　なるほど。イナメ→ウマコ→エミシ→イルカと続いた‘蘇我’時代の盛衰はよくわかりました。しかし，この節の主題――〈仏教〉はまだ話に入って来ませんネ。

（ヨウ）　そうだ。〈仏教〉伝来というと，すぐ崇仏・拝仏という話になって，それで欽明朝以後の動乱を説明するという俗論からまず自由にならねばならないと思ったからだ。〈仏教〉の力が日本の古代史を決定的に左右したのなら，日本は仏教国の１つとなり，歴史はもっと簡単なものになっていただろう。でもそうはならなかった。

３）　釈迦金銅像・経論若干の伝来

（ヨウ）　まず『紀』にいうところを聞こう；欽明13年（552）――とあるが，７年（538）ともいう――10月

「百済の聖明王(せいめいわう)，‥‥釈迦仏(ほとけ)の金銅像(かねのみかたひとはしら)一躯・幡蓋(はたきぬがさそこら)若干・経論若干巻(きょうろんそこらのまき)を献(たてまつ)る。‥‥」曰く，「是の法(みのり)は諸(もろもろ)の法(のり)の中に，最も殊勝(すぐ)れています。解(さと)り難(がた)く入り難し。周公(しゅう)・孔子も，尚知りたまふこと能はず。此のほうは能く量(はかり)も無く辺(かぎり)も無き，福徳果報(いきほいむくい)を生(な)し，乃至(すなは)ち無上(すぐ)れたる菩提(ぼだい)を成(な)弁す。‥‥祈り願うこと情(こころ)の依(まま)にして，乏(とも)しき所無し‥‥」

欽明王の受けたショックは大抵ではなかった。是の日に，天皇(すめらみこと)，聞(きこしめ)し已(をはり)りて，歓喜(よろこ)び踊躍(ほどはし)りたまひて‥‥「朕(われ)，昔より来(このかた)，未だ曾(かつ)て是(かく)の如き微妙(くは)しき法(のり)を聞くこと得ず。‥‥」と言ったという。しかし仏典のいうところがそう簡単にわかるものではない。何に一番驚いたかといえば仏像であろう。〈カミ〉〈神〉の観念はあっても，その形ははっきりしなかった。〈カミ〉は蛇などでイメージされたとはいえ，あまり好きにはなれないし，〈神〉を代表するアマテラスもその姿をみた者はいない。どうやら‘女の人’に似ているようだ，という位である。この章のはじめに宣長が「神代‥‥の人は皆神なりし‥‥」と言ったことを引いたが，彼は更にこうも言っている；

「皇国にて云かみは，実物の称に云るのみにて，物なきに，ただ其理を指て云ることはなき也。

‥‥御国にては人のみにあらず，竜雷のたぐひ，或は虎狼などの類ひにでも，凡神霊あるもの，可レ畏物を，皆其現身をかみと言。又生類のみにもあらず，山川海のたぐひにて神霊ある，又可レ畏をは，直に其物を指てかみと云。‥‥」

これは私の知る限り，日本人の〈カミ⇒神〉観念の最もすぐれた認識だ。裏返していえば日本人は‘形のないもの’［形而上の存在］を考えたことがなかったのだ。だから欽明王は驚いた。「西蕃の献れる仏の相貌端厳し。全ら未だ曾て有らず。‥‥」‘きらぎらし’とはよく言った。金銅像は磨き上げられて金色に光り輝いていたに違いない。どれほどの大きさだったかは書いていないが，その８年前［欽明６年］の９月に

「是の月に，百済，丈六の仏像を造りまつる。願文を製りて曰へらく，蓋し聞く，丈六の仏を造りたてまつる功徳甚大なり。‥‥此の功徳を以て，願はくは，天皇，勝善れたる徳を獲たまひて，天皇の所用めす，弥移居の国［百済・任那諸国］倶に福祐を蒙らむ。又願はくは，普天の下の一切衆生，皆解脱を蒙らむ。‥‥」との記事がある。

これを持ってきたのかどうかわからないが，「天皇」のために造ったというのだから，そうであってもおかしくはない。「丈六」［１丈６尺］といえば4.8mであるから，大きさの点でも偉観である。欽明王は「礼ふべきや否や」と群臣たちに問うた。ここから先は誰でも知っての通りだ。

蘇我イナメ；「西蕃の諸国，一に皆礼ふ。豊秋日本，豈独り背かむや」

物部オコシ・中臣カマコ；「我が国家の，天下に王とましますは，恒に天地社稷の百八十神を以て，春夏秋冬，祭拝りたまふことを事とす。方に今改めて蕃神を拝みたまはば，恐るらくは国神の怒を致したまはむ」

中臣は昔から神祇祭祀を司どる氏族であって，上の意見は当然であるから，対立は２大氏族の長，イナメとオコシに代表される。といっても〈仏〉の何たるかがわかってのうえのことではない。前者が大臣として経済・交易部門を担当し，後者が軍事部門を掌握していたという職掌の違いがあり，スムーズな対外関係を念頭に置くイナメが積極的に受け入れを主張したことは理解できる。しかしオコシの態度は単なる頑迷固陋の故というよりは，新参のイナメへの反感があってであろう。

欽明王は「自ら決むまじ」と言って，イナメに付けて「試に礼ひ拝ましむべし」と指示した。このあと一進一退があって，疫病がはやって民衆に死者が多く出ると，それ見たことかというオコシ・カマコの言うままに仏像を難波の堀江に流し，イナメがこれをまつっていた寺を焼いたが，次には「天に風雲無くして，忽に大殿に災あり」となると，「茅渟海の中に，梵音す。‥‥光彩しく晃り曜くこと日の色の如し」という報告に接して，海中に浮かんでいた樟木から「画工に命して，仏像二躯を造らしめたまふ」といった具合であった。

（マイケル）　全く。猫だってそれほど幼稚じゃないでしょう。人騒がせな話しですね。

（ヨウ）　しばらくは大騒ぎになったことは確かだ。しかしそれも一循環してしまうと静かになった。

欽明31年にイナメが死に，同32年天皇自身も死去しているが，次の敏達は「仏法を信けたま

はずして，文史を愛みたまふ」という態度で，いわゆる‘拝仏派’に好意的だった。百済からはなお「経論若干巻」とともに「律師・禅師・比丘尼・呪禁師・造仏工・造寺工」6人が送り込まれ，新羅は仏像を送ってきたが，物部モリヤ［オコシの子］がまたまた疫病流行を理由に仏像・仏殿を焼き難波の堀江に捨てるのを支持し，蘇我ウマコ［イナメの子］には「汝独り仏法を行ふべし。余人を断めよ」と指示している。蘇我と物部の対立は相互に感情的な暴言を吐くまでになった。

しかし両者の権力争いはウマコに軍配が挙った。崇峻を殺し，そのあとに推古を押すことでウマコに盾つく者はなくなり，推古女帝は即位の翌2年春，「皇太子［ウマヤド皇子］及び大臣に詔して，三宝を興し隆えしむ」方針を明言した。物部との内戦勝利の祈願を実地に移すべく，ウマヤドは四天王寺［→荒陵寺］を建て（推古1年），ウマコは飛鳥寺［→法隆寺］を造立し（同4年），これにならって「諸臣連等，各君親の恩の為に競ひて仏舎を造る」運びとなった。

4）〈「仏神」＝ほとけ〉

（ヨウ）　これで仏教の倭王朝内への定着は確定し，皇太子ウマヤドは12階の「冠位」を定め，「憲法十七条」を作り，勝鬘経・法華経を説くに至った。しかし，国としては仏教一辺倒になったのではない。推古はウマヤドの行ないを認めながら，なお詔して「朕聞く，曩者，我か皇祖の天皇等，‥‥周く山川を祠り，幽に乾坤に通す。是を以て，陰陽開け和ひて，造化共に調る。今朕が世に当りて，神祇を祭ひ祀ること，豈怠ること有らむや。故，群臣共に為に心を竭して，神祇を拝るべし」と宣し，これにしたがってウマヤドとウマコは「百寮を率て，神祇を祭ひ拝ぶ」ようになっている。

（マイケル）　とすれば，日本国という建物の心礎と主柱は依然〈神〉であって，〈仏〉はその上に構造された何重かの華麗な塔のようなもの‥‥となりますか？

（ヨウ）　その比喩はイイと思う。が，礎石に埋められるのは〈仏〉舎利なのだから，‘仏≒神’という態度だろう。「仏神」という何度か出てくる表現はこれにピッタリだ。〈仏〉は「蕃神」なのであり，日本古来の神々は180神だというのだから，シャカやカンノンなど何人かの〈仏〉がふえたところでそう変るわけではない，‥‥頭を冷してみればそう納得できたのだろう。

（マイケル）〈仏〉の伝来はショックに違いないが，それを受け入れる素地はあったわけですね。中国のように孔子という〈聖人〉はいるが〈神〉はいないのとは違っている。孔子らの子孫にとっては理屈が大切だ。中国仏教のメッカ五台山がモンジュ（文殊）菩薩の聖地とされているのはそれでしょう。でもアマテラスは‘日神’という権威をチラッと示しただけで，理屈は何も言わない。説教なんてない。その代り‘福’を授けてもくれない。まあおシャカさんもすきにやってごらん，ということだったのでしょうか。

（ヨウ）　ウマヤドの四天王寺の金堂の内陣はどんな風だったのだろう，なんて考えたことある？四天王はお堂の四隅に立っているんだろうが，彼らがとり囲んでいる真中に護られている筈の主人公は一体誰なんだろうか？インド人や中国人に言わせれば，それはスメール（須弥山）の頂

上に住むインドラ（帝釈天）さ，と答えるだろうが，ウマヤドにはよくわからなかっただろう。シャカなのか，カンノンなのか，ヤクシなのか？それともスメラミコトなのか？？大勢の仏教の専門家らしき人たちがいるが，その答えはおろか，そういう疑問さえ聞かれないのだ。でもお寺やお経の中味については次章「釈教」で更めて考えるとしよう。ここでとばしてはならないのは「17条憲法」だ。

7．ウマヤド皇太子の憲法；〈和（やはらぎ）＝蘇（あまなひ）〉

（ヨウ）　ウマヤドが皇太子として，倭朝廷の統治体制に組織的統一性を与えようとしたのが「冠位」［12階］制である（推古11年）。‘徳・仁・礼・信・義・智（各，大および小）’。この「位」の名称にみるように儒教の教えるところに従って〈礼〉の秩序を宮廷内に創り出そうとしたのだ。正確にいえば，〈礼〉と〈信〉は社会ルールの原理――‘人倫’――であり，〈徳・仁・義・智〉は各人の卓越性（アレテー）という意味の‘徳’――他者の如何は問わず，自身が修得すべき資質――なのだから，その間に質的な違いがあるのだが，ここでは識別されていない。これが日本での儒教理解なのだが，それはともかく，この「冠位」制の新らしさは，朝廷をとりまく有力氏族の中核メンバー――いわば‘氏族人’――を朝廷の‘官人’として――その限りでは‘個人’として――序列づけようとするところにあった。これまでは倭族の「大王（オオキミ）」［「天皇（スメラミコト）」］も，最強部族の首長と認められてはいるものの，各部族の首長＝「王（キミ）」と質的に異なるものではなかった。だからここで「冠」の色を紫・青・赤・黄・白・黒というように区分けして，どんな形の「縁（もとほり）」をつけるかといったことを決めたのは，ただのおしゃれではない。朝廷での各人の功労に従って「位」が上下するという仕組みは氏の首長たちの「大王」への臣従の確証であり，それを賜与する「大王」個人の，全氏族の統轄者としての権威の確立でもあった。これ以降の各「天皇」が次々に「冠位制」を改訂し複雑にしていった理由もここにある。でも，これですっきりしたわけではない。有力な〈氏（ウジ）〉に〈姓（カバネ）〉――臣（オミ）・連（ムラジ）・君（キミ）・直（アタイ）など――を与え，それらの氏の首長が朝廷の官人であるとはいっても，その実は〈氏〉の支配者であるという重層構造を作ることになったのだった。

（マイケル）〈姓〉というのは世襲の爵位のようなもので，〈冠位〉というのは官位のようなものでしょうか。

（ヨウ）　まあそんなところだろう。ともかくそういう〈冠位〉を創ったのだから，その冠をかぶることになった連中に形ばかりで終らない心懸け――〈徳〉――を説（さと）されなければならない。それが「憲法（いつくしきのり）」だ。

そうならこれは行政官への説教なのだからたいしたことはないだろうと考える人も少くないが，それは間違っている。近代日本で憲法といえばまず「大日本帝国憲法」（明治22年1889）ということになろうが，その‘前文’＝「憲法発布勅語」とウマヤドの「憲法（いつくしきのり）」とはどちらも日本という国の政治体制を原理的に表明したものという点で注目に値（あたい）する。似ているというのでは

ない。ありのままをリアルに画くか，こうありたいという願望を構想してみるか，ひどく対照的なのだ。

1）〈和（ヤワラギ）〉と〈党（タムラ）〉――〈朕〉の不在

（ヨウ）　この「憲法」の要点をまず表Ⅰ-4として示そう。そのキーコンセプトは第1条の〈和（ヤワラギ）〉であり，どうすればその〈和〉をえられるかは第17条で「独断」を排し，必ず「衆」議をつくすべきであるとして示されている。

（マイケル）　今風にいえば共和制あるいは民主制（デモクラシー）ですね。明治憲法が「国家統治ノ大権ハ朕カ之ヲ祖宗ニ承ケテ‥‥」というのとは正反対です。

（ヨウ）　そうだ。そこでいう「朕（ワレ）」＝「万世一系・天皇」の「統治」という観念がウマヤド憲法にはない。もっとはっきりいえば，〈朕〉がいないのだ。だからこの文書は推古「天皇」の詔（みことのり）ではなく，ウマヤド皇太子のつくったものという体裁をとっているわけだ。これが彼女と彼にとって好ましいとは必ずしも思われなかっただろう。しかしそれがリアリティなのだ。それが〈和（ヤワラギ）〉と表現された。これは個人間の平和と誤解されてはならない。第1条が続けて「人皆党（たむら）あり。亦達（さと）る者少し」と言っていることが大切だ。〈党（タムラ）〉‥‥これが第2のキーワードといってもよい。〈党〉と〈党〉との協和，これが〈和〉なのだ。異本［いわゆる‘嘉禎本’］の表現では1条は「齟齬（あまない）を以て貴（たから）とす。‥‥」とあるから，〈和〉＝〈齟〉であるが，〈齟（アマナウ）〉とは仕事のうえで協調するということだから，つまり諸‘氏族共同体’間の争い［「忤ふること」］を無くそうというのだ。

（マイケル）　今の日本に横行している‘派閥’，同じですね。政治ばかりでなく，企業でも学校でもどこでも派閥一色ですからネ。

（ヨウ）　その〈派閥〉の横行，それがいま言った〈朕〉の不在に対応している。それをもっと突きつめていえば唯一人の〈神〉の不在だ。明治憲法が勅語の更に前に「告文」なるものを上乗せして「皇祖・皇宗ノ神霊」・「威霊」を持ち出しているのもこの空白を気にしてのことだ。でも日本には「百八十神（ももあまりやそのかみ）」がいるのだから「皇祖」と言ってもその1人に過ぎない。いまひとつ迫力が足らない。

（マイケル）　先生が以前に書いたところでは，明治憲法はその「告文」・「勅語」を含めて――そしてそのあと「皇室典範」も――全部，井上毅（コワシ）という人物の手になるものだということでしたね。洋の東西の諸立法に通暁し，日本については古典にまで遡って学び直したこの男の仕事を，先生は「唯々‘毅，畏るべし’」舌をまくほかはないと絶賛されている。

（ヨウ）　毅の凄いところは，ひとつには「我ガ憲法ハ‥‥親裁ノ憲法タリ」「各国ハ憲法アリテ始メテ王権アリ」と論じて，天皇「ノ大権ハ‥‥是ヲ詔勅ノ中ニ平叙シ‥‥憲法各章中ニハ掲ケザル方体裁之宣ヲ得ル欤‥‥」と主張したことにみられる。助言者であるドイツ人の憲法学者ヘルマン・ロェスレル［H.Roesler］はこれを聞いて，「貴下ノ論説ハ甚タ真理ニ合ヒ而シテ其意味深重ナルハ疑ナシ」と評したが，結局ヨーロッパ諸国のスタイルとする結論になって毅の見地は日の目をみないで終った。そこで毅はやむなく，憲法第1条を「大日本帝国ハ万世一系

表Ⅰ-4　ウマヤドの「憲法十七条」

条	原文	読み下し文
1	以和為貴 無忤為宗‥‥	和ぐを以て貴しとし、忤こと無きを宗とせよ。人皆党あり。亦達る者少し。‥‥然れども、上和ぎ下睦びて、事を論ふに諧ふときは、事理自からに通ふ。何事か成らざらむ。
2	篤敬三宝‥‥	篤く三宝を敬へ。三宝とは仏・法・僧なり。‥‥人、尤悪しきもの鮮し。能く教ふるをもて従ふ。其れ三宝に帰りまつらずは、何を以てか枉れるを直さむ。
3	承詔必謹‥‥	詔を承りては必ず謹め。君をば天とす。臣をは地とす。天は覆ひ地は載す。‥‥上行ふときは下靡く。
4	群卿百寮、以礼為本‥‥	群卿百寮、礼を以て本とせよ。其れ民を治むるが本、要ず礼に在り。‥‥群臣礼有るときは、位の次乱れず。百姓礼あるときは、国家自づからに治る。
5	絶餐棄欲明弁訴訟‥‥	餐を絶ち欲することを棄てて、明に訴を弁めよ。‥‥頃訟を治むる者、利を得て常とし、賄を見ては讞すを聴く。
6	懲悪勧善、古之良典‥‥	悪を懲し善を勧むるは、古の良き典なり。‥‥諂ひ詐く者‥‥亦佞み媚ぶる者‥‥如此の人、皆君に忠無く、民に仁無し。是大きなる乱の本なり。
7	人各有任 掌宜不濫‥‥	人各任有り。掌ること濫れざるべし。‥‥事に大きなり少き無く、人を得て必ず治らむ。‥‥
8	群卿百寮 早朝晏退‥‥	群卿百寮、早く朝りて晏く退でよ。‥‥
9	信是義本 毎事有信‥‥	信は是義の本なり。事毎に信有るべし。‥‥群臣共に信あらば、何事か成らざらむ。‥‥
10	絶忿棄瞋 不汝恕人違‥‥	忿を絶ち瞋を棄てて、人の違ふことを怒らざれ。‥‥彼人瞋ると雖も、還りて我が失を恐れよ。
11	明察功過 賞罰必当‥‥	功過を明に察て、賞し罰ふること必ず当てよ。‥‥
12	国司国造 勿斂百姓‥‥	国司・国造、百姓に斂らざれ。国に二の君非ず。民に両の主無し。率土の兆民は、王を以て主とす。‥‥
13	諸任官者 同知職掌‥‥	諸の官に任せる者、同じく職掌を知れ。
14	群臣百寮 無有嫉妬‥‥	群臣百寮、嫉み妬むこと有ること無れ。‥‥其れ賢聖を得ずは、何を以てか国を治めむ。
15	背私向公 是臣之道矣‥‥	私を背きて公に向くは、是臣が道なり。‥‥凡て人私有るときは、必ず恨有り。憾有るときは必ず同らず。‥‥故、初の章に云へらく、上下和ひ諧れ、といへるは其れ亦是の情なるかな
16	使民以時 古之良典‥‥	民を使ふに時を以てするは、古の良き典なり。‥‥春より秋に至るまでに、農桑の節なり。民を使ふべからず。‥‥
17	夫事不可独断 必与衆宜論‥‥	夫れ事独り断むべからず。必ず衆と論ふべし。‥‥大きなる事を論ふに逮びては、若しは失有ることを疑ふ。故、衆と相弁ふるときは、辞則ち理を得。

ノ天皇之ヲ統治ス」と書いて〈大権〉を根拠づけようとした。「万世一系」というこの規定が次の問題となった。ロェスレルは「抑モ日本ガ開闢以来皇統一系・天子ヲ戴クハ歴史上ノ事実ニシテ万国其比類ヲ見ス洵ニ誇ルヘキ事」と評価しながらも「今後幾百千年ノ後マテ皇統ノ連綿タルヘキヤハ何人モ予知シ能ハサル所ナリ‥‥」と論じて，「万世一系ヲ改メテ開闢以来一系ト為」すよう助言したが，この点では毅は譲らなかった。ドイツ人顧問にとっては客観的な

歴史が第１の問題であったが，毅が求めていたのは「皇朕（スメラワレ）」の「大権」の絶対性なのだった。

（マイケル）「万世一系」が権力の唯一の権原（タイトル）として説得力があるのでしょうか？実際には断絶があるのはもう見て来たわけですが，〈連続〉という観念にそんな力があるのですか？

（ヨウ） 意味がないわけではなかろうが，‘権力の連続’というのは，表からみれば‘すべて世はこともなし’ということだろうし，裏返して言えば‘カリスマ的帝王の不在’となるだろうね。あまり自慢にもならないが，それが日本らしさだと言われればそうかも知れない。

毅のまだ若かった時分の議論に，「人君ハ，人民ノ世話（セワ）ヲナシ，又人民ノ重子（オモシ）トナル役ナリ，凡人ノ心ハソロイ兼ルモノ故ニ，重子ヲ以テ是ヲ圧メ乱ヲ抑フル事ナリ‥‥上下尊卑ノ礼分ヲ厳ニ定メ，人民ノ威勢ヲ付ルハ，此ノ重子ノ重カラシムル為ナリ，‥‥全体世ニ因テ，世話ヲ重ンスル時アリ，重子ヲ重ンスル時アリ‥‥」［横井小楠「交易論」］とある。「万世一系」というのは歴代の天皇はほとんど〈オモシ〉にすぎなかったということであり，イザというときには役に立たないということなのだ。

２）「三宝」・「詔」・「礼」

（マイケル） ウマヤド憲法の骨格はわかりました。第1－17条で立派に括られていますが，その間の諸条項は行政官たちへのあれこれの訓戒といったものですか。

（ヨウ）「公」人としての徳目――公正な司法，然るべき賞罰，職掌の忠実な遂行，勝手な民衆の使役禁止など――の列挙に止まらず，より広く人たるものに必須の心懸け――物欲・へつらい・怒り・嫉妬などの戒め――を説いているところは原文を読めばわかろう。しかし肝心かなめの行為規範として重視されている項目は第２，３，４条だ。

第３条「篤く三宝を敬え」はウマヤドの〈仏教〉への帰依を示すもの――従ってこの憲法の精神を表現するもの――として広く知られている。そう言って間違いではないが，肝心なことは彼が自己の‘信仰’を良しとして人々に勧めているのではないという点だ。ウマヤドにとって仏教とは人々を「教」育する手段であった。仏「法」は教科書であり，仏「僧」とは学校教師なのである。学べば誰でも良い人になれる；これが彼の信念だった。彼の死を伝え聞いた者たちは「日月輝（ひつきひかり）を失ひて，天地（あめつち）既に崩れぬ。今より以後（のち），誰をか恃まむ」と嘆き，彼に仏教を教えた「高麗（こま）の僧」慧慈（えじ）は「日本国（やまとのくに）に聖人（ひじりま）有す。‥‥固（まこと）に天（あめ）に縦（ゆる）されたり。‥‥」と回想したと『紀』は伝えている。

（マイケル） すでに同時代人によって「聖人」と呼ばれる大政治家だったんですね。孔子が崇めた周の文王のようだったのでしょうか。

（ヨウ） でも，第３条「詔（みことのり）を承（うけたまは）りては必ず謹（つつし）め」とあるように「天皇」の〈詔〉はあまり権威がなかった。推古女帝が退位して，ウマヤドが‘聖徳天皇’になっていたら日本も大分変っていたかも知れない。少くとも蘇我ウマコがあんなに出しゃばることにはならなかったろう。

だから統治体制として一番大事なのは第２条「礼（みやび）を以て本（もと）とせよ」であった。孔子なら疑いもなくこの〈礼〉を第１条に置いた筈だ。そしてそれは絶対的主権者〈王→皇帝〉の存在を予想するものであった。〈礼〉でなく〈和〉が第１に置かれること，これこそが日本が中国と異なる点である。

（マイケル）　好むと好まざるとにかかわらず，それが事実であって，ウマヤドの憲法のリアリティだったのでしょうね。明治憲法の「皇朕」はありもしないものを無理につくり出そうとしたのでした。

8．天武による「神祇」国家の創出

1）　中臣カマコのクー・デタ

（ヨウ）　ウマヤドの示した指針は，しかし遵われることにならなかった。ウマコは崇峻を殺し，イルカはヤマシロノオオエを殺し，中臣のカマコに殺害された。ウマヤドの〈和〉は絵に画いた餅に帰した。しかし，皇極４年（645）６月のいわゆる‘大化改新’はカマコが計画しナカノオオエ皇子を押し立てて実行した宮廷クー・デタであるから，その成功は新しい主権者としての‘中大兄天皇’の誕生へと続いておかしくはない。〈和〉がならないとわかった以上，新実権者＝〈朕〉が国政を専断すべきときであろう。この判断は私だけのものではない。いまは亡きウマヤドの娘，カミツミヤマノイラツメ姫王は「蘇我臣，専国の政を擅にして，多に行無礼す。天に二つの日無く，国に二の王無し。‥‥」と語っている［皇極１年（642）］。だがそうはならなかった。

（マイケル）　どうしてなんでしょう？

（ヨウ）　私のみたところナカノオオエの優柔不断が最大の問題だ。

カマコについては，『紀』は「中臣鎌子連，人と為り忠正しくして，匡し済ふ心有り」と言い，皇極女帝もこのしばらく前に「中臣鎌子連を以て神祇伯に拝す」［皇極３年］と登用している。中臣氏は初祖アメノコヤネ以来‘神祇’を祭ることを職掌としてきたのだったから，カマコはその首座を手にしたわけである。これに比べると同じ『紀』にナカノオオエを賞める記述は全くない。カマコは「功名を立つべき哲王」を皇子たちの間に求めてナカノオオエに行きついたのだから，それなりの人物だったに違いないが，１人で先に立つという男ではない。皇極は長子である彼を後継者とせず，弟のカルノミコを選び［→36代孝徳］，ナカノオオエを皇太子に指名した。［前掲図Ⅰ-3再照］。カルノミコはカマコと親しかったから，この人事はまずまずであった。しかし，孝徳が死去したときもナカノオオエを依然皇太子に据え置き，35代皇極は37代斉明と名を変えて再び皇位に返った。母と息子のこの関係はどうみても異常である。そして斉明が死んで，ナカノオオエはようやく38代天智となったのだった。その治政は実質で10年，そのうち６年は皇太子として「称制」，そのあとの４年が正式の天皇であった。その事績として後世に伝わる最大のものは「称制」２年８月，新羅と唐の連合軍と白村江で戦って敗れ，百済の滅亡を招いたことである。

天智８年藤原カマコが死んだ（56歳）。天智がその直前彼の家をたずねて「‥‥若し須き所有らば，便ち聞ゆべし」と言うと，カマコは「臣既に不敏し。当に復何をか言さむ。但し其の葬事は軽易なるを用ゐむ。‥‥」と答えたという。彼はこのときすでに「内臣」の位にあり

――名もカマタリ［鎌足］と改めていたが――天智はなお「大織冠」［天智朝改訂の26階の最高位］と「大臣」の位を授け，姓を藤原と名乗らせた。２人の関係はこの応対に如実に物語られている。‘蘇我時代’を挫折させた人物がやがて始まる‘藤原時代’の初祖となった。

２） オオアマ皇子の奪権

（ヨウ） 第38代天智が死んでオオアマが40代天武となるという兄から弟への皇位の移転は一般には当然のことと予想されていた。オオアマは天智朝ですでに「（東宮）大皇弟」と呼ばれており，朝政のほとんどを仕切っていたのであり，冠位改訂（→26階）・「近江令」制定なども実質的には彼の仕事であった。だがオオトモ皇子が生れて成人すると，彼に位を譲ろうと考えたのか，天智は死去する年のはじめになってオオトモを太政大臣に任じ，左大臣を蘇我赤兄臣，右大臣を中臣金連‥‥とする新人事を行った。これは肉親の情としては理解しえないことではない。しかし，臨終の床にオオアマを呼んで「朕，疾甚し。後事を以て汝に属く」と言い渡したので混乱した。これが私の言っている優柔不断だ。オオアマはひとまず断った。皇位は「大后」［ヤマトノヒメオオキミ］に渡し，オオトモに政治を担当させればよい。私はあなたのために出家して功徳を積みたいと吉野に退きこもった。「虎に翼を着て放てり」との評があったという。そしてまもなくオオアマを除こうとする近江［オオトモ］朝廷の動きを内報する者があって，遂にオオアマは「‥‥何ぞ黙して身を亡さむや」と蹶起した。いわゆる‘壬申の乱’（672年）であるが，１ヵ月に及ぶ内戦の末，瀬田（滋賀県）の決戦で近江軍は敗れてオオトモは自害し，翌年正月天武が皇位についた。

天智の死後，壬申内戦結着までの７ヵ月間，オオトモ皇子が皇位にあったとする主張が平安中期以降の史料にあらわれ，これをうけてはるかのち，明治３年（1870）39代弘文天皇と追諡することが行われているが，『紀』は彼の即位には全く触れていない。

（マイケル） どうしてそんなん作為が必要になったのだろう。天皇位が「称制」する者さえないまま，全く空位になっては困る；連続性が途切れてしまっては困るということなのでしょうか？でも逆に，弘文天皇を認めれば，その天皇を公然と殺した当の人物が天皇になったのだから，あからさまな帝位簒奪を認めることになる。痛し痒しですね。あの吉田松陰も「神器正統一体ト云ハ，禅受ノ正シキヲ言ナリ，奪取タル事ニ非ズ」と論じながら，「然ルニ天武天皇ノ天智大友ヲ弑シテ璽ヲ奪フハ如何，‥‥是古今絶無ノ事ニテ，言ニ忍ヒサル事ナリ，然レドモ大友已ニ崩ス，天位一日モ空シクスヘカラサレハ，天武ノ位ニ即ク亦理勢ノ極ル所ナリ‥‥」［『講孟余話』］と説明に窮しています。

（ヨウ） そうだ！世にいう‘壬申の乱’は‘壬申内戦’と呼ぶべきだとさっき言ったが，もっとその内容に即せば‘壬申革命’だったのだ。力による天武の権力掌握は‘大化改新’が手をつけられなかった旧来の宮廷中枢部を人的に一新し，全く新らしい統治機構を創出した。今日の時点で日本史を振り返ってもまさに古今絶無の‘革命’だったのだ。

（マイケル） ところで話の本筋からちょっとズレるかも知れませんが，ヌカダノオオキミ［額田（姫）王］をめぐるナカノオオエとオオアマの昔の恋の鞘当てがこの動乱の底流になっていた

ということはないんでしょうか？

（ヨウ）　ひと昔以上の前のことだから直接の遺恨ということはないだろうが，この兄弟の間に何か心理的にわだかまるものがなかったとはいえまいね。ナカノオオエはオオアマの実力を認め，またその助力を多としてきたのだから，そのまま皇位の禅譲となって少しもおかしくはなかった。オオトモ皇子はそのあととしてよかっただろう。因みにいえば，ヌカダノオオキミについての確実な情報は『万葉集』に収録された13首［実質12首］の歌しかない。彼女とこの兄弟に直接かかわるのはよく知られた以下の4首だ。

（イ）（天皇，蒲生野に遊猟しましし時，額田王の作れる歌）
あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖ふる　［20］

（ロ）（皇太子の答へませる御歌）
むらさきのにほへる妹を憎くあらば人づまゆえに吾恋ひめやも　［21］

（ハ）（額田王，近江天皇を思ひて作れる歌）
君待つとわが恋ひをればわが屋戸のすだれ動かし秋の風吹く　［488］

（ニ）（天皇の大殯の時の歌‥‥額田王）
かからむの懐知りせば大御船はてし泊に標結はましを　［151］

（イ）と（ロ）の相聞歌は天智７年のもので，『紀』はこれを「五月五日に，天皇，蒲生野に縦猟したまふ。時に大皇弟［オオアマ皇子］・諸王・内臣及び諸臣，皆悉に従なり」と記録している。この年正月，ナカノオオエは６年間の「称制」をやめて正式に即位したのだった。

ここからわかる第１の点は，ヌカダノオオキミとオオアマの恋はここに至ってもまだ昔語りになっていないということ，つまりすでに娘［十市皇女］までもうけていた２人が別れて，オオキミがナカノオオエの妃となったのは本人たちの意志ではなかったことである。ナカノオオエもそうなることを望んだのだろうが，そうなら兄弟喧嘩は避けられない。３人を納得させた力，それは兄弟の実母である35代皇極＝37代斉明の意向以外には考えられない。とすると，これは男女の恋の物語り以上に，母と息子の問題であり，皇極が皇太子に立てたナカノオオエの補佐をオオキミに托したという限りでは政治の問題だったことになる。

ヌカダノオオキミの系譜は明らかでなく，『紀』は「鏡王の女」と書くが，その鏡王の出自もわからない。中臣カマタリの嫡室となった‘鏡姫王’の妹だったという者もあり，皇極の夫・舒明の皇女の１人と推理する者もある。ともかく皇極にごく親しく近侍して，実の母と娘のような関係にあった皇女なのだろう。天智の夫人になってからも３人の間に波風が立つようなことはなかったろうことは，うえの歌（ハ）（ニ）からも窺いうる。歌人として名が高かったが，浮き名を流すといったタイプの女性ではなかったようだ。

（マイケル）　２人の皇子，いずれも天皇になった男たちを手玉にとった才媛となると，どうもクレオパトラを連想してしまいますが，ひどく華々しい人ではなくむしろ淑やかな美女だったんですね。

（ヨウ）　私のイメージはそうなる。それにしても，この兄弟，天智・天武の血縁関係は込み入って

いる。オオアマとヌカダノオオキミの愛の結晶である十市皇女はオオトモの夫人になっていて，吉野に退いたオオアマに対する近江朝廷の不穏な動きを内報していたという伝えがあるし，ヌカダノオオキミも近江朝の内廷にあったのだから，オオアマに危険の迫ることを伝えなかった筈がない。オオアマが機先を制して立ち上れたのもこれに負うところが大きかったのかも知れない。内戦の真因は，オオトモを擁して実権を握ろうとする近江朝中枢部がオオアマの影響力を恐れて彼を亡きものにしようと企らんだことにあったといえよう。天武は天智の娘ウノノ皇女［鸕野＝菟野皇女］を皇后［→41代持統］としてクサカベ皇太子を得，クサカベは天智の娘アベ皇女［→43代元明］を娶って42代文武，44代元正を継嗣として得た。一口に言って第35代から第44代までの皇統は，皇極――つまりは天智・天武――のごく狭い家系のなかにあった［前掲図Ⅰ-3再照］。

3） 天武における〈神〉と〈仏〉

（ヨウ） 天武には確かにそれまでの天皇にはみられなかった素質がある。伝統にこだわらず自ら自由に発想する力，いわゆるカリスマがある。古くからの言い方では‘巫頻’とも呼ぶべき呪力である。「‥‥壮に及りて雄抜しく神武し。天文・遁甲に能し」と『紀』は記すが，実際にも「占星台を興つ」（天武４年正月）という気の入れ方だった。其れまで日本では天文術への関心はなく，そもそも〈星〉に関心をもつこともなかった。天にあるのは〈日〉と〈月〉までであって，〈星〉はむしろ凶事の兆とも想われていたのである。

これを壬申内戦に即してみれば以下のようである。吉野から東回りに北上する行程をとったオオアマはその翌日，伊賀で天にかかった黒雲を見た。「親ら式を秉りて占ひ」「天下両つに分れむ祥なり。然れども朕遂に天下を得むか」と判じた。そして鈴鹿の関を越えたその翌々日の朝，「朝明郡の迹太川の辺にして天神太神を望拝みたまふ」という行動をとっている。更にまた戦況たけなわに及んで，高市の県主・許梅なる男が神懸りとなり，「吾は‥‥事代主神なり，又生霊神なり」と名乗って，「神日本磐余彦天皇の陵に，馬及び種種の兵器を奉れ‥‥」と託宣したのでこれを実行している。近江朝廷軍を撃破するまでの１ヵ月間，オオアマはわが国古来の〈神〉々＝「神祇の霊に頼」って［高市皇子の言葉］，全軍の戦意を高揚させてきたのである。なかでも注目されることは，ここでカムヤマトイワレビコ，即ち第１代「神武天皇」の加護を要請している点であろう。この初代「天皇」の名が史料にあらわれたことはこれが初めてである。オオアマの念頭には〈アマテラス〉→〈神武〉→〈オオアマ（天武）〉という皇統のイメージが生れていた。ここでは〈アマテラス〉も単に‘神々の神’というよりは‘至高の神’つまり言葉の厳密な意味での〈皇祖〉と意識されたのではなかったか。

しかし，翌（天武）２年飛鳥浄御原宮で帝位についたオオアマ＝天武の治政は〈神〉のみにこだわっていない。むしろ〈仏〉の「法」がいうところの菩薩道の実践を意識するようになったとさえ思える。これが〈神〉，それが〈仏〉という区別をたてず，いずれでも良しと思うところは直ちに行ない，悪いと思うところは排するという天衣無縫な姿勢である。彼の治政の前半期から注目されるところを拾ってみよう。

（イ）「書生を聚へて，始めて一切経を川原寺に写したまふ」［天武２年］

（ロ）高市の大寺［←「百済大寺」（舒明11年）］の造営に着手［同２年］

→「大官大寺」［６年９月］

（ハ）大来皇女を伊勢神宮の斎宮とする［３年10月］

（ニ）「僧尼二千四百余を請せて，大きに設斎す」［４年４月］

（ホ）①「風神を竜田の立野に祀らしむ」 ②「大忌神を広瀬の河曲に祭らしむ」［同上］

［①は風水害無きを祈る，②は山谷の水が水田をうるおし，五穀を稔らせることを祈る；以後，竜田・広瀬祭として毎年施行］

（ヘ）「大きに旱す。‥‥幣帛を捧げて，諸の神祇に祈らしむ。亦諸の僧尼を請せて三宝に祈らしむ。然れども雨ふらず。‥‥」［５年暮］

（ト）「諸国に詔して，放生たしむ」［５年８月］

（チ）「使を四方の国に遣して，金光明経・仁王経を説かしむ」［５年11月］

（リ）「天神地祇を祀らむとして，天下悉に祓禊す」［７年春］

（マイケル） では‘神さま仏さま’どちらでもよい，ということになりますか？

（ヨウ） 願いをかなえてほしいという限りではそういえるだろう。しかし〈神〉と〈仏〉はやはり違ったものだ。天武にはそれがわかっていた。

〈神〉というのは，人為を超えた力だ。天地自然の神秘，つまり人間が左右することのできない力だ。人間にとっては‘運命’とでも言うしかない力なのだ。彼が自ら占いや‘うけひ’を行ない，天文の術に関心をもったのはこれである。天武『紀』に「箒星」，「熒惑」（火星），「大星」（太白星），「七星」など〈星〉々の観察が多く記されている。それらをどう読んだかは書かれていないが，単に人の側から推理しただけではない。〈神〉の側からの意思表示もある。彼はこれを「天瑞」と呼んで大切にした。いわゆる瑞兆だ。

（マイケル） なるほど，確かに「天瑞」と考えられたものがたくさん挙げられていますネ。面白半分に拾ってみると；――白雉，白鷹，白鵄，瑞鶏，赤烏，瑞稲，芝草（霊芝），麟角（鹿角），白巫鳥，朱雀，嘉禾，白茅鴟（フクロウ），赤亀，三足ある雀，鶴（鶴），白海石榴，四足ある鶏，十二の角ある犢，白瑪瑙‥‥まあこんなところです。「白」いものが珍重されたようですが，「朱」がとくにすきだったらしい。天武15年を彼の病の平癒を願って朱鳥の元年と改元してもいます［７月］。

（ヨウ） そうしたことを唯の‘縁起かつぎ’と言ってしまっては，彼の心がわからないということになるのだろうね。ところでもう一方の〈仏〉だが，これには２つの見方がある。（イ）１人の人間，ゴータマ・ブッダの‘自ら努めて涅槃に至る’という生き方に学んで，これを各人が自己の行為の模範とするという本来の見地と，いや（ロ）実はそのおシャカさまは遥か昔から実在する如来［「久遠の本仏」］の現世での顕現なのだと解釈し，その救いを祈念するという後来の見地とである。後者（ロ）は自らを‘大乗’――誰もが〈仏〉の救いの船に乗れる大きな船――と称して，前者（イ）は‘小乗’――俗世を離れ［「出家」して］修行する者たちだけ

しか乗れない小さな船――にすぎないと批判した。日本に伝えられた〈仏〉の教えの大勢が‘大乗’だったことは，ウマヤド皇太子がその教義を「法華義疏」［これはいわば‘大乗教宣言’である］と「勝鬘経義疏」「維摩経義疏」［この２つは出家せず俗世の生活をする者たちの心構えを説く］として解説したことに示されている。この‘大乗仏教’の見地，つまり〈如来〉崇拝が日本在来の〈神〉と親近性をもっていることは誰にもわかるだろう。どちらももともとは人なのにいつしか人をはるかに超えたものとして崇敬の対象とされ，神格化される。それを信ずることにさしたる困難はない。

（マイケル）　日本は〈神〉の国であって，同時に〈仏〉を奉ずる国である。それがお互いに排斥しあわないんですね。でも人々に何を教え何を要求するかという点では違いがある。〈神〉は何も教えないのに，〈仏〉はあれこれ指示を出しています。

（ヨウ）〈神〉の道に教義（ディシプリン）がないことはそうだと思う。しかし要求はある。神に近づき神を祭ることだ。そして神に近づくにはそれに先だって身を清め，穢れを払わねばならない。〈禊（ミソギ）・祓（ハライ）〉だ。

他方，〈仏〉の大乗的な道［菩提道］は「六波羅蜜」［布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧］と定式化されたが，実践的には何よりも第１に「布施」だ。他者への物質的・精神的なほどこしである。他者の幸せのためにつくすことを自らの幸せとする行為といってもよい。

そこでまず〈神〉にかかわることとしていえば，天武は天皇即位の儀式として新穀をもって神祇を祭る「大嘗（おほにえ）」の祭りを創始し，その直後［２年12月］，「大嘗に侍奉（つかへまつ）れる中臣（なかとみ）・忌部（いむべ）及び神官（かむつかさ）の人等（ども）‥‥に悉（ことごとく）に禄（もの）賜ふ」とした。これが――すぐ後でみる――‘神祇官’の発祥となった。〈神〉を祭ることが天皇直轄の仕事となった。そして竜田・広瀬の祭を始めて，これを毎年の行事とし，時に応じて「四方に大解除（おほはらへ）せむ」［５年８月，７年１月，10年７月，15（朱鳥１）年７月］と各国造に指令している。彼の時代から〈浄（きよ）〉めるという観念がひときわ重要視されるようになった。自らの造営した宮殿を「飛鳥浄御原宮（あすかのきよみはらのみや）」と命名したのは象徴的である［元年冬］。

他方，〈仏〉の道に従うという考えの実践として印象的なのは，天武が即位直後から繰り返し「天下（あめのした）に大赦（おほきにつみゆる）したまふ」［２年３月～］と罪人の赦免を行っていることがある。それは２年３月をはじめとして，計11回［治世は15年］にも及んだ。その範囲に異同はあるが，例えば「死刑（ころすつみ）・没官（つかさにおさむるつみ）・三流（みつのながすつみ）（遠流・中流・近流）は，並（ならび）に一等降（ひちしなくだ）せ。従罪（みつかふつみ）より以下（しもつかた）は‥‥悉（ことごとく）に赦せ‥‥」［５年８月］，また「大辟罪（しぬるつみ）より以下，悉に赦す」［８年12月］といった具合である。この赦免の対象は人に止まらない。狩猟・漁猟者に対して「檻穽（おりししあな）を造り，機槍（ふみはなちたぐい）の等を施（お）くこと莫（まな）。亦‥‥比弥沙伎理（ひみさきり）・梁（やな）を置くこと莫（また）。且（また）牛・馬・犬・猿（さる）・鶏の宍を食ふこと莫（まな）‥‥」［４年４月］と鳥獣魚類の命を損うこと，とりわけその残虐な殺生を禁じている。「諸国（くにぐに）に詔して，放生（いきものはな）たしむ」［５年８月］と‘放生会（ホウジョウエ）’をはじめたのも同趣意であろう。要は生命あるものをおろそかにしまいという考えだ。

（マイケル）　同じ考えからでしょうが，貧民の救恤も記録されていますね。「大恩（みめぐみ）を降して貧乏（まづしきもの）を

恤(めぐ)む。以(ここをも)て其(そ)の飢寒(うゑこいたるもの)に給(ものたま)ふ」［8年2月］。「京(みやこ)内(のうち)の諸寺(てらでら)の貧乏(ひんぼう)しき僧尼(ほうしあま)及(およ)び百姓(おほみたから)を恤(めぐ)みて，賑給(にぎはへたまひ)す‥‥」［9年10月］とあります。

（ヨウ） 以上のように〈神〉〈仏〉の道と考えるところを実践してきた天武は更に9年4月に至って大きな決断をした。

「凡(おほよ)そ諸寺(てらでら)は，今(いま)より以(の)後(ち)，国(くに)の大寺(おほでら)たるもの二三(ふたつみつ)を除(お)きて，以外(このほか)は官司(つかさつかさ)治(おさめ)むること莫(なか)れ。唯(ただ)し其(そ)の食封(へひと)有らむ者は，先後(さきのちみそとせ)三十年を限(かぎ)れ。‥‥且(また)以(おも)為(ふ)に，飛鳥寺は司(つかさ)の治(おさめ)に関(あづか)るべからじ。然も元より大寺として，官司恒(つね)に治めき。復嘗て有功(たすか)れたり。是(ここ)を以(も)て，猶し官治(つかさ)むる例(かぎり)に入れよ」

これは神祇と仏寺の管理責任を別つという限りでは行政の整頓にすぎないが，〈神〉の祭りは国家――天皇――が，〈仏〉の事は各々の私人が取り行うべきだという区別，その限りで〈公〉と〈私〉の境界を明示したという意味では重大だった。そしてこの区別は正しい。〈公〉のことは〈神〉に，〈私〉のことは〈仏〉に，である。ここから「諸国(くにぐに)に，家毎(いへ)に，仏舎(ほとけのおほとの)を作りて，乃ち仏像(すなわちほとけのみかた)及び経(きょう)を置きて礼拝(らいはい)供養せよ」［14年3月］との詔(みことのり)も出されることになった。

これを天皇個人についていえば，その存在そのものは〈公〉であるが，しかし，彼の身体・生命は彼個人のもの〈私〉である。そうであるから，経も彼のなかでは2様に分れた。

（イ）ひとつは金光明経と仁王経である。金光明経はこの経を読誦する国を四天王が守護すると説くいわゆる‘鎮護国家’祈願の経で，先にウマヤド皇子が四天王寺を建てたが，このあと聖武が全国69か処に建立を命じた（741年）金光明四天王護国之寺［＝国分寺：総国分寺は東大寺］もこれによっている。仁王［般若波羅密］経もこの経を受持し講讃すれば災難を滅して幸福を得ると説くもので，その先例は斉明6年（660）5月「一百(もも)の高座(かうざ)・一百の納袈裟(のうけさ)を造りて，仁王般若の会(をがみ)を設(ま)く」にみる。どちらも〈仏〉の道の本流からはずれた権力者におもねる渡来僧たちの推奨によるのだろう。

（ロ）他方，〈私〉のために奉じられた経は薬師経である。天武9年11月12日「皇后(きさき)，体不予(みやまひ)したまふ。則ち皇后の為に誓願(ちか)ひて，初めて薬師寺を興(た)つ。仍りて一百僧(ももたりのほうしいへで)を度せしむ。是に由りて，安平(みやまひい)ゆること得たまへり。」この薬師寺はのち平城京造営時にそこに移設され，今日に伝わる大伽藍となった。経の名は「薬師［瑠璃光］如来本願功徳経」である。その内容は「仏(ほとけ)」が「曼珠室利(まんじゅしり)」［文殊菩薩］に告げたこととして，東方に「浄瑠璃(じょうるり)」という名の薬師瑠璃光如来がいるが，この如来が菩薩であったとき「十二の大願(だいがん)」を発(おこ)してこれを実現したというにある。治病という点は「第七の大願，願(ねがわ)くは我・来世に菩提を得ん時，若し諸(もろもろ)の有情(うじょう)，衆病逼切(しゅうびょうひつせつ)して，救無く，帰無く，医無く，薬無く，親無く，家無く，貧窮(びんぐ)多苦ならんに，我が名号(みょうごう)一たび其の耳に経れなば，衆病悉く除(のぞ)き身心(しんじん)安楽にして，家属資具(けぞくしぐ)悉く皆豊足(ぶそく)し，及至無上菩提を証得せん」とある。この大願のいうところは全く有難いが，経自体はどうみてもインド産ではない。上にいう12の「大願」が唯列挙されているだけの素っ気ないもので，「佛告曼珠室利」という書き出しもおかしい。そもそも『法華経』には薬師如来は登場せず，薬王菩薩があるだけで，十方にある数々の仏国土のうち東方にいるのは阿閦(あしく)（アクショービヤ）如来

と須弥頂（メール＝クータ）如来だと言っている。だからのちの世の誰かが病に苦しむ多くの者たちに妙薬のように効能のある仏として薬師如来なるものを附加し，それを権威づける経を創作したと理解するしかあるまい。玄奘訳をはじめとする５訳があるというが，実際は中国製のいわゆる‘偽経’であるのかも知れない。極めて便利な如来と経であり，法隆寺本尊とされる‘薬師王尊’はウマヤド皇子が父・用明天皇の病気平癒を祈って造ったとされるのを最古として，日本では広く信仰されることになった。

（マイケル）　中国仏教の最古の姿を伝える雲崗石窟には阿弥陀如来や薬師如来の姿は見当らず，五代山でもっとも古い「大華厳寺」［唐・則天武后命名→（現）顕通寺］の本堂「大雄宝殿」には〈阿弥陀（右）－釈迦（中央）－薬師（左）〉という‘横三世仏’が祀られている，と先生の報告書に書かれていますね。

（ヨウ）　そうだ。阿弥陀如来（アミターユス）と西方のその仏国土・極楽（スカーヴァティー）のことは既に『法華経』に説かれているが，その功徳は何といっても死後＝来世のことだから，今の危急の場には間に合わない。そこでこれに似せて薬師を創ったというのが真相なのだろう。もっともアミダが菩薩だったとき［法蔵］の誓願は48，ヤクシの方は12だから，そこでも相当お手軽になっているね。しかしともかくも，薬師如来は天武の手によって華々しく日本を代表する仏として登場したのだった。天武の死の５ヵ月前，「天皇，始めて体不安れたまふ」となったときも，「因りて，川原寺［母，斉明天皇の菩提寺］にて，薬師経を説かしむ」とある。因みに天武が重篤となった朱鳥元年７月には，もはや彼自身の発意ではなく，「諸王臣等，天皇の為に，観世音［アヴァローキテーシュヴァラ］像を造れり，則ち観世音経を大官大寺に説かしむ」とある。ここにいう経は『法華経』の観世音菩薩普門品（第25）であろう。‘仏と法’についてのおおよそは以上の通りだが，なお一言すれば，14年10月「是の月に，金剛般若経を宮中に説かしむ」との記事がある。天武がどれほどこの経を理解したかは定かではないが，般若［波羅密（＝智慧の完成）］経は，大乗系仏典の基本的理論書であり，なかでも「金剛般若経」は最古の哲学的著作として古くからインドでも中国でも広く学ばれた経である。

（マイケル）　日本では般若経といえばすぐ「般若心経」となりますが，それではダメなんですか？

（ヨウ）　ダメというわけではない。〈空〉の観念を持ち出したという点では仏教哲学を更に進めたものと言ってよい。しかし「心経」だけを読んでも〈空〉とは何かはわからない。では，「金剛般若経」の説いたところは何か？中国語でいえば「一切法無我」（一切の法は無我なり）ということになろうか，その真意は‘何ものにもとらわれた心を起してはならない。何ごとにもとらわれない心をおこさなければならない’ということだ。中国訳に戻っていえば「応生無所住心」［まさに住する所無き心を生ずべし］，「応無所住而生其心」［まさに住する所無くして，しかもその心を生ずべし］となる。［ここで「其心」とは「清浄心」と言われているがこれを説明するのは簡単ではない。‘前世の「業」から解き放たれた’とひとまず言っておこう。］‘とらわれない’というのは‘こだわらない’と言いかえてもよい。

（マイケル）　経のなかの言い方では「〈善の法〉〈善の法〉というのは法ではない。‥‥それだから

《善の法》と言われるのだ」とありますが，そう聞くとヘーゲルの〈正－反－合〉と同じだと僕には思えます。善いというところにも‘立ち止ってはならない’という心のダイナミズムを説くということになりますか？

（ヨウ） そういうことかも知れない。ともかく私がここで注目したかったのは，ウマヤドが『法華経』という大乗的信仰の勧奨を中央に置いたのに対して天武は『般若経』という大乗哲学にまで進んだという点だ。

（マイケル） それが仏教の両輪なのでしょうね。先生がインドのアジャンタ石窟でみた〈金剛手菩薩（右）－釈迦（中央）－蓮華手菩薩（左）〉の三尊像はまさにそれじゃぁありませんか！

4） 神［祇官］の創設――〈神〉の独占

（ヨウ） 天武の行政上の施策としては特筆されるべきことが2つある。第1は律令の制定開始であり，第2は国家的修史事業の着手である。いずれも10年はじめのことであり，国家機構の構築をめざす長期計画であった。

まず律令だが，これは10年2月，

天皇・皇后共に大極殿に居しまして，親王・諸王及び諸臣を喚して，詔して曰はく「朕，今より更，律令を定め，法式を改めむと欲ふ。故，俱に是の事を修めよ。然も頓に是のみを務に就さば，公事闕くこと有らむ。人を分けて行ふべし」

と。そして11年8月「親王より以下及び諸臣に令して，各法式として用ゐるべき事を申さしむ」とある。しかしこの「律令」自体もその完成時日は記録されていない。15年［＝朱鳥元年］5月から重い病にかかった天武の病気平癒を願うさまざまな行事にまぎれたのだと思われるが，死去時［同年（686）9月］に「令」はほぼ完成していたようで，「殯宮」での「誄」［弔辞］を読んだ人々の官職からもその様子がうかがえる［持統3年6月「諸司に令一部二十二巻班ち賜ふ」とあるから，まず「令」だけが頒布されたのだろう］。これを含めて，『紀』にあらわれる官・省・寮・職名を拾ってみれば図Ⅰ-5となる。のち文武朝になって忍壁皇子（天武の皇子の1人）らがつくった大宝律令［大宝元年（701）8月］はこれを拡張・整頓したものであり，その完成の記事にも「大略以二浄御原朝廷一為二准正一」とある。

（マイケル） 一説には，天智朝に‘近江令’なるものができていたとありますが‥‥？

（ヨウ） それは誤認だ。図Ⅰ－5にも示したように，天智の時代にのちにも使われる官職名の若干があらわれるが，これは行政上必要最小限のもので，体系的な行政機構の構築ではない。

肝心なのはそんなことではない。天武の「浄御原［律］令」でもっとも大切なのはその総構成が神［祇］官と太政官の2本立てとされている点なのだ。日本の律令は隋・唐の律令をモデルにしたものと一般に言われているけれども，中央官制としては共通性に乏しく，とくに太政官の外に，それに先んじて神祇官を置くという編成は全く日本的であり，天武的なのだ。

（マイケル） 中国には，〈帝〉があって〈神〉らしい神はないと先生は書かれていますが，そこが日本との違いなんですね。

（ヨウ） そう，その点を横に置いて，日本の律令をあれこれ吟味した研究は多いけど，それらは森

図Ⅰ-5　官制の形成―‘飛鳥浄御原令’を軸にしてみる

〔年月は『紀』に初出時：制定時ではない〕

〔近江令〕（天智）	浄御原令	（参考）〔大宝令〕大宝元（701）年
	（天武）→（持統）	（文武）
	神官 2年12月 → 神祇官 3年8月	神祇官
	太政官 朱鳥1年9月	太政官
太政大臣 10年1月	→ 太政大臣 4年7月	太政大臣
左大臣 10年1月	→ 左大臣（文武4年1月）	左大臣
右大臣 10年1月	→ 右大臣 4年7月	右大臣
	納言 9年7月	
御史大夫 10年1月		
大納言（天武（即位前）1年8月）	大納言 10年10月	大納言
（中納言？）	中納言 6年2月	
（少納言？）	少納言 ？	少納言
	大弁官 7年10月	〔左・右〕大弁
	巡察使 8年7月	巡察使
		△ 中務省
	左・右（大）舎人 13年1月	
		〔左・右〕大舎人寮
	陰陽寮 4年1月	陰陽寮
	侍医（朱鳥1年4月）	侍医
法官大輔 10年1月	○ 法官 7年10月	△ 武部省
学職頭 10年1月	大学寮 4年1月	大学寮
	○ 理官 10年9月	△ 治部省
	楽官 1年1月	雅楽寮
	○ 民部省（朱鳥1年7月）	△ 民部省
	○	主税寮
	○ 兵政官（朱鳥1年9月）	△ 兵部省
	○ 刑官（朱鳥1年9月）	△ 刑部省
大蔵省 10年1月	○ 大蔵省（朱鳥1年9月）	△ 大蔵省
	宮内官 11年3月	△ 宮内省
大炊省 10年□月	膳職（朱鳥1年9月）	大膳職
	外薬寮 4年1月	大炊寮
	医師（朱鳥1年1月）	典薬寮
		弾正尹
	左右兵行（朱鳥1年9月）	〔左・右〕兵行府
		〔左・右〕馬寮
	京職大夫 14年3月	〔左・右〕京職
	太宰府 6年11月	太宰府
	（以下略）	（以下略）

はみるが中央に独り聳える大樹を見ないに等しい。‘いや無視してはいない。しかし現実には太政官より下級の官庁だったのだ’などという人がいるが，では何故『大宝令』（701年）や『養老令』（718年）に至っても職員令の筆頭に神祇官が挙げられているのか？あるいはまた‘神祇官のトップの官人の官位は「伯」（従四位下）であって，太政官の太政大臣・左右大臣（正・従一位：正・従二位）のはるか下だ’という人もいるが，こうした人たちは「令」の官制の上には天皇がいるのだということを忘れている。つまり〈天皇→神祇伯，‥‥〉と〈天皇→太政大臣or左・右大臣，‥‥〉という同じ構造なのだ。神祇伯以下に任命されるのはこれまでずっと世襲的に神祇の祭祀を司どってきた中臣，忌部らの特定氏族であるから，神祇官は有力な中央諸豪族も入り込めない神聖な官庁だということになる。端的にいえば，神祇官の創設は天皇による〈神〉の独占体制の創出だったのだ。

（マイケル）　カトリック教会における〈神（父なる神と子）→神父，‥‥〉の構造に似ていますね。〈神（アマテラス→天武）→神祇伯，‥‥〉。この体制によって〈神〉はいよいよ高いものとして崇められ，その神を祭る〈天皇〉はいよいよ神に近い存在になる。「大君は神にしませば天雲の雷（いかづち）の上にいほらせるかも」と柿本人麻呂の歌にもあります［『万葉集』235］。

（ヨウ）　これまで『記』・『紀』の表現を使って「神」々と言ってきたのだけれど，それは‘優れた〈人〉’以上ではなく，天武に至ってようやく〈人〉ではない〈神〉＝〈アマテラス→（神武）→‥‥天武〉が造り出されることになったのだ。アマテラスは倭（やまと）氏の祖霊というだけではない；日本全土の祖霊として観念しようという成り行きになってきた。

「天皇」についても同じことだ。『記』・『紀』に「天皇」々々とあるのは実際の表現ではない。そう思ってこれまで出来る限り使うのを控えてきたのだったが，天武に至ってようやく〈天皇〉という言葉が実質をもって使われるようになった。そうしなければ律令体制が成り立たない。中国ではこの体制の上に〈皇帝〉が居り，任意に律令をつくり変えてきたのだが，日本でも同様な体制をつくるなら，その上に立つ存在つまり〈天皇〉がなくてはならないわけだ。

とはいえ，〈皇帝〉と〈天皇〉の性格と力の相異は歴然だ。皇帝は外からそして上から降ってきた〈力〉づくの専制権力だが，天皇はいくつもある部［氏］族連合体の長に過ぎない。日本律令体制の目指したところはこのもろもろの氏族共同体を解体して，天皇１人のもとに，すべての民衆個々人を直轄しようというに尽きる。「班田制」はその象徴だ。しかし現実は１片の「令」で変えられるものではない。〈氏〉共同体との妥協が行われねばならなかったことは，ひとつには「氏上（このかみ）」－「大氏（おほきうじ）」・「小氏（ちひさきうじ）」－［天智３年］の決定を指示し，その徹底を図ること――「諸氏（うぢうぢ）の氏上未だ定まらざること有らば，各（おのおの）氏上を定めて，理（をさむる）官（つかさ）に申（の）べ送れ」［天武10年］――としてあらわれ，いまひとつには「諸氏（もろもろのうじ）の族姓（かばね）を改めて，八色（やくさ）の姓（かばね）を作（あめのした）りて，天下の万姓（よろつのかばね）を混（まろか）す」［同13年］としたことに示されている。ウマヤドの‘冠位12階’以降の‘〈氏〉人’の‘官人’への改造はまだ成就しないのであった。

（マイケル）「律令」は，形式上は「養老律令」から全く改訂されることなく――「格・式」によって補訂されるだけで――明治18年（1885）の内閣制度発足まで存続したということを聞くと，

日本は――中国どころのさわぎでなく――全く‘法治’になじまない社会だということを思い知らされますが，社会編成のユニットが〈氏（⇒家）共同体〉なのだということも有史以来今日まで変らないということなのでしょうか。‘班田制’も１世紀も経つと崩れはじめ，‘荘園制’になってしまうのですからね。

5）［明神］としての「天皇」

（ヨウ） まあ律令制の詳細については大勢の歴史家が頑張ってやってきていることだから私たちが立ち入るまでもあるまい。天武の事績に焦点を絞り直そう。私が注目したいと思うのは彼の12年正月の詔だ。

「明神御大八洲倭根子天皇の勅令をば諸の国司と国造・郡司及び百姓等，諸に聴くべし。朕，初めて鴻祚登ししより以来，天瑞，一二に非ずして多に至れり。伝に聞くならく，其の天瑞は，政を行ふ理，天道に協ふときには，応ふと。是に今朕が世に当りて，年毎に重ねて至る。一は以て懼り，一は以て嘉す。」

〈天瑞〉が人為の及ばない天地自然の神秘な力だということはさきに言ったが，「政」を然るべく行えばそれが力を藉してくれて，つまり‘祥瑞’になる；そう思って政治を行っているのだ，というのである。〈天瑞〉は〈神〉意なのだ。「天道」とはこれである。

（マイケル） でも「天道」などと言うのを聞くと，中国の〈天〉意と同じようなものかと思ってしまいますが‥‥。

（ヨウ） 似ているところもなくはないが，中国の〈天〉は日本の〈神〉のような意志はもたない。天道・天命・天意などという言葉は自身にカリスマをもたない皇帝たちが自己の恣意的な行為を正統化するための弁解なのだ。

これとは違って，天武のいう〈神〉は「皇祖」の神霊であって，現世の天皇が正しくさえあればそれを加護する‘霊威’なのだ。ここで天武が自らを称して「明神御大八洲‥‥天皇」と言っていることは，だから大切だ。「あきつみかみと」と古訓にあるのは不明瞭だが，これは‘あきつみかみであり’［この日本を統治する‥‥］という意味であって，〈明神〉というのは‘幽神’つまり祖霊と対置すべきもの，つまり〈いまこの現世にある神〉［＝天武天皇］ということなのだ。この意味で〈天皇＝神〉と自己を定義したのである。

（マイケル）「明神」という言葉は孝徳紀にも出ていますが，『紀』の編者が〈令〉制定後の表現を使ったものらしい。そしてのちには「みょうじん」と読むようになるわけですが，これは‘出家した〈神〉’＝〈菩薩〉と対比して‘世俗人のままである〈神〉’＝〈明神〉というイメージです。三輪大明神，春日大明神，豊国大明神［豊臣秀吉］などです。はるかに降って昭和天皇のいわゆる‘人間宣言’（1946年）は「天皇ヲ以テ現御神ト」するのは「架空ナル観念」だと言っていますが，これなどは天武天皇のはじめの「明神」の意味を正確に理解しているといえますか。

（ヨウ） そうだろうね。〈アマテラス→神武→天武〉‥‥そういう一筋に皇統を理解すべきだというあらかじめ設定された筋書きの上で，『記』『紀』が書かれることになったのだ。それまで

〈神祇〉と言われてきたものを〈明神〉の祖霊として一括し，その祖霊の原点，「皇祖」をアマテラスにしぼったのは天武の指示だとみてよい。スサノヲのような活潑で強力な大英雄ではなく，何もしないでただ太陽＝〈日〉として君臨するだけの存在が現世で統治するのが天武には具合がいい。〈日〉は唯一つで人は誰もその絶対的な存在に異を説えることは出来ない。天武はその唯一者の後継＝〈日継ぎ〉だというのだ。‘唯一絶対の神’の存在しない日本で，〈日〉の具現としてのアマテラスに始祖を絞り込むのは賢明だった。天武はそうして〈神〉を具象化し，「朕」を〈明神〉であると宣言したのだった。

（マイケル）『紀』の「神代」のはじめのところで，イザナギ・イザナミが「吾已に大八洲国及び山川草木を生めり。何ぞ天下の主者を生まざらむ」とのたまい「是に，共に日の神を生みまつります‥‥」という言い方で突然持ち出した〈日神〉とは素朴な太陽のイメージなのではなく，天武のつくり出した〈神〉観念だったのですね。『記』の方にはそんな記述は見えません。

（ヨウ）　つまり，後世に〈天皇制〉と呼ばれるようになるものはそう古いものではなく，天武の大王＝天皇によって創られたものだったのだ。

9．〈神祇〉の国から〈釈教〉の国へ

1）〈神祇〉の崇敬でなく，支配へ

（ヨウ）　天武帝による〈神祇〉国家の創出計画は彼の死によって中断された。むろんそれは制度的にはもう後戻りすることはないところまで構築されてゆく。「浄御原律令」の頂点に位置づけられた「神祇官」は「大宝律令」→「養老律令」に引きつがれ，これを承けて「職員令第ニは「‥‥以二神祇官一為二百官之首一」と宣い，「神祇令第六」は「凡天神地祇者。神祇官。皆依二常典一祭レ之ヲ」との規定を設けている［『令集解』巻ニ，七］。「天神」としては「伊勢」が，地祇では「大神」がそれぞれ筆頭に挙げられている。しかし問題はここに祭られる神々が如何にして現世にいま生きている人々が崇めまつる存在にまで高められるかにある。アマテラスにしてもオオモノヌシにしても人を感化する実績はないのであってみれば，‘神話’らしい神話は更めて創出されねばならない筈であった。しかしそれを果すべき‘預言者’はあらわれない。

（マイケル）　天武は自身の娘，大来皇女を伊勢神宮に遣ってアマテラスに奉仕させ，これが先例となって‘伊勢の斎王’が恒例となるわけですが，こうした年若い女性たちに‘預言者’は荷が重すぎますね。

（ヨウ）〈神〉を〈人〉の上に位するものとして印象づけるには‘託宣’，つまり誰かが神懸りになって神意を伝えるという方法がもっとも一般的だ。これは何も日本に限ったことではなく，多くの宗教が用いてきたもので，「斎王」などはうってつけなんだろうが，‥‥でも羅列的な‘託宣集’というだけでは足らない。それらに脈絡をつけ，そこで起ってくる諸事件を神秘化して解説する才能が求められる。

（マイケル）　空想家で，ストーリーテラーで‥‥といった人物が日本には出なかったんですね。イ

ンドなんかと比べると，同じアジア人と言われても天と地ほどの差ですね。シヴァやヴィシェヌばかりでなく釈迦の話でも，僕らからみれば大法螺としかいえない話を澄して語りだしている。

（ヨウ） 民族性といってしまえばそれまでだが，日本人はどうもクソ真面目で野放途なところがないね。自由がない。型にはめないと気が済まない。そのせいなのだろうが，〈神〉を崇めるという点からみるとき，天武は自覚なしにその正反対のことをしてしまった。壬申内戦の最中に神懸りになった男の口から語られた事代主神と生霊神の託宣に従って，初代天皇・神武の陵を祭り，この２神には「幣を捧げて‥‥礼ひ祭る」としたことまではよかったが，戦後「勅して三神の品を登げ進めて祀りたまふ」に至った。お礼の意味でもあったことは間違いないが，祖神の位［‘神階’］を生身の天皇が上げ下げするとはどういうことなのか？！天皇である天武は自身を祖霊たちより上の存在であると宣言してしまったのである。臣下に‘位階’を与えその功に従ってこれを進めるという律令官制の運用と異なるところは全くない。‘神は人である’という本音はここにはしなくも露呈されてしまったのだ。

２）「明神」の継承はできなかった

（ヨウ） まあこの点の追及はここまでとしよう。でも，もし「明神」が‘皇祖・皇宗’より上だとしてしまえば，いまこの世にある当の「明神」は何によって権威づけられうるのか？それは「明神」自身のアレテー［卓越した能力］ないしカリスマ以外にはない。それでことが済むのは「明神」を自称する天武個人の力量のゆえなのだ。だから彼の後援者がまた「明神」たりうる保証はない。そしてこの危惧は彼の死とともに現実となった。第40代天武死去の５日後，殯のはじまる日［朱鳥元年９月24日］に，将来を嘱望された彼の第二子・大津皇子は「皇太子を謀反むとす」との嫌疑で逮捕され［10月２日］，翌日「訳語田の舎に賜死む。‥‥妃皇子山辺，髪を被して徒跣にして，奔り赴きて殉ぬ。見る者皆歔く‥‥」という悲劇が起った。天武はすでに長子・草壁皇子を皇太子として立てた［天武10年］のではあったが，その翌々年「大津皇子，始めて朝政を聴しめす［同12年］,」となって，この両人が天皇を補佐する体制になっていたのだが。しかもなお天武はそれに先立って吉野宮に行幸した際［同８年］，上の２人を含めて同行した６名の皇子［彼のもうけた皇子は合計10名］に向って，「朕が男等，各々異腹にして生れたり。然れども今一母同産の如く慈まむ」と語って「襟を披きて其の六の皇子を抱きたまふ。因りて［６人も］盟ひて‥‥「若し茲の盟に違はば，忽に朕が身を亡さむ」のたま［い］‥‥皇后の盟ひたまふこと，且天皇の如し」と，念には念をいれてのちのことに配慮していたのだった。にもかかわらず，葬儀の営まれるのを待たずにこの事変である。何が真実なのか知る由もないが，皇太子に準ずる大津が一言の抗弁も許されずに屋敷をとり囲まれて翌日殺されるという顛末は異常である。それを許した人物，よりあからさまにいえば，それを指揮した人物は「臨朝称制」として権力の座を占めた天武の皇后［→第41代持統天皇］以外には考えられない。なぜ？？‥‥皇后自身の生んだ草壁に皇位を継承させたいという希みだったのか？大津は天武と大田皇女［持統の姉］の子であるから持統の甥である［前掲図Ⅰ-3再照］。それなのに‥‥とは思うが，ほかに動機は見当らない。では皇太子草壁は何をし

ていたのか？『紀』にみえるところでは何もしていない。もっぱら内外の要人たちを率いて「殯りの宮に適でて慟哭る」［持統称制２年１月，11月］ばかりであった。衆目のみるところ，皇位を継ぐべき資質について大津との間に歴然たる差があったらしく，『紀』も大津について「容止墻く岸しくして，音辞俊れ朗なり。‥‥長に及りて弁しくして才学有す。尤も文筆を愛みたまふ。詩賦の興，大津より始まれり」と前例のない高い讃辞を捧げている。『懐風藻』には彼の遺作「五言臨終一絶。金烏臨二西舎一，鼓声催二短命一，泉路無二賓主一，此夕誰家向」があり，『万葉集』には伊勢斎宮となっていた姉・大来皇子が上京して彼の邸近くの「磐余の池の般にして流涕みて作りませる御歌」として「もとづたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ」が載せられている。

だが，そうまでして‘草壁天皇’を希んだ持統にも幸せは訪れなかった。称制３年４月草壁は早世して，彼女は正式に皇位に就き［４年１月］，その後を草壁の子・第42代文武に譲るが［15歳で即位］，それも長くは続かず［在位697－707年］，皇位は第43代元明天皇［在位707－715年］に戻り，更に文武の姉第44代元正天皇［在位715－724年］に移る［前掲図Ⅰ－3］。持統から元正に至る間に，大宝律令制定［701年］，平城京遷都［710年］，古事記完成［712年］，風土記作成［713年］，日本書紀完成［720年］と年表に記事となる事績は続くが，新しい質の施策はなく，天武のプランが唯忠実に具体化されたまでだった。‘第２の明神’は生れなかったのであり，〈神祇〉を崇めて天皇を権威づけようとする長期構想に至っては想いつかれもしなかった。

（マイケル）　大津皇子がもし皇位を得ていればそんな新展開もありえたんじゃないか，などと空想したりするんですが‥‥

（ヨウ）　まぁそこまで行くと小説になってしまう。現実は，元正のあと第45代聖武となって，時代の流れは〈神祇〉から〈釈教〉へと転回を遂げることになるのだ。

10. 民衆のなかの〈神々〉

（マイケル）〈神祇〉のあらましはどうにか解ったような気がしますが，ここまででどうも気にかかるのは，話がいつも権力者＝天皇にかかわって動いてきたことです。そうした流れとは別の‘民衆的〈神祇〉’とでもいうべきものはなかったのでしょうか。

（ヨウ）　もちろんあった。ないわけはない。だが，そうしたものも『記』・『紀』という皇統譜のなかに織り込まれてしまったものが多く，その外に残った地方の神々は，『記』の完成の翌年［713年］に作成を命じられた『風土記』のなかに記録されたと思われるが，ほとんどが逸失して，完全に残っているのは『出雲風土記』にすぎないという有様だ。でもこの出雲国の限りでみても，『風土記』の完成した733年の時点で「神の社」399ヵ所，うち184ヵ所「神祇官に在り」，215ヵ所「神祇官に在らず」と報告されているから，倭朝廷の神祇官が掌握している神々より，国独自の神々の方が多いのだった。

しかし繰り言を言っていてもはじまらない。ここでできそうなのは，後の世まで多くの信仰者を集めた有名な神社の祭神のなかから皇統には属さない神々たちを拾い上げてその様子をみてみることだ。順不同である。

1） 大神（オオミワ）［大三輪］神社

（ヨウ） これについては既に詳しくみた。主神は大物主神（オオモノヌシ）；副神（？）は大己貴（オオナムチ）［大穴牟遅］神と少名彦古那（スクナヒコナ）神である。オオモノヌシは弥生期以前からのいわば‘原日本神’。オオナムチはスサノヲとクシナダ比売（ヒメ）の子孫だから，天つ神と国つ神の混血（ハーフ）。スクナビコナはカミムスビの子だというが，カミムスビは‘造化三神’の１人で国つ神（女性？）らしい。もともと社名はなく，ただ‘神山（オヤマ）’と呼ばれたらしいが，「神祇令」［養老令第６編］では神祇官のまつる「地祇」の筆頭に「大神（オオミワ）」とあり，神仏習合が進むなかで「大和国一の宮」とされる頃から「三輪明神」と呼ばれるようになり，‘神仏分離’後に「大神神社」と変えたものと思われる。

2） 金毘羅神社

（マイケル） ちょっと突拍子もないことを言うようですが，四国の讃岐に金毘羅神社がありますね。あの祭神がオオモノヌシだということ，先生は知っていますか？奈良東南の三輪山の神がどうして香川東部の瀬戸内海に面する象頭山（ぞうずさん）（琴平山）に祀られることになっているんですかね。

（ヨウ）「金毘羅船々　追手に帆かけてシュラシュシュシュ‥‥」というやつだね。あれは江戸に入ってからの俗謡だが，私は父が讃岐の丸亀の出なので縁がある。赤ん坊の時親に抱かれて参詣した写真も残っている。あそこには崇徳天皇の霊も祀られている。彼は第75代天皇［在位1123～41年］で74代鳥羽天皇と待賢門院の第１皇子だ。鳥羽上皇の恣意的な皇位継承策への彼の不満と藤原氏内の摂関争いが結びついて‘保元の乱’となり，敗れて讃岐に流されこの地で死んだ［1164年］。こちらの方はよくわかる。あとで西行にまつわる物語をきくときまた出てくる。

しかし肝心のコンピラさんについては確かなことはわからない。コンピラとはヒンドゥの神クンビーラ（Kumbhira）――鰐（ワニ）の化身――にはじまり，中国に渡って薬師如来を守護する十二神将の１人・宮毘羅（くびら）大将となった神に由来するのだという。どうしてそれが？‥‥ということだが，オオモノヌシは初めてオオナムチの前に現れたとき「海を光（てら）して依（よ）り来る神ありき」［『記』。『紀』もほぼ同じ］と記されていて‘海’にゆかりのある神らしいということ，そして何度か‘蛇（オロチ）’の姿で出てくるということ，これがクンビーラに似たものとしてイメージされたのではないか。ともあれ，象頭山は瀬戸内を航行する船乗りや漁民らの間で海難救助を祈念する神体山として信仰の対象となり，近世以降は菱垣廻船による西廻り航路によって遠く北陸・陸奥の地まで船の守護神として知られるようになった。どこまで遡れるのかわからないが，神代までということはないだろう。

3） 出雲大社

（ヨウ） これがオオナムチ［大国主神］を祀ることは誰もが知っている。オオモノヌシが純然たる‘原日本神’でじぶんから天つ神に従う気にはならなかったのと違って，オオナムチは先住・

土着のクシナダを母とし，かつて天つ神であったスサノヲを父とする者で，天つ神との話し合いに応じた。そして「天の下造らしし大神［所造天下大神］」であるとの自負をもって中ツ国と高天原国との対等性を主張した。その報告をうけた天ツ国の最高指揮者タカミムスビはこれを「深く其の理有り」と認め，両者は世俗の事は「吾孫」に，「神事」はオオナムチにということで折り合った。オオナムチの要求を容れて「高天の原」の宮殿に見合った社を地上に造ったのがこの出雲大社だという。

その規模の壮大さは，さきにも触れたが，平安初期［天禄元年（970）］の「口遊」に「雲太，和二，京三」［第１は出雲［杵築］大社，第２は大和の東大寺大仏殿，第３に京都の大極殿］とあるように日本最大の建造物だった。大仏殿が高15丈［≒45m］だからそれ以上で，高い柱と階段が天に昇るかとみえるほどの異形の祭殿であったという。そしてそのため1031年以降５回にわたって倒壊し，今日の‘大社造り’［24m］にはその面影はほとんど残っていない。『令義解』には「地祇」のなかに「出雲大汝神」と記されている。

なお，上のタカミムスビの約束に「‥‥又汝が祭祀を主らむは，天穂日命，是なり」とあるが，出雲・意宇郡には「野城大神の坐す」「野城の社」［能美神社］があり，その祭神を天乃夫比命だとしている［『風土記』］。アメノホヒ［天之菩卑能命］は高天原でのアマテラスとの〈うけひ〉でスサノヲが生んだ５神の第２子であり，ニニギの「降臨」の先触れとして派遣されたが，オオナムチに懐柔されて３年待っても帰ってこなかったとされている神である。「是出雲臣・土師連等が祖なり」と『紀』にあり，この意宇を本拠とする豪族となったらしい。

『風土記』のいうところでは，以上の２「大神」のほかになお２人の「大神」がいる。そのひとりは熊野大社に祀る熊野加武呂乃命――一説にはスサノヲの別名だという――であり，いまひとりは佐太御子社の祭神・佐太大神である。後者は「所謂佐太大神」とあって，その素性が明らかでないが，カミムスビの娘である枳佐加比売命を母とするといい，その社も此処にあるという。父は「金の弓箭」として象徴されているばかりで，キサカヒメがこの矢をもって，加賀の神埼［島根郡］にある「闇鬱き窟」を「射通し坐しき」という伝えだけが遺されている。

（マイケル）　出雲大社の話からだいぶ離れますが，『出雲風土記』の冒頭に出てくる八束水臣津野命の「国来々々と引き来縦える」４つの国から島根半島ができたという説話は独特ですね。イザナギ・イザナミの‘国生み’神話との対抗を意識したのでしょうか。

（ヨウ）　ウーン，どっちがどっちから着想を得たのか？でも性格は違う。一方は性交で子を産むのだが，他方は土地の余りを引き寄せるのだから。それにしても古代の出雲の地は特異だ。天つ神，国つ神，その後裔が入り乱れると同時に，全くの地方神たちがまた人々にひろく信仰されていたんだね。

４）　大国魂神社

（ヨウ）　大国魂神というのはその名の示すとおり，国つ神，つまりその土地の神ということだろう。『紀』は大国主神の「亦の名」［自身を含めて７つ］の１つとして「大国玉神」の名を挙げるが，『記』には――「大物主神」と同じく――その名がない［つまり５つの名しかない］ことは前

に触れた。オオモノヌシ同様に，オオクニタマを‘原日本神’なのだということを示唆しているように思える。しかし『記』に全くその名がないのではない。スサノヲと神大市比売命の長男は大年神だが，彼が伊恕比売神との間にもうけた５人の子の長男に大国御魂神がある。カムオオイチヒメは大山祇神［国つ神］の娘であり，イヌヒメは神活須毘神［これは神産巣神（国つ神の代表か？）であろうという］の娘だから，少し天つ神の血も入ってはいるが，まず国つ神だと断定していいだろう。一口に言って古くからの国つ神の代表の１人なのだ。

実際にも，大国魂ないし国魂の名を残す神社は全国に少なくない。ここでは最も規模の大きな武蔵国総社六所宮の場合をみよう。といっても古記録は焼失して江戸期に伝わる「縁起」「社伝」によるしかないのだが，「古キ伝ヘ記に，武蔵ノ国総社六所ノ宮者，人皇第十二代景行天皇ノ四十一年五月五日，威神現レ形告テ曰ク，吾ハ是大国魂ノ大神也，立ニ祠ヲ於茲一而能ク祭レ吾ヲ，不レ祭ラレ吾ヲ則チ四海不ニ安静一焉云云」とある。この文を引きながら当の神主は「‥‥吾は是昔シ天ノ下造りし大己貴命なり‥‥」とも言っている［『新撰総社伝記考証』］。例によってオオナムチ［オオクニヌシ］とオオクニタマとの混同はあるが，まあそれはいい。景行天皇41年‥‥とあるのは，皇子の１人小碓尊＝日本武尊が天皇の命によって東国の蝦夷を討って「武蔵・上野を転歴りて」帰国の途次，病に斃れたのが景行『紀』に40年と記されていることをふまえたものに違いない。そして上の「考証」はこれに続けて「同十三代成務天皇の御時・天ノ穂日ノ命，裔，兄多毛比命を武蔵ノ国造に定メ賜ひ，‥‥国府を此地に闢き官舎を創建せらるゝ時‥‥事の由を朝廷に奏し，始て宮社を造営し，其祖素戔嗚尊を配せ祀り，此二柱を国霊大神と崇め」まつることにした，と言っている。

ここで問題になるのはこの「宮社」が「武蔵国の総社」となったというのはどういうことなのか，また何時の事なのかという点である。それは「威霊灼然なる名神六所の大神等，及び国中諸神の御霊代を集祀」った「国司［＝国造］国中の神社の事務を行ふ斎場」なのであるというが，その時点は「何れの御代の時にか有けむ，伝へなければ今定かにはいひがたし」とあるだけだ。こんな大切なことがどうして「国史」に記録されていないのかとこの「考証」者は不満なのだが，各国の「総社」の働きは「朝廷の神祇官の斎院におなじきもの」だと考えてよいのであれば，天武の浄御原律令以後，つまり早くとも７世紀末か８世紀に入って以後のことだったろう。

しかし肝心なのは総社そのものではない。それは国衙の一部，つまり官庁なのだから人為的な造作物だ。そこへ国内の古くからある６つの神社を行政的に集合させたことが問題であり，これによって大国魂神社は‘武蔵総社六所宮’と変な名前で呼ばれるようになったのだ。

（マイケル）　どうして６社なんですか？

（ヨウ）　よくわからないが，国つ神の原点・出雲で「出雲総社六所神社」が造られたのをモデルにしたのではないか。武蔵国の場合，もともとの社殿は総社１殿と六所６殿が別々にあったのをのちに３殿３棟にまとめ，更にこんにちの１棟３扉に改造したのだ。沢山ある神社のなかからどうやって選んだのか，これも必然性はないだろう。国衙に勤務する有力官人たちの出身地の

神社を選び出すといったことになったのではないか。

（マイケル）　そんな話を聞くと，各地に根差した神社を国司の監督の便宜で勝手に動かしたりしていいのか！――と僕ならまず憤慨しますね。天皇が神より上になったという話しはさきに聞きましたが，地方官までが神を家来のように扱っている。で，集められたのはどんな神々だったんですか？

（ヨウ）　いま伝えられている「六所」の祭神は始めに祀られた神の名ではまずないから詮索してみてもあまり得るところはない。まあその中でもちょっとほかでは聞かないのは「一の宮」［小野神社］の天下春命（アメノシタハル）［ニニギに先立って降下したニギハヤヒの供］や「四の宮」［秩父神社］の知々夫彦（チチブ）命［秩父国造の始祖］ぐらいだろうか。あとはおきまりの有名な天つ神――スサノヲ，オオナムチ，タカミムスビ，ヤマトタケル，‥‥――たちだ。唯それぞれの神社の由緒を調べた人たちの推理では，初めに祀られたものは，〈雷〉［一の宮］，〈神池〉［三の宮・氷川神社］，〈鏡石（奇石）〉［五の宮・金佐奈（カナサナ）神社］などではないかという説があって面白い。その驥尾に付して付け加えるなら〈杉山〉［六の宮・杉山神社］もそうではないか。いずれも私のいう〈カミ〉［国つ神の祖］だが，あとから権威づけのためにそれを天つ神たちに置きかえたのだと思う。ともかくはっきりしないことが多い。さきに引いた『伝記考証』の著者はこれについて「すべて吾国府の六所宮には，ただ其社号を神名として斎奉る例なれば，祭神の御名には今はさしも抱はらず［実は抱はらざるにはあらざれども，已に伝を失ひたるを今いかにとかせむ］」と正直なことを言っている。

（マイケル）　先の三輪山の話しで，日本の神は〈森〉に住んでいるが，里人に招かれると麓の〈直会（ナオライ）〉の席に出てくる；その宴席としてつくられた仮の宮が常設となって〈神社〉になる；大事なのはその神社であって，そこに訪れる〈神々〉が誰であるかは二の次なのだ，ということでしたね。ホテルの宿泊客のようなものだから，すぐ忘れられてしまうのも当然です。神社の御輿でも誰を担いでいるのか気にする人はあまりいませんものね。

5）　熱田神宮

（ヨウ）　ヤマトタケルの話につなげるというわけではないが，次に熱田神宮をみよう。ここの主神は熱田大神と名付けられているが，実は草薙剣（くさなぎのつるぎ）だ。相殿（あいどの），つまり副神としてはアマテラス，スサノヲ，ヤマトタケル，ミヤズヒメ［宮簀媛命］，タケイナダネ［建稲種命］の5神を祀っている。タケイナダネはその名の通り稲など五穀の育成にあたった尾張開拓の祖神，ミヤズヒメは尾張国造（くにのみやつこ）の娘でヤマトタケルの妃となった。いずれも土地に根差した神である。

　他方アマテラス，スサノヲ，ヤマトタケルは皇統の神々ではあるが，いずれも草薙剣にかかわりがあるという限りでここに引き出されているに過ぎない。ではこの草薙剣とは何か。それはさきに述べたように‘原日本人’の王・ヤマタノオロチの宝物である。とすれば，この神宮はその外見とは異って，国つ神を祭る社（ヤシロ）なのだといってよい。

（マイケル）　僕がかねて不思議に思っているのは，どうしてこの草薙剣が皇統のシンボル‘三種神宝’の1つとしてのちのちまで伝えられることになるのかという点です。この国の先住王を斃

した勝利の印というならスサノヲの十拳剣を，とするのが当然だと思うのですが。草薙剣はこの一件でスサノヲの手に入ってから→アマテラスに献上→ニニギの「降臨」に賜与→伊勢神宮へ［斎女・ヤマトヒメ（倭姫命）］→東征にあたってヤマトタケル→その死後，妃・ミヤズヒメが熱田に祀る→天智7年，新羅僧・道行この剣を盗もうとして果さず［皇居へ移す］→天武15＝朱鳥元年，「天皇の病いを卜に，草薙剣に祟れり［と出る］。即日に，尾張国の熱田社に送り置く」と数奇な転変を経ています。‘原日本神’の怨霊がそうさせたんじゃないかとも思えます。

6） 日枝［日吉］神社；賀茂［鴨］神社

（ヨウ） 日枝神社はかなり古そうだ。主神はオオヤマクイノカミ［大山咋神］，亦の名はヤマスエノオオヌシノカミ［山末之大主神］。この神は「近つ淡海国の日枝の山に坐し，また葛野の松尾に坐して，鳴鏑を用つ神ぞ」と「神代」のはじめのところに出てくる［『記』］。彼の父はオオトシ［大年神］――祖父はスサノヲ――，母はアメシルカルミツヒメ［天知迦流美豆比売神］で，豊作と水を司どる神だとされる。比叡山の東麓・坂本と京都右京区の松尾［松尾神社］に祀られた。彼自身はこのようにスサノヲの系譜にあるが，妃としたⓐタケタマヨリヒメ［建玉依比売命］は倭の鴨の池の豪族・賀茂［甘茂・鴨］氏の出であった。その祖，カミムスビ［神魂命］の孫・ⓑカモタケツヌミ［賀茂建角身命］の娘であり，オオヤマクイとタケタマヨリヒメの間にはⓒカモワケイカヅチ［賀茂別雷命］が生れた。そこから賀茂別雷［上賀茂］神社［ⓒを祀る］と賀茂御祖［下鴨］神社［ⓐⓑを祀る］が創設される。カモタケツヌミ［ⓑ］は神武東征の途上，「［頭］八咫烏」となって一行を導いたと『紀』は言っている。

オオヤマクイは以上の限りでは賀茂氏の入婿になったともいえるが，本筋に戻っていえば，彼の「日枝神社」は――天智の近江遷都の際，三輪山のオオナムチを勧請したが――やがて「日吉［ヒエorヒヨシ］神社」とも呼ばれるようになり，９世紀に入って最澄が比叡山に延暦寺を創建する際，同山の鎮守神として祀ることとしたため，「日吉山王社」として全国に広まった［‘神仏習合’］。今日全国の日吉山王社は3800にものぼる。

（マイケル） 天皇家も一目を置かねばならないほど賀茂氏の力は大きかったわけですね。10世紀中頃にはじまる朝廷の「臨時奉幣」（16社）の序列は，伊勢・石清水・賀茂（上・下）・松尾‥‥となっています。

7） ‘熊野三山’［ⓐ本宮；ⓑ速玉（新宮）；ⓒ那智 各大社］

（ヨウ） ‘熊野三山’という俗称を使って，いまある３つの神社［ⓐⓑⓒ］を一括したい。この表現には熊野信仰の本質がよく表現されていると思うからだ。‘三山’なのであって，‘三神社’ではない。‘三権現’と言う人も多いが，これは仏徒のいう‘本地垂迹’の見方からの名だから本来の名ではない。

だが，初めはどんな風だったかを知る人はいない。それは神官たちの説明では，文明年間［1469－1486］に，そして更に明和年間［1764－1771］に火災があって社殿をはじめすべてが焼失し，それを機に「イニシヘノ風ニカヘ」そうとしたが，「中世以来ノ事蹟一モ考フベキヨ

リトコロナク‥‥諸事アラタカニ造立セル神ノ如」くになってしまったという。この弁明は，しかし説得力に欠ける。長く守られてきた伝統があるなら，何もかも焼けたとしても再現できないわけはない。真相は古くからの神事が久しく行なわれなくなっていたこと，つまりここにいう「中世以来ノ事蹟」とは〈仏〉事として行なわれてきたのであって，純粋な〈神〉事は忘れられてしまっていたということなのだ。9世紀初頭，空海によって創められた真言密教は大日如来［＝大毘盧遮那］を主宰者とする胎蔵界マンダラの世界像を展示するのだが，日本の神々もその外縁に位置づけようという考えがこの熊野でも受け入れられ，それがやがて「両部神道」［大師流神道］として定式化されてこの山を支配してきたのだった。

しかしそれ以前に神社がなかったのではない。『三代実録』に貞観元年（865）正月，紀伊国の熊野坐神（イマスガミ），熊野早玉神（ハヤタマ）［いずれも従5位下］を共に従5位上とするという神階昇進の記事がある。延喜式［927年］にもこの両神社の名［祭神は記されず］があるが，那智神社の名はない。つまり熊野には坐神と早玉神の2神＝2神社だけが知られていたのだ。そしてこの2神はうえの貞観元年の授位の直後から従5位上→従2位→正2位→従1位→正1位［元慶3年(940)］と一気に極位にまで昇位されている。9世紀半ばから1世紀足らずの間に熊野2神は僻地の神から全土に知られる‘大神’になったのだった。これはいわゆる‘熊野御行’として知られる上皇たちの熊野詣と無縁ではない。それは記録に残る限りでも，宇多天皇1回（907年）→花山天皇2回［986・991年］→白河上皇7回［1090～1127年］→鳥羽上皇16回［1126～1153年］→崇徳上皇1回［1155年］→後白河上皇21回［1163～1192年］→後鳥羽上皇23回［1199～1222年］→御嵯峨上皇3回［1250～1257年］→亀山上皇1回［1281年］の75回に及んでいる。つづめていえば，延喜格の制定（907年）から承久の乱（1221年）まで――公卿権力の確立から没落まで――の時代である。どうしてこれら上皇たちは熊野へ熊野へと詣でたのか？仏教にいう‘末法’の世のはじまりへの恐怖をいう者が多いが，それは決め手ではない。密教にしぼって考えても，平安京の入口には東寺［教王護国寺］があり，高野山には金剛峰寺がある。熊野に行かなければ‥‥という理由はない。もっとも密教の‘即身成仏’の呪術的信仰を山岳での修行として実践する修験道は，平安中期にはその行場を大峰・金峰山から熊野へと延長するほどになっていたので，ここでの祈願に対する‘霊験’のあらたかなことの噂は京の貴顕の間にも拡まっていたに違いない。都から離れた，しかし都から地続きの鬱蒼たる自然の森野に祀られている――名もよくは知られていない――神々の坐（いま）す場として熊野が再発見されたのだろう。

（マイケル）　ということは，先生のいう‘原日本人’の〈カミ〉信仰の場である〈森〉の1つとして熊野信仰の原点があるということなのでしょうか。いま‘熊野古道’［「滝尻王子」～「湯峰王子」］の名で知られる参道はかつて‘蟻の熊野詣’と呼ばれたほどの賑わいをみせた跡だといわれますが，それでもまだ自然を残していて，近年には‘世界文化遺産’のうちに入れられたのだそうですね。

（ヨウ）　まさに行ってみなければわからないところだ。熊野の〈森〉として古代の日本人が崇めた

〈カミ〉があったのだが，それが人格神という形をとる〈神〉として‘神社’に祀られることはむしろ遅れたのだろう。そして熊野の‘神社’は充分確立をみる前に，真言仏教に占領されてしまったのだと私は思う。

祭神としてⓐ本宮には「家都御子（ケツミコ）」，ⓑ新宮には「御子速玉（ミコハヤタマ）」の名が伝えられているが，いずれも耳にすることが少なく，その由緒も明らかでない。そしてそのことがまさにこの熊野の地に生れた神々であることを証していて貴重なのだ。それなのに，江戸期の神官たちはこれだけでは恥かしいと思ってか，何とか『記』・『紀』の神話に結びつけようとして，ケツノミコはスサノヲの別名であり，ハヤタマはイザナミだと主張した。しかしまったく説得力はない。彼らの言うにはスサノヲは高天原から出雲へ降ったのだが，そこから熊野を廻って目指す「根の国」へ至った；だから出雲にも熊野大社があるというのだ。スサノヲの出雲での事績はあまりにも有名で私もそれに触れたが，ここ熊野で何かをしたという言い伝えは全くない。ただ両地に‘熊野’という地名があるというだけのことである。またハヤタマ神の名は，イザナギが黄泉の国に行ったイザナミを訪ねて仲違いし，離婚の決意を表明した際に生れた「唾（つば）く神」＝「速玉男（はやたまの）」だということからイザナギの別名であろうというのだが，こうなるとどう評したらよいものか。「唾（つば）く」というのは誓約の作法であり，その誓約の内容は絶対に縁を切るということであるのに，ⓑ熊野新宮では「結大神（むすびおおかみ）」［イザナミ］なる者を創作して，イザナギ・イザナミ両神を仲良く並べて主神としている有様である。贔屓の引き倒しだ。

以上の2神・2神社に第3のⓒ熊野那智大社が附け加えられた時点や事情についても全く説明がない。突然「熊野三権現」だと言い出すのである。仏教は神道とは違って特定の場所にこだわらないから，近くにある那智の滝も一緒にと考えた気持ちはわかる。〈森〉が〈カミ〉ならば〈滝〉も同じだろう。しかし簡単にわかったと言えないのは，この那智の祭神・「熊野夫須美（ふすみ）神」である。それはアマテラスとスサノヲの〈うけひ〉から生れた第5の男神「熊野久須毘命」だという説があるが，それがどうして那智に？という質問に答えられない。またこのフスミはうえに「結（ムスビ）」――‘産霊（ムスビ）’？――と呼んだ神と同じだという説もある。ではイザナミを祀っているのかと聞くとそうではない；フスミ神は「親神さま」であり，「大滝の御神体」はその子神・オオナムチであるというのが今日の説明である。わけがわからないが，ともあれⓒの祭神はⓑの一部分を割いて考えたものだということは確からしい。

（マイケル）　ずい分込み入った話なんですね。

（ヨウ）　いやこれでもひどく端折ったんだ。18世紀半ばまでの熊野では神々の前で僧侶がお経を読んでいたのだ。天保4年（1833）の調査には「イニシヘノ神官詳ナラズ，中世已来大抵ミナ清僧［出家僧］ナリシユエ本宮三昧僧ナトノ称アリシ‥‥」とか「那智山ハ祢宜（ネギ）神主ナク皆社僧ナリ社僧ニ清僧アリ妻帯アリ‥‥」などとある。諸神の「本地仏」としてはケツミコは阿弥陀如来，ハヤタマは薬師如来，フスミは千手観音‥‥という次第だ。そうしたことはここでは全く省いてしまった。

ここで私が多少とも整理してみせたところは，ひとつにはいま日本各地に伝わる神々の観念

がいかにいかがわしいかを確認することだったのだが，同時に日本人の心のうちにはここで〈森〉や〈滝〉に集約的に表現された自然への郷愁と畏敬の念が脈々と流れているということは確かだ。２つの点では鳥羽上皇も私たちも何の変りもない。

８） 稲荷神社

（ヨウ） イナリ神についてはそうむずかしいことはない。一番古い文字としては『山城国風土記』の逸文に，「伊奈利と称ふは‥‥伊禰奈利‥‥。遂に社の名と為しき」とあり，これがのちの伏見稲荷大社になった。イナリをただ音で書くのをやめて，その内容を示そうとして稲荷，稲生，稲成，飯成とさまざまな字を使うことになったのだが，そのなかで‘稲荷’がよかろうとなったのは稲を荷いでいる者，つまり人格神がイメージでき，またそのかついでいる稲穂はすでに豊かな収穫がもたらされたことをも物語っているからだろう。なおこの神は『風土記』に先立つ『記』・『紀』のなかにも何度も語られている。そのはじめはウカノミタマ［宇迦之御魂神］だ。『記』ではスサノヲとカムオオイチヒメ［神大市比売命］の第２子――第１子はオオトシ［大年神］――であるといい，『紀』はイザナギ・イザナミの「飢しかりし時に生めりし児を倉稲魂命と号す」と言っているが，要するに農耕神である。

（マイケル） またまた話を少しそらすようですが，僕が前から気にかかっていることのひとつは，スサノヲが中つ国に降りてきてまず食物をオホゲツヒメ［大気津比売神］に頼んだときのことです。ヒメが「鼻口また尻より，種々の味物を取り出して，‥‥進る」様子を伺い，「穢汚して」そうするのだと思って殺してしまうと，「殺されし神の身に‥‥頭に蠶生り，二つの目に稲種生り，二つの耳に粟生り，鼻に小豆生り，陰に麦生り，尻に大豆生りき。故ここに神産巣日の御祖命，これを取らしめて種と成しき。」とある『記』のあのくだりです。一般的には，人と人の食物との生態系的循理を言おうとするのでしょうが，それ以上に人と植物のいのちの同質性を強く考えているように思えます。

（ヨウ） 私も今そのことに触れたいと思っていたところだ。これらの植物と自分との違いを意識しながら，根っこのところで違いはしないことを知る；そういういわば‘植物的生命観’なのだ。

当面の論題に戻ろう。私が面白いと思うのはこの稲荷神があちこちで絵に画かれて遺っていることだ。にない棒の前と後に稲束をつけて歩いてゆく老翁という姿が一般的である。〈仏〉とは違って日本の〈神〉像は――‘僧形八幡神’のようなものもありはするが――極めて乏しい。イナリ神は例外だ。というのもこの神の姿はイマジネーションといったものをほとんど必要としない。年老いた農夫そのものを映せばいい。働く人が神なのだ。ただ問題なのはその絵の中にもよく画かれている〈狐〉の存在である。いわゆる稲利の眷属だが，どうしてそれがキツネなのか？尾が長く大きくフサフサしていて稲束のようだからという説明もあるが，あまり真面目とはいえない。事実として人里に近くキツネが沢山いたのだと考えるのが自然ではないか。水田を作るために山林・原野が開墾されてキツネの生息地が失われてゆく。その怨みをかわないために‘狐神’を祀り，なおそれで好ければ‘イナリのお使い’にしてあげてもいい。そういう協定が成り立ったのではないかと私は想像する。柳田国男は田のなかに多くみられる

「狐塚」と言われている土地を沢山調べて，そこには稲利の神を祀っていることが多いと報告している。

そこで狐を神とするなら，秋の稔りをもたらす田もまた神として祀られておかしくない。事実，〈山のカミ〉は春になれば里に降りてきて〈田のカミ〉になる；そして秋には再び山へ戻ってゆくと考える‘田のカミ祭り’が古くからあちこちの村でそれぞれの名と形をもって行われてきた。稲荷神はこれと結びついて村や里に拡がっていったのだ。

もっとも稲荷神社の数が激増したのは江戸中期以降だと言われている。商人の活動が活溌になり都市化が進み，稲利は商工業の繁昌をもたらす神だとされるようになった。江戸では「伊勢屋・稲荷に犬のくそ」，大阪では「病弘法，欲稲荷」という俗諺が流行した。

（マイケル）　真言宗の人たちはその大阪でのことわざのもととして，弘法大師と稲利神の‘契約’があると言いますが‥‥

（ヨウ）　それは伏見大社の「稲荷大明神縁起」に出ている話だ。前世において釈迦牟尼の説法の場に両者が同席し，弘法が自分は京都の東寺で密教を弘めようと思っているので，あなたも日本へ来てその守護神になってくれと頼み，稲荷はその約束を守って弘仁７年（816）の夏にやって来た，というのだ。これはむろん‘お話し’だが，真言宗徒と稲利大明神との協働は両者の全国展開に大きく貢献したことは確かだ。『稲荷大社略記』［昭和31年（1956）］は全国の稲荷神社数を30,750余社と記している。

９）　八幡神社

（ヨウ）　八幡さまはお稲荷さんと並んでいまの日本で最も多くの神社をもっている。その数は正確に数えられないが，一説に13,000社とも，また25,000とも言われている。だが八幡神の正体はと聞かれるとうまく答えられない。どうもこの神は他の日本の神々とは異質なところがある。

そもそも「八幡（はちまんorやはた）」とは何かということがわからない。みんなで色々に推理しているが，どうも説得力がない。こんなときは当の八幡神の「託宣」を素直に聞くしかないだろう。「古へ吾れは震旦国の霊神なりしが，今は日域鎮守の大神なり」「辛国の城に始て八流の幡を天降りて，吾は日本神となれり」［『八幡宇佐宮御託宣集』巻２，５（1313年）］とある。

（マイケル）　でもこれは随分のちの編纂です。大丈夫でしょうか？

（ヨウ）　‘科学’的でないというのはもっともだが，私はそういうときはアリストテレースの言葉を引くことにしている。曰く，「あらゆることがらに同じように厳密性を求めることをせず，それぞれの場合においてその素材に応じ，またその研究に固有な程度においてすることが必要である。‥‥」むろんこれは‘神託’という微妙なものだし，それも神官の間に言い継がれてきたものだから注意は必要だが，反証がないのなら，ひとまずそうとしようという態度なのだ。

で，話を続けると，この神は次のようにも言っている。「辛国の城に始て八流の幡を天降りて，吾は日本神となれり。‥‥釈迦菩薩の化身，一切衆生を度（ど）さむと念て，神道と現なり」［同上第５巻］。つまり，八幡神は中国から日本に渡ってきた。神とはいうが実は釈迦の化身，

つまり‘権現’なのだ，というのである。いわゆる‘本地垂迹’説が一般化するのは９～10世紀だとされているが，これはそのハシリなのか？八幡神のはやくからの〈仏〉の受容は広く言われているが，来日したときから‘習合’していたのかも知れない。『法華経』が，現に目の前にみるシャカは実は如来の‘化身’なのだと説いていたのだから，そうあっても不思議ではない。そしてこの点にかかわって大切だと私が思うのは――これまた後の記事であるが――『宇佐八幡宮弥勒寺縁起』［844年］が八幡神は欽明朝（538－571年）に豊前・宇佐郡馬城嶺にはじめて顕現したと言っていることだ。欽明『紀』にこれへの言及はないが，国の西の端，宇佐の出来事であるから注目されなかったのだろう。これが「釈迦仏の金銅像一躯・幡蓋若干・経論若干巻」の伝来［538年］に引き続いてのものであったと推定するのは不自然ではない。「仏の相貌端厳し」と欽明がショックを隠せなかったように，八幡神の神託も宇佐宮司には驚異だったろう。

宇佐神社の前史についていえば，宇佐氏はかつて神武が東征の途次，日向→筑紫→豊国の宇沙に到ったとき「その土人，名は宇沙都比古，宇沙都比売の二人，足一騰宮を作りて，大御饗献りき」とあって，古くから宇佐の地を支配する大豪族だった。当然この地に氏神が祀られていただろう。託宣をうけたのはこのウサツヒメの子尊である女弥宜［巫女］だった。そのあとこの神社に言及があるのは聖武の時代［在位724－749］に入ってからで，725年「菱形ノ小椋山ヲ切り撥ヒ，大御神宮ヲ造リ奉ル。則チコレニ移シ奉ル。‥マタ創メテ御寺ヲ造リ奉ル。弥勒（足）禅院ト号ス。‥‥宮ノ東ニ（日）足林ニ在リ‥‥」［『承和縁起』］とあり，これがいまの宇佐八幡宮の創始であるらしい。737年の記事には「‥‥八幡二社‥‥」［『続日本紀』］とある。そのあと，747年聖武は大仏造立に関し宇佐に遣使，八幡神はこれに対して「神我れ天神地祇を率ゐいざなひて，必ず成し奉らむ。事立つに非ず。銅の湯を水と成し，我が身を草木土に交へて障ることなく成さむ」［『続日本紀』］と託宣している。聖武はこれに応えて「大神ニ一品，比咩ノ神ニ二品」を奉った［749年］。東大寺大仏は751年に完成をみて，八幡神は東大寺鎮守とされた。この八幡神が八幡大菩薩とされるのは桓武の即位（第50代）の年であり，「元応元年（781）ノ初，神徳ヲ計量シテ，更に尊号ヲ上リ，護国霊験威力神通大菩薩ト曰フ」［『東大寺要録』］とある。天皇家に更に接近したのだろう。

しかしうえにみるように宇佐に初めに造られたのは八幡神宮と比売神社の２社だったのであり，そこに「大帯姫廟神社」が付加されるのは１世紀もあとの823年である。そのときからこの神宮に質的な変化が生じた。

（マイケル）　どんな変化なんですか？

（ヨウ）　オオタラシヒメは神功皇后だよね。それでまず「宇佐郡三座」［『延喜式・神名帳』927年］と言われるようになったわけだが，この第３の神社は彼女と彼女の「胎中」にあって新羅を攻略した応神大王を祀るというのだから，つまりは事実上天皇家の霊場となったことになる。そしてそればかりでなく「二之御殿」と呼ばれていた「比売神社」には「三女神」――スサノヲとの〈うけひ〉によってアマテラスが生んだいわゆる‘宗像三神’――も祀られることになっ

たのだ。誰がそうしたのかはわからないが，どうしてそんなことになったかは明白だ。宇佐へやって来た託宣神とこの地の地主神は地方神であることに満足できないで，中央に地歩を占めたいとやって来たがまだ足らない。宇佐神宮の祭神は実は皇室の祖神たちなのだとしたかったのだ。しかし皇祖といってもアマテラス→神武という本流は天武によってもう先取りされている。次いで著名なのは応神［ホムタ大王］である。彼は南九州の狗奴国の王子の出で，私の言い方では‘中国系王朝’の創設者である。皇統としてはいわば傍系であるが，北九州から出発し‘東征’して倭（ヤマト）王朝の権力を革新した大英雄である点では神武に似ている。そう考えてもともと何のつながりもない八幡宮に応神を合祀した。このやり方そのものは，熊野でも見たように，めずらしいことではない。

（マイケル） もともと‘託宣神’として現れたということ自体，政治的ですよね。〈神〉の側から〈人〉に言い寄ったのですから。東大寺大仏の守護神になったのは大成功でしたが，とうとう皇統の中枢部にまで潜り込もうとしたわけですか。

（ヨウ） そしてそれもまた成功した。860年［清和天皇の貞観２年］八幡神は山城国・石清水に勧請されたのだ。これはその前年の奈良・大安寺（真言宗）［←大官大寺（天武朝）］の僧・行教の奏請により実現したといわれるが，むろん彼個人の力によるのではない。真言密教僧は呪術的な加持祈祷を行うことによって朝廷内で重用されていたが，彼はそれだけでなく――武内宿祢の子孫であると称する――畿内の大豪族・紀氏一門の出である。この氏族は久しく紀州・日前（ひのくま）・国懸（くにかかす）神社――鏡を神宝として日神を祀る――を主宰してきたのだった。それにしてもその紀氏がなぜここで表に出てきたのか？あえて忖度すればこの少し前から藤原良房が皇嗣を左右し，娘明子を妃に挙げてその子・惟仁親王［→56代清和天皇］を即位させ，自らは人臣初の太政大臣となる［857年］という専横的振舞いをほしいままにするようになっていたことへの対抗を意識したのだったではないか。武内宿祢といえば神功皇后＝応神天皇を補佐した大功臣であることはいうまでもない。ともあれこうして八幡神社は皇祖をまつる神社として，伊勢神宮に次ぐ地位を占める石清水八幡宮護国寺に成り上ったのだ。

だが話しはそれで終らなかった。時代が降って権力が公家から武家に移るとき，八幡神は今一度変身する。清和天皇から出たと称する源氏の一門がこの神を自己の氏神と拝ぐことになったからだ。1063年源頼義が鎌倉由比鶴岡に石清水八幡宮を勧請したのをはじめとし，1180年頼朝が雪の下の地に移して鶴岡若宮と称し，1191年の火災の翌年，若宮後方の山上にあらためて八幡三所を勧請したのが今日の鶴岡八幡宮である。この年頼朝は征夷大将軍に任じられ，以後八幡神は鎌倉幕府の守護神として厚い尊崇を受けることになった。

伝承はいわゆる‘前九年の役’［対安倍氏（1051－62）］，‘後三年の役’［対清原氏（1083－87）］で奥州を征圧した源頼義・義家［八幡太郎義家］親子の軍功をさまざまに伝えているが，両名は軍利があれば鎌倉から奥州までの街道10里毎に八幡１司を建立することを誓ったと伝えられる。八幡神はすでにそれ以前から各地の荘園・村落にそれぞれの荘官・地頭の手によって守護神として勧請されることが多かったのだが，源氏の抬頭・権力掌握によって八幡社は全

日本に拡がったのだった。

八幡神はこの過程で‘託宣神’から‘守護神’へと変態していった。それもはじめは武人たちが自ら戦勝を期して奮闘すると神前に誓いつつ，神の助勢を期待するのだったが，戦乱が一応治まるにつれて，村々の庶民の日々の平和な生活を守る神として‘鎮守’とみなされるようになっていった。これまで日本の神々はその神像を顕わすことはほとんどなかったのだが，この頃から八幡神は――「仏神（ほとけ）」として――「僧形八幡」という姿を見せるようになった。「僧形」といっても如来像でないのは勿論，きらびやかな飾りをまとう菩薩の姿でもない。頭を青く剃った円頂の頭部，身に粗末な衣をまとって袈裟をかけ手には錫杖をもつ地蔵菩薩の姿である。地蔵菩薩は冥土の入口で死者を迎え，地獄にまでついて行って悪業を犯した者たちの弁護に当り，自らの成仏は願わないという有難い仏であるから，それにあやかる姿をとる八幡神を人々が崇めたくなるのも自然である。八幡神はこうして，古代から近代に至るまで，常に時流に乗って，天皇→貴族→武人→庶民の要望に順応してきた。はじめに私がこれはどうも日本の神々とは異質なのではと言ったのはこのことなのだ。

（マイケル） さてここまで皇統の外に生れた神々を随分沢山みてきましたが，つまりどういうことになるのでしょうか。いろいろと面白い神々をみたとは思いますが，正直なところアッと驚くような存在とは思えない。〈信心〉という限りなら原始的な霊神が古くから各地方にあったということはわかりましたが，〈宗教〉的な成熟はやはり中央の権力の周辺で行われ，次第に地方に及ぶことになるのが自然だったということなのでしょうか。かつて聖武天皇が‘天平’の改元［729年］にあたって下した「詔」のうちに「諸国の天神（あまつかみ）・地祇（くにつかみ）は，よろしく長官をして祭を致さしむ。もし限りの外にまさに祭るべき山川あらば，祭ることを許す」とあるのは当時の神観念を正確に言いあらわしていたのだと更めて感じます。

10. 《霊（れい）》――日本人の〈カミ＝神〉

1） 死なないもの＝〈生霊＝死霊〉

（マイケル）〈神祇〉というテーマでここまで勉強してきたのですが，次の章に進む前に少し頭を整理しておきたい気がします。

（ヨウ）「学んで時にこれを習う」というやつだね。私が思うには，日本の〈カミ＝神〉観念の真髄は《霊》なのだ。普通には〈死霊（しりょう）〉が一般的だが，実は〈生霊（いきりょう）〉もある。というより〈生霊〉＝〈死霊〉なのだ。

〈霊〉のことを‘魂’という者もある。それでもいい。〈魂〉とは‘肉体’とは区別される心の働きだ。そんな〈霊〉とか〈魂〉とかいうものがあるのか，ないのか‥‥という話になるのだが，‘生きている人の心に働きかける他者の記憶’といえば誰も否定しないだろう。記憶はほかの動物にもあるが，２足歩行になって大脳が肥大化した〈人〉はいやでもそうした余計な知識を内蔵するようになった。

（マイケル）　じゃあ，〈生霊〉と〈死霊〉とはどう違うのですか?

（ヨウ）　常識的には，肉体が現になお生き続けている人の外へ向けての心理的な作用力が〈生霊〉で，肉体が滅びてしまって他者の記憶のうちに呼び起される力が〈死霊〉だが，いずれであっても，〈霊〉はその当人の生死にかかわりなく発現するのであってみれば，その作用力を触発する存在はすべて霊そのもの，または霊的なものということになろう。私たちが日本の〈カミ〉を森，ヘビ，川，木，石，雷，雨，風などにみたのはそれだったのだ。角度をかえていえば，〈人〉が自己の〈生存環境〉と意識するものすべては〈霊〉的である。しかしこれを大〈自然〉の力と要約してしまってはいけない。そうするから‘万霊神’とか‘アニミズム’といった一般的説明が出てくる。そうではなく，そのときどきの私の心に働きかけてくるものが〈霊〉＝〈カミ〉なのだ。自然環境にしても，それは土地土地で異なる。日本人をとりまく自然は私が廻ってみた限り，世界で最も人に優しい。わけもなく感謝したくなってもおかしくない。稲荷神などはその最たる有難い〈カミ〉だと思われる。

2）　優れた霊が〈カミ〉なのだ

（ヨウ）　人の〈生霊・死霊〉に限ってみれば，「神霊」から「幽霊」までさまざまあるが，私たちはどうしてある特定の霊を記憶のなかから呼び出すのか？きっかけはさまざまだろうが，それらに〈人〉には及ばない力があると感ずることが最大の理由だろう。優れている；卓越性（アレテー）がある‥‥だから尊敬する。「神祇の霊」は古くは［あまつかみ・くにつかみのみたまのふゆ］と訓じられているが，［みたまのふゆ］とは「霊魂の威」であり，「威」とは（いきほい）の意味である。裏返していえば，生きている私たちはそれ相応に謙虚で，先人，先輩，親友‥‥を慕っているのだ。

因みにいえば，日本人は天国（エデン）とか極楽・浄土といったものを必要と感じていなかった。よその国の人たちがそういうからそんなものもあればとは思うが，本心からではない。この現にある日本の霊の世界こそが天国であり極楽なのだ。

3）〈死〉の素直な受容――美しく咲いて散る花

（ヨウ）　コノハナサクヤヒメ（木花の佐久夜毘売）とイワナガヒメ（石長比売）の話は有名だ。ニニギがコノハナサクヤヒメを見染めて娶ろうとしたとき，彼女の父オオヤマツミ（大山津見神）は彼女の姉イワナガを副えて送り出したが，イワナガは「甚凶醜（いとみにく）きによりて，見畏みて返し送」ってしまった。オオヤマツミはこれを「大（いた）く恥ぢて」イワナガをお側にお使いになるなら「天つ神の御子の命は雪零り風吹くとも，恒に石（いは）の如くに，常（とき）はに堅（かき）はに動かずまさむ」；コノハナサクヤをお使いになるなら「木（こ）の花の栄ゆるが如（ごと）栄えまさむ」，そう思って奉ったのだ；だから「天つ神の御子の御寿（みいのち）は，木の花のあまひのみまさむ」と予言した。これによって中つ国に生きる人たちはすべて〈死〉を免れないことになったというのである。

これは他愛ないエピソードの１つだとは思えない。〈死〉は誰であれ生きている人にとって大問題だ。とくに死んだあとどうなるのかが気がかりだ。

（マイケル）　僕がたまたま読みかじった本のなかに釈迦の生きた時代に遠くない「カータカ・ウパ

ニシャッド」［BC.350－300年］という文献が引かれていて，そのなかでゴータマ・ブッダとヴッチャという名の遊行者の議論がありますが，こう言っています；――「ヴッチャよ，われは》タターガタ［＝如来］は死後存す；これは真なり，他は虚妄なり《というかくの如き意見なるには非ず」‥‥「ヴッチャよ，われは》タターガタは死後存せず；これは真なり，他は虚妄なり《とかくのごとき意見なるには非ず」‥‥私には妙にこの問答が耳に遺っているんですが，おシャカさまにも死後のことはわからないんだなあ‥‥と何か安心したのでした。そこではどうも「再死」――１度死んだあと，もう１度死ぬ――を避けたいということが問題になっていたようですが，キリスト教の‘最後の審判’もやはり「再死」ですよね。やっぱり恐いんですね。

（ヨウ）　ところが日本人には死後の憂いは深くない。木に咲く美しい花を愛でながら生き，散るのは止められないが，そしてそれが個体の生の終りだとは思いながら，いつかはまた実生（ミショウ）の芽生えが有って花を結ぶ時もあるだろうと安らいだ気持ちで死後を考えられる。それは１つの節目でしかない。日本人の死生観てこんなものだと言っているように思う。潔さといっても，淡白だといってもいいだろう。因みにオオヤマツミは別のところでコノハナチルヒメ（木花知流比売命）をも生んでいる。オオヤマツミはこの国の大地の大神で，その上にコノハナサクヤとコノハナチルが生を享けたのだ。咲くのも散るのも美しいということになると，これはやはり〈桜の花〉なんだろうね。でもこれは第３章〈恋〉の主題だ。

４）〈浄〉;〈禊（ミソギ）・祓（ハライ）〉――生命（いのち）の再生儀礼

（ヨウ）　日本で〈浄〉というのは‘生きているもの’，〈不浄〉というのは‘死んだもの’だ。これはオシャカ様が「身不浄」と言ったのと正反対だ。〈祓〉というのは衣服についた〈死〉の穢れを払い落すとこと，〈禊〉というのは更に裸になって〈死〉の匂いまで消してしまおうという行動だ。これは日本人にとってはごく日常的に思える儀礼だが，他の国の人から見たら何か神経症のように見えるかも知れない。

（マイケル）　インドのガンガー河のほとりのヴァラナスィ［ベナレス］で‘沐浴’したとき，ふと三島由紀夫の小説の一節が思い浮かびました；――「ベナレスでは神聖が汚穢（おわい）だった。又汚穢が神聖だった。――しかし日本では，神聖，美，伝説，詩，それらのものは，汚れた敬虔な手で汚されるのではなかった。これらを思う存分汚し，果ては絞め殺してしまう人々は，全然敬虔さを欠いたしかし石鹸でよく洗った小ぎれいな手をしていたのである」［『天人五衰』］

（ヨウ）　インド人の〈浄〉には‘〈自然〉［＝ブラフマン］への帰滅’という哲学がある。それに対して日本人の〈浄〉には精神性が稀薄だ。「自然はいい，自然はすばらしい」と口々に言うが，本当は〈自然〉嫌いなのかも知れない。つまり日本人のいう〈不浄〉＝〈死〉を直視したくない。ということは実は〈生〉についても深く考えない。キレイ好き，潔癖性というのはそれ自体悪いことではなかろうが，ともかく中味がないのが情けない。

５）〈託宣〉と〈うけひ〉――神のわざと人のわざ

（ヨウ）　日本の神話は〈託宣〉に満ちている。でもこれはどこの国でも大同小異だ。モーセもキリ

ストもムハンマドも〈託宣〉者として働いた。日本の巫女（みこ）と違うのは，子どもでなく立派な大人だし，弁も立つところだ。そして時に応じて奇跡（ミラクル）［奇術］を披露する。日本の神にはどうもそうした大向うをうならせる技が乏しい。生真面目なのである。だが託宣というのははっきり言えば，〈神〉の〈人〉への言い寄りであってそう崇め奉るべきものでもない。ほかの神でなく自分を祀ってくれというのだ。ユダヤの神・ヤハウェなどは‘私は妬む神である’と随分正直なことを口ばしってもいる。だから日本人もそう引け目を感ずることはない。注目すべきは〈うけひ〉，つまり当事者相互の誓約だ。スサノヲとアマテラスの間の〈うけひ〉から歴史らしい歴史が始ったのだから大切なものなのだ。これは〈神〉に頼るのでなく，〈人〉同志の約束事とその結果なのだから，〈人〉の主体性と能動性は――託宣とは違って――はっきりしている。スサノヲから仕掛け，スサノヲの勝ちになったのに，アマテラスが奇弁を弄して大事件になったのは遺憾だが，これが〈賭け〉の原型であることをよく見ておかなければならない。〈賭け〉は人生そのものだ。日本人の弱さはこれを楽しもうとしないところにある。優柔不断というか，自信がないというか‥‥。

6）《祭り》――〈祟り〉と〈護り〉

（マイケル）　神が人に言い寄るという話が出ましたが，武蔵の大国魂神のように‘もしわしを祭らなければ世の平安は保証されないぞ’とほとんど脅しのようにせまった神もある。こんなのを〈祟り神〉というのでしょうね。もっとも‘天神さま’のように菅原道真自身は何も言わないのに，彼を苛めた連中が勝手にこわがって祟り神だと言いふらした場合もあった。あとになって，あれは‘学問の神様’だと訂正したから，彼もまあ勘弁しようかとなったのでしょうが。ごくまれには根っから性悪そうなヤソマガツヒ（八十禍津日神）やオオマガツヒ（大禍津日神）――どちらもイザナギの祓った死の穢（けがれ）から生れた――とか，「邪神（あしきかみ）」と名ざされたアマツミカホシ（天津甕星）といった神たちもいたというけれど，ほとんどの日本の神々はお人好しなので，〈祟り神〉も条件次第で〈護り神〉に変身するようにみえます。

（ヨウ）　確かにいま思い返してみると，〈祟り神〉は古くから神話に出てくる。垂仁天皇の息子のホムチワケ（本牟智和気）は成人しても口がきけなかったが，これを「太占（ふとまに）」で占うと「その祟りは出雲の大神の御心なりき」とわかって，現地まで行ってこれを拝んで治っている。また天武天皇の病気が重くなった時，この「病を卜（うらな）ふに，草薙剣に祟れり」と出て，即日剣を熱田神宮に送り返している。当人の意にそわないでこの世を去った〈神〉が〈人〉に文句をつけに出てくるというのは有りそうなことだね。

で，人々はどう振舞えばいいのか？方法は唯一つ，神々を《祭る》のだ。出てこない神々も出てきた神々もみんな祭ればいい。神々の個性があるから祭り方は工夫しなければならないが，祝詞（ノリト），御神楽（オカグラ），山車（ダシ），御輿（ミコシ）‥‥それぞれの神が喜べば何でもいい。だが，」ここで大切なのは〈神〉と〈人〉との直接の出会い・触れ合いだ。大昔風にいえば「直会（ナオライ）」で酒を酌み交し，分け隔てがなくなって一緒に繰り出す‥‥そういうことになる。にぎやかで威勢がよく，そこそこ破目も外して，ただ楽しい‥‥これが日本の《祭り》だ。理屈なんぞクソくらえだ。日本の

〈神祇〉は《祭り》に総括される。

7） 支配者のための〈神〉造りの不成功――〈天皇〉の神化と人間化

（ヨウ） こんなことを口走ると，そんなアナキーな話しは止めろ；われわれは誰もが崇め奉る‘ただ１人の神’を必要としているのだと抗議する人々もいそうである。こうした人々は日本の世俗的支配者を権威づけたいのだ。

しかし，私が日本の神々は《霊》だと結論したのは意見ではない。事実である。それなのに，天武天皇はその事実を越えて「日神」［アマテラス］を唯一神に位置づけ，自分をその「日継ぎ」である〈明神（アキツカミ）〉と自称した。この着想は革命的だったが，実践的には成功しなかった。「神祇官」を創設して神祇を独占したのはよかったが，その神々に位階を与えることによって，自身を神の上に置く僭越をあえてした。彼にとって必要だった神は，彼が頭上に戴く‘宝冠’か王座の背後を照らす‘光背’として設計されねばならなかったのに，彼の足下にかしずく脇侍におとされてしまったのだ。「明神」の実質は天武１代で消失して，名ばかりのものになり，以後幾多の曲折を経て昭和天皇が「天皇ヲ以テ現御神（あきつみかみ）ト」するのは「架空ナル観念」だったと反省するに至ってその名も消滅した。もともとないものを創り出すのは不可能に近い。日本の社会体制はウマヤド皇子のいう〈和（ヤワラギ）＝蘇（アマナイ）〉から一歩も進んでいないのだ。

8）〈霊〉の働き――人の〈脳〉の自己抑制

（ヨウ） だが，‘霊としての神’（a）じゃ役に立たない。‘唯一神’（b）であってはじめて神なのだ，というのではない。確かに（a）は（b）のようにこうせよああせよといってはくれない。しかし人々の相談相手になってくれる点では（a）（b）に差はないのである。人は‘自由・自在’に生きたいが，いつまでも何もしないではいられない。何かを‘意志’して行為する。この‘〈自由〉の放棄＝〈意志〉決定’を自覚的に媒介し動機づけるのが神なのだ。いまあるままの自分，これを‘第１の自己’と呼べば，神は‘第２の自己’＝‘反省する自己’だ。そんなものはいらない，おれの第１の自己は第２の自己を内包している；やりたいようにやるまでだ，という人もあるだろう。しかしこれは少数派だ。というのも，（b）の神の存在領域は限られているが，（a）の神はこの地球上に偏在しているというのが事実だからだ。人は好むと好まざるとにかかわらず〈カミをもつサル〉になってしまった。人の〈脳〉はこの世の支配者として一途に「脳化社会」を創り出そうとしている。だから‘人の〈身体〉はただセックスと暴力でこれに反逆できるだけだ’という悲観論も出てくる。しかしこれはひとつの警句としては面白いが視界がせまい。近頃のアメリカと日本でなら通用しそうな議論ではあるが。私たちが人の歴史から帰納できることは，人の脳はむしろそれなりの自己抑制力＝‘第２の自己’をもっているということ，そしてその‘第２の自己’は‘第１の自己’のなかにではなく，その外に置かれているとき最も確実に働くだろうということなのだ。自分を神と思ってしまう者は不幸だ。

こんなことで中間的なまとめになるだろうか。

（マイケル） エエ，僕にとってはこれで充分です。ひと安心して次の〈釈教〉の世界に入ってゆけそうです。